爾時、こゝに寶玉商は、大さたとへば月輪の如き眞珠を、腕に、尊く恭しく抱く眞似して、

「抱いて、御新造が言ふんだね。――

（私の肩を抱いて下すつて、「構ひませんとも、こんな名で貴女の生命が助かるんですもの。嘸ぞ此の情人も嬉しがるでせうよ。」とおつしやりながら、お美しい、清い襟を、輕く其の玉章でおたたきなさいました。私の目には、其の玉章が、嬰兒の時しか覺えのない、實の母の、暖い玉の乳房に見えました。）――

――とね、抱き合ふ顏を見合せて、玉章を眞似して、胸をたゝきながら話して聞かせる御新造の白い手が、」

また、唯寶玉商の目には、お縫の仇氣なき口に含まする、乳房に見えたと言つたのである。

――

「……

（お縫ちやん、そして母樣が其の時ね、名を讓る熨斗がはりに何か一つ五もくの中を讓りませう。清元か、長唄か、常磐津か、とお言ひなさるのが、富本さへ、薗八さへ名取の方、踊はもとより土地での御名譽。唯あやかりますだけに、出來ぬながら其で座敷を勤めて居ります、扇子を、と申したら、「ぢやあ、それを讓りませう、しつかりなさいよ、照吉さん、」と凛と居直つて、おつし

やつた。私は可恐かつた、嬉しかつた、勿體なうございました。

其の時切、もとの照吉姉さんは、お座敷で踊の所望がありましても決してお立ちなさらない。強ひてと言はれると、今度の照吉をお呼びなさい、踊はあの妓に遣りました、と私を呼んで下さいました。……日本一のお志。……お縫ちやん――たとへお行方が知れないでも、其の母樣を持つた貴女、貴女の身體は皆珠玉です。爪を切つても三日月形の指環の飾に成るものを、生命より大切な操にかへて、黑金剛石を欲しがるなんて、罰が當る……お縫ちやん。）――

娘は聲を揚げて泣いたんだ。」

――石鹸球屋もほろりとし、鰌屋も目を擦つた。

王將

五十五

「人間は氣一つだ。」

寶玉商も語りながら、鼻つまらせて首垂るゝまで獨で頷いて、

「此の意見なら石にでも合點々々をさせられるが、五千兩の黑金剛石を目の前で微塵に碎いた後

でないと利めがない。人間の教と、鬼神の枕頭に立つた託宣ほど難有味が違ふからね、別しては眞心だよ。絹絲のやうな手の一打で、寶石を打つた力が餘つて、小筐の模樣の獅子が碎けた。此の意見は、外飾と虚榮の、其の獅子よりも、虎よりも猛く可恐い、娘の骨髄に透つたらう。——扨て手を取つて、しげ〳〵と藹たいほどの、お縫を見て、

（名を頂いてからと云ふものは、此の二代目の照吉は、果敢い勤めも運が開き、言ふ目が出ました。……それが浮べる雲にもせよ、淺はかな心には榮耀と誇り、榮華を驕る身に成つて、寢る時に向けないまでも御機嫌うかゞひの、足は遠のき、緣起棚のお燈明でお顏は見つつ、御神燈の影のお姿には御不沙汰をしますうちに、貴女の母樣は新橋をおひきなすつて、矢張り繫る緣でせう。——中度、此の濱町邊で、小氣轉な料理屋をなすつたさうですが、……北海道とおつしやつた、其の玉章の方のためだと言ひます。——お達引が强いから身代をお疊みなすつて、今はお行方が知れません。

——お縫ちやん、お新の此の照吉は目の覺めるのが遲かつた。……先の照吉姉さんには、廓に在らしつた頃に兒があつて、いま、それが、（突羽根の貴女だ。）と言ふ事を、餘所から思掛けなく聞きましたのは、水神で、先刻の三人が、貴女を鬪取りにして居たのを見たと、そんなに時も日も隔てる間がありません。

私は覺悟をしたのです。——）

〔前の夜江月園の奥二階で、板倉に誓つたのはそれであつた。〕

（江月園を地所ぐるみ賣りました。が、こんな稼業に借金はあり勝、酒屋新屋の勘定から、隙を遣る女中たちの手當までして、思ふ七分はなくなりました。が、それでも心は、屹と通つて、黑金剛石は快く手に入りました。あの艶のあつて輝くので、お縫ちやん、貴女の黑髮一筋だけは御守護が出來たと存じます。

今日からは、乳母ともなり、女中とも成つて、貴女の影身に附添ひませう。まだ、石を買つた殘のお金子も少々は持つて居ます。料理人も取かへて、お店を立直して御覽に入れます。お煩くて、お可厭でも、最う此切、歸る家も行く處もないのですから、お座敷の持運び、拭掃除から、洗濯もの、下働きもする氣です。これ見て頂戴、お縫ちやん。——）

涙を拂つた袖を返して、袂から出したのは、淺葱の金紗の襷だつた。……襷だつた……何と何うだい。」

語る寶玉商の目がうるんで、

「——行屆いた事の難有さは、扨て、更めて御新造が私に向つて、（旦那、お商賣ものに失禮をいたして濟みません。唯何事も此のお娘の、お可愛らしさ、お美しさ、御堪忍下さいまし。……お

酌をしませう、旦那。あゝ、お銚子が冷めました。）

と襟を提げて紋着の、其の態度で、鼻筋がスッと通つて、立たれた時は、私は口が利けなかつた――咽喉へも口へも通るものか。

時に、何と鰌屋さん、お前さんも、此の小袖のいきさつを聞かせないかい、私は最うね、其の時から、ぽかんとして、石鹸球だか、寶玉だか、世間の分別がつかなく成つた。――一寸觸らして見せておくれ、氣障だがね、此の小袖があり、帶がありやあ、私は、石鹸でも、鰌でも賣つて暮す。」

と小袖の裾をそろりと手に掛け、引いて視て、

「水神か、龍女か、晉賢菩薩のお血脈とゾッと身に染む……鰌屋さん。お前さん、此の小袖一揃ひの、いきさつを聞かさないか、さあ。」

「旦那、一枚差上げても可うがすぜ。ト金が欲いな、此の處。」

鰌屋が天秤に跨り直つて、盤面に望んだのは、折から四五人、人立ちがしたのである。……いづれも、辨當殼、道具箱、揃の半纏は近い邸の普請場からの歸途であつた。

葉卷の薫、芬として、着流しで、帽のない顏を交へて差覗いたのは、其は板倉光年である。雀の緣から見透しの崖の上なる、此の人立と、由緣も深き袖の色に、魂を引かれたのは言ふまでも

なからう。

「や、何だ。」

「鰌屋の王將がねえぢやねえか。」

「馬鹿にしてら。」

職人が口々に聲を合せて哄と笑ふ。あはゝはゝ。

石鹸屋が其の王將を抓んで、熟と視て居た。

「此の間は、法廷で、……」

不意に板倉が、其の親仁を視て聲を掛けた。

「岡澤刑事。」

「あ、裁判長閣下。」

と思はず云ふ。石鹸屋の親仁の皺だらけな其の面へ、盤ぐるみ、將棊をパッと擲つて、鰌屋がスックと立つた。

「馬鹿にするな。」

と一喝するや、天秤を拔いて引そばめると、通魔の如く眞黑に衝と飛ぶ。

「や、鞄がない。」

寶玉商は腰を拔いた。
「金剛石、紅玉、眞珠、翡翠玉、綠寶珠、大泥棒。」
「そら、泥棒だ。」
「泥棒だ。」
追掛けた職人たち、坂下しに追縋つたのが、すくひ投げに、下から投げた天秤に足を搦めて、パッタリ躓くと、折重つて、將棋倒しに、すてん〳〵、と目刺鰯で倒れる。
板倉は胸に手を置いて、從容として言つた。
「――惡かつた、岡澤刑事、何う云ふ風に責を負はうか。」
名探偵、柊の甚十郎は、素早くかはして、肩で取つた、將棋盤の裏と表を、撓つ、瞟つ。さすが額に汗したが、此の時大口を開き小鼻の皺を伸して笑つて、
「はゝ、賊だ、些と大いばかり。閣下、これは老人、係ではありません。御懸念御無用に遊ばされい。よぼ〳〵隱居が御奉公をさめに一骨折つて居りますのは、××主義者の內偵でな。彼奴め、頭目かに見えまするで、何か、此の將棋盤、駒の類が、祕密の書類かと存じ、大抵苦心を仕つた。……大盜賊で先づは安心。はゝ〳〵、老人一肩拔けましたて。――いや、銀座の旦那、心配をなさらぬが可い。彼奴は、此の鼻毛を、はゝ〳〵、柊のとげ拔きを遣りをる洒落ぢや、あれだけの者は、

人情を知つた御仁に迷惑は決して掛けません。――御歸宅以前に、最うあの鞄は歸つて居るて、……お店へな、はッはッはッ。」

舟の行方

五十六

「姉さん、姉さん。」
低聲で、
「御新造さん……」
「……」
聲を潛めて、
「おい、照ちやん。」
「えゝ、」
つか〳〵と背後から寄つて、肩を擦合せて立つたのは、絣の袷に袴を着けて、羽織も着ない書生風の男である。

其の月の二十四日、清正公の縁日で、門を左へ、廂合の露地を抜けると、濱町二丁目から三丁目を大川端へ出る仕舞屋並びの、軒燈籠も色めく中に、一處材木の置場が暗く、中空に、すつくと一株天をさして、棕櫚の樹の青い星を梢に掛けた、急に町が違つて、一落渺々として猛獸つかひの小屋あとかと思ふ處がある。

すぐ前途には、枡田家とか云ふ鳥屋の總二階の廣く大いのが、高く大川の水を電燈に映して白い。

「誰方。」

お新は湯上りの薄化粧、尤も、縁日へ寄ると云つて、濡手拭は番臺に預けて居た。

袴は力ある寂びた聲して、幽に笑つて、

「しばらく。」

「誰方。」

「綾瀬の毘沙門よ。」

「あら！」

「叱、今夜は追剝はしやあしない。が、縁日で別嬪を張るのに、野暮だと思つて御存じの長い鎗を忘れて來た。刃物がないと形が附かねえ。……お前、其の帶の間に持つてるのを俺に貸しな。」

「お賽錢の財布ですか。」

「ピカツと光る、が、切れものよ。」

「え。」

「筑前國美囊郡美囊村住人、世が世であらば御番鍛冶さ。……肥後守兼光が鍛へた三枚刃打合せと云ふ小刀、然も大形で五十錢の奴だ。」

「まあ、そんなものは持つちや居ません。」

お新は思はず、帶を壓へて、肩で背く。

「清正公樣を拜むものが、毘沙門天に何を祕す。失禮ながら兄弟分だぜ。恁う、お前は、御堂前でお蠟を上げて、すぐに歸らうとした處を、お賽錢が光つたか、小坊主に進められて、奥で御開帳を拜んで出たらう。

時間が遲いや。門の傍は人まばらで、もう店を了はうかと、笠を仰向けて、手甲掛けた手で空模樣を視めたつけ。小刀賣の前へ一人で蹲んで、(よく切れますか。)と念を入れて、朴の木をすぱツと切らせて、一拭ひさせて買つたんだ。湯上りの艶麗さ。が、それだけに尙ほ可哀だ。伯爵の御臺所が、菜切庖刀を買ふやうに……寞れたな、照公。」

と輕く背に手を置いた、が、聲は重く沈んだのである。

「義理、人情だ、それも可しよ。が、あの傍の石燈籠の蔭で、俺が書生節の讀賣をして居たのをお前は知るめえ。そんな事ぢやあ、其の小刀は、なか〳〵思ふやうに使ふ處へ使へやしない。門並だ、人が聞く。……さあ默つて出しねえ。留めるんぢやねえ。綾瀨の兜で、睨みの利くのが後見して遣る！出しなよ。」

「……兄さん。」

「可し、預かつた。——あゝ、十年ぶりで、其の兄さんを聞く奴さ。……いざ、と云ふ時、此の小刀は切れようぜ。——突羽根へ歸る路ぢやねえ、何處へ行く。」

「大川端に、板倉さんがおいでなんです。」

「一所に行かう。安心しねえ。何を言はうと話さうと、傍に居る俺は木彫の木像だと思つて、決して遠慮をしちゃ不可え。見て惡い事は見ず、聞いて惡い事は決して聞かない、誓つて聞かない。先方は、板倉光年だ。男の此の意氣は屹と分る。第一、一大事を話すのに、さし向ひぢゃ通りがかりの人目に着く。俺が傍ら見張りをして遣ら、お照さん。」

お新は、默つて頷いた。

五十七

板倉は、星稀なる夜の暗闇の川端に、唯一人、大川の水を踏むが如く彳んで待つて居た。

「あゝ、其の時の鰌屋さん。……お心意氣は分つて居ます。お新と此處で、腹藏なく談話をします。」

砂利に蹲んだ鰌屋の黑い影は、くるり、と背後向きに蹲まつた。

「先生、——ようこそ。」

「勿論。……あれ以來、私は呼出しの手紙を待つて居たんだ。今朝着いた。……小照——いや、お新さん、お前が指揮をして寄越した、今夜出合ふ處は此の大川端、侯爵細川家の黑塀の前だ。……此處は、あの場所だ。……五年前、お前を毀誹し、汚辱し、蹂躙した小齋田儀一を蹴殺した處だ。此處で逢はうと言つたので、私は既に半ばを悟つた。既に覺悟をして來たが、……しかし、更めて、あの時約束した返事を聞かう。——小齋田を私が殺した八月二十九日の夜午前一時、其の以前に、其の以前に……お前は私の外に、お前の操を……」

「先生。」

確と取合つて顏を見て居た兩手を離すと、其の手を男の胸に當てて、お新はハツと面を伏せた。

「……生命を棄てても、申譯がありません、一日、一日、たつた一日遲かつた、……其の前の日の晩に、伊豆へ連れて行かれた客に、其の客に、——口惜い、私、はじめて酒匂の松濤園で、……

……」
「可し、可し、可し、其も皆天命だ。」
「貴郎は、これをお聞きに成ると……」
「自決するのよ。」
「と、おつしやるのは？」
「自殺だ。」
とばかり言つた。……
「私も死にます。」
お新も凛として言つた。暗をすかして、
「大さん、聞いて居はしまいねえ。」
黒い影は、ビクとも動かず、磐石に只似たり。
「先生、……私も新橋の照吉です。……板倉光年の女房です。死ぬ前に、今、仕事があるんです。
——あれ、御覽なさいまし、兩國左右の灯は、此の大川の水の黒髪に、紅い、蒼い、碧い、綠に、輝く寶玉を飾つた大な櫛のやうに見えますのに、あれ、此の一方の新大橋は、可恐い沼の面に、蛇、蜥蜴の目が淀んで居るやうに見えませう。——大橋を越えた向う河岸の、あの倉庫前の、灯

の一瓦絕えた處に、惡魔が居て潛んで居ます。
あれは突羽根の料理番、傳次郎と云ふ獸が、船で鰻を釣つて居るんです。
私は、貴下に、二三年の間、お暇を頂き、此のお返事を延して頂いて、——恩人の娘、突羽根のお縫さんを、安心の出來るまで後見しようと思ひました。
が、最う其の日から、片手でお客の通ひをする、片手には、針を持つて身を守らねばならなかつたんです。傳次郎が袖を引きます。袖口へ手を入れます。腐れ玉子の下司板が、まあ、なめ過ぎた、拂つたくらゐでは爪を引かない、針で突いて突退けました。
私が、身に替へ、家に替へ、名に替へ、何よりも貴下にかへてまで、清く、尊く、曇らぬ玉で守りたかつた、お縫さんの操はね、……お縫さんの操はね、身體はね、身體はね、最う其のだらけた癩見たいな料理番のために、傷ついて居たんです……汚されて居たぢやありませんか。
はじめは甲州の大盡だと言ふ觸込みで、せつ〳〵とお客で來て、お縫ちやんを對手に飲んだ揚句が醉つて泊らうと言つたのを、そんなお客に馴れて居た引手茶屋の人たちだけに、一夜寢かしたのが過失で、お縫さんは縛られたんです。
養母と云ふのは足腰の立たない病氣最中。傳次郎は、其切、內中を搔廻して大幅に板に坐つて居ますが、根を洗へば、三の輪邊に、疣傳と渾名のある屠牛兒。……吉原の燒けない前から、あ

の、突羽根の、親も娘も、狙つて居たと言ふのです。——
恥かしいので泣寢入、死なうとまでは思はなかつたのを、私に逢つて、女の玉の、膚の操の尊さを知つてから、お縫さんは活きて居ない、死なう死なうとするんですもの……」
滿來る潮の音を聞け、天も地も人も怨恨の涙である。

五十八

「此の十日ばかりは、私が綾で、庇つて居ました。然うでないと、一晩も許しません。如何に私が慰めても、今ぢやお縫さんが活きては居ません。
傳次郎は店を終ふと、一切、鰻釣に出て行きます。——針を襟に縫かくして、今夜は船へ、——いつも女中が行くんですが——私が辨當と、一罎、冷酒を持つて行かうと約束しました。……昨日、一昨日から心をしめて、先生、貴方をお呼び申したんです。あのお返事をしました上、何うせ死ぬ身體を、貴方が私の操のために人を殺して下すつた、情をうけて、女房も、處女を汚した、疣傳を刺しませう。大方、船で色よい返事をするんだと思つて居ます。——屹度仕損じはしますまい。もう、やがて、天地が彼奴を罰する時です。……」
板倉は瞳を伏せた。

「……大橋を渡つて行きます。……先生、もう、それがお別れかも知れません。おなごり惜う存じます。……あの船の灯が上下に搖いで、消えましたら、新が本望を遂げたと思つて下さい。波が此の岸へ打ちましたら、新が身を投げた、溺れながら貴方を慕ふと思つて下さい。不祥な事をお目に掛けます。もうお歸りが願ひたうございますが、未練の上に、女の效なさ、氣の弱さ。こゝに貴方がおいで下さると思ふと勵みに成ります。千人力、萬人力、確に思ひを遂げますよ。
先生、お顏を。」
默つて顏を相寄せた。
「見ますまいね、大さん、聞かない約束でしたわね、——其の小刀をおくんなさいな。」
とお新は從容として言つた。
其の手に、ふはりと掛つたのは、袴である。絣である。唯見ると、音もなく、ずぼりと隅田川へ入つた、逞しい大八の顏ばかり、帽子は脫がず、足許の水へ出て、クス〳〵クスと河童笑で、
「板倉先生、此の呼吸だ。……一足踏出すと此處はズボリさ。第一、戀の敵だから、あの晩もあとをつけて私が見て居た、奴は勝手に溺つたのさ。あんなものは、人間ぢやねえ大な芥だ。蹴込むも人殺しもありやしません。——おい、お照さん、板倉夫人、串戲ぢやねえ、切れる受合の小刀は買つたが、肝心の辨當を忘れてるぢやないか。そんな事で、男一匹、屠牛兒は些とお手に合

ふまい。……一寸待ちねえ、とに角様子を見て來て遣らう。——待つてねえよ、……旦那も、少時。」

すつと泳ぐのか水脚も引かず、やがて、新大橋の橋杭の電燈に、鷗の浮いた影が映した。

殆ど間もなかつた。

「あれ、あれ。」

船の灯が激しく上下に動いて消えた。

艪の音が響いたのである。

船に立つた、人丈の暗中に、ポツツリ卷煙草を銜へた火が見えて、すら〳〵すら〳〵と乘つて來て、幽ながら、ざぶんと岸を打つ波よ、と見れば、舷を横にトンと當てた。船の中に、こは如何に、淡紅色の手絡、結綿を眞うつむけに、襟首白くうつ伏したのは、半ば死んだお縫であつた。

岸へ抱き上げるのも、袴を引取るのも大八が一人で遣つた。——活きたるものは渠のみであつた。

「おう、お縫さんか、お前が縋りついて、其の二人を死なせなさんな。——潮はいゝな、海は廣いぜ。」

衝と漕開く、船脚に搦んで、友染の帶が半ば切れて、颯と、二條、すら〳〵と流れて行く。……

帶は今、大八が娘を抱上げる時、胸を辷つてするりと落ちた。

其夜、同じ時、お縫も傳次郎を殺さうとした。——娘には、如何に可憎かつたらう。——其の得物は燒火箸であつた。此の娘の方は、辨當は持つて出た。雖然、其のプス〳〵燻る鐵の、途中で冷く成るのを知らなかつた。で、つゝんだ手拭を通して、扱帶と帶と兩ながら燒切つて居たのである。

鬼の如く、大八が、舷へ顏を出した時は、お縫が、ぬらめく鰻の中に、傳次郎の膝で仰向けに押伏せられて、ぬけかゝる島田とともに、舌を嚙まうとした時であつた。

大八が、隅田川の流に小舟を操り、滿潮に乘つて、黑雲に隱るゝ如き波の行方を、判事は肅然として佇立して見送りながら、袖もてお縫の肩を庇へるお新の手を取つて、誓つて言つた。

「天か、人か、鬼神が、いづれ渠を捉へて審判を下すだらう。其の意を體して、職として、謹んで、俺が渠に宣告する機會まで、お新、お互に活きよう、……自殺を待たうと思ふ。」

二人は三部谷の落葉の中に、烏瓜の紅を華燭の典。いづれも禮服を整へて、あの、一杯の水を……半分づゝ飲んだ。水盃に似て、非ず、取肴は、お縫の手に卷鰯。

芍藥の歌

新道　夜鷹　翡翠玉　挿櫛　青い花　露臺　鶴の紋　兩
國橋　番附と茄子　さまよひ　釣船　二階の姿　應接室
片輪車　宵月　露の袖　玉あらそひ　荒寺　水鳥　組皿
菊皿　瞳　棧橋　客殿　初圓髷　通ふ神　怨靈　繪蠟燭
餘話

新道

一

「朝日」……

と其の煙草を一つ買つて、手首を顯露に、ぐいと胸へ遣交して、燐寸ぐるみ左の袂へ突込んだ、眉目の爽かな、脊のすつきりとした一人の若い客は、最う價を濟ましながら、然しながら、すつくと立つて、用ありさうに、其の小店なる煙草屋の亭主の、ぬうッと横外方向いた顏を、頭からじろりと視て居る。

と云ふのは、煙草屋の亭主が不人相にも事を缺いた、口一つ利かないは尙しもで、店に横坐りに構へたまゝ見向きもしない。

頃日の此の陽氣、中に火はあるまいが、中くらゐな箱火鉢に肱を支いた手を、一寸離して、商賣ものを客に突きつけただけが漸との事で、擬鼈甲緣の目金を角に掛けたやうに空嘯く。

年紀三十一二と見える、其の客は、熟と視たが、何と思つたか麥稈の帽を取つて、挨拶をしたのである。

「旦那、伺ひますが、洲崎へ行くには何う參つたものでございませうか。」

此處を、何處と心得て、聞いたらう。汐見橋を眞直に、澤海橋を右へ曲つて、もう些と左へ折れた、赤い牛肉、黄色な蛤鍋、名代のおでん、饂飩、蕎麥。時節柄、氷にラムネも徐々青い灯を交へて、軒並の提灯に、祭禮のやうな人通り。十時前後の今時分歸る足は一つも見えぬ。廓の大門はつい目の前で、たとへば惡所の停車場へ最早や到着をした入口に、人間の魂十ウばかりづゝ中有に泳がせて置く樣な、丸火屋の、仇白い電燈も、左右挾んで、道路安全、廓から建てて置く。……洲崎新道、俗に囀新道と云ふ、雀、燕も貝の名で、何の軒下にも螺殼まじりに蛤の仰山な、顏の白粉、下着の紅、それも辰巳の名所と聞くのに、何事ぞ、洲崎の方角を尋ねるのは、仲見世へ立つて、觀世音を訊くと同一である。

亭主が返答をぶつ理由はない。

默然の目金へ、もう一度、

「旦那、洲崎へは何う行きます。」

「ふん。」と鼻の呼吸を向うへ吹く。

「御存じではありませんか、……洲崎の道を?……」

其の聲は凛として居る。

唯、客の羽織の背はづれに、直き隣家の、菊川、とある鮨屋の店暖簾を白い指で颯と分けて、飜と煽るのを、しなやかな肩で捌いて、露の垂りさうな瞳、睫毛濃く、やゝ俯目で差覗いた雪にも紛ふ顏がある。

淺葱の薄いのに、白ぬきの細流をあしらつて、すら〳〵と鮎を泳がせた暖簾、鹿の子で染めて菊川とある中に、前髪の色、目の艶ばかりほのめいた面影の、……眞向うの支那蕎麥の眞赤な大提灯の影を薄りと浴びた趣は、繪の具の粗く拙きに似ず、天の成せる所おのづから睡蓮の花白く、一輪うかび咲いた風情がある。

空晴れて、星も美しく、黄菊白菊輝いて、此の深川の水一筋、浮名にあらぬ名を流す、件の娘は、菊川の、幾世と云つて名代なのである。

「へゝん、」と、其時、亭主はまた鼻で彈いた。

「……御存じない?……失禮しました。」

と、ぐいと胸を引いた客は、偶と眦を返して、暖簾の其の愼ましやかな、が、色に出た娘を屹と見た。

二

顔を合すと、然も思掛けないと云つたやうに、

「あら。」

幾世は内端に優婉だが、しかし胸の轟きが聲に出て、目がものを云ふ、(入らつしやい。)で、優い眉が招き込む。

客は猶豫はず、つか〳〵と身を寄せた。が、此だと今聞いた洲崎の行へ行くのでなく、新道を入口へ小戻りした事に成る。――實は今しがた終點で電車を下りると、微醉の面を海邊橋の欄干に吹かれて、堀割の星を渡ると、うよ〳〵ぞろ〳〵群がる魚の、川瀬に落込む群集の中を唯一人、鱸の如く悠然とステツキも持たない手ぶらで通つて、蠣殼新道へ入つたが、中窪みになぞへの露地を、左側の其の菊川を瞥乎と見ながら、一度通り越して煙草を買つたのである。

客の引緊つた唇は解けないが、目許の汐に微笑の影を見せて、

「あゝ、姉さん、居たか。」

「まあ。」と嬉しさうに莞爾する。

「お前さんの許で一杯飲まうと思つて來たよ。」

「まあ、」

と振袖の嬌態ある風情に、兩手で取つて輕く縋つて、暖簾を一つ絞つたので、すらりとした、帶も裾も見えたと思ふと、

「……何うぞ。」とすつと入る、トほろ〳〵と卷戻る暖簾に隱れて、コロンと土間に駒下駄の音がする。……鮎の繪は金魚に成らう、色は籠つて小隱れる。

「あんた、洲崎の道は違ふだが。」

と唐突に口の曲んだ、額の抜けた顔を店から出して、嘲るやうに言つたのは其の煙草屋の亭主である。

「存じて居ります。」

と言ひ棄てに、苦笑して、暖簾を分ける出合頭、此の客の、(あ。)と思はず一歩退つたのは、轆轤首が抜けたやうに、スイと出た、三輪に緋手絡の白い首。

頬邊半分、咽喉へべたりと、眞白なこと、長い事。瞼も頬も赭ら顔。引いた眉毛は漆に似た雇女のお鐵と云ふのが、つひぞない、お幾さん姉さんの、暖簾越の、あひしらひ。待設けの椅子の手觸り、土間の運びの、何となく、いそ〳〵するのを、仔細あるお客と視て、好事心のお先ばしりが、裾より先へ長い頸。

凛々しい好い男の若い客が、串戯でなく、一驚を喫したので、てれ隠しに、べッかッこ。

「ばあー」と云ふ。

「馬鹿。」

「へいゝ、」と、お鐵は頓狂聲。

「何時目刺にして賣るんだい。」と、胸で、其の白い首を突戻すやうに、客は涼しく細流の暖簾を潛る。……

唯見ると、煙草屋の亭主が、店頭へ、ぬくりと立つて、すいと腰を伸したが、草臥れた小倉の帶の結びめの端がぐたりと下る。……鼻に見事な、件の洲濱形の目金を取つて、コチン〳〵と丁寧に柄を疊んで、袷の長い袖口ぐるみ、懐中へ押込むと、眉間を暗くして、伸懸る許り、低い廂を頭で捻る如くに、ぎよろりと菊川鮨の暖簾を覗いた。

磯の香が颯と通る。……溝端に、樋下に、其處等あたりの貝殼の色新しく、ひら〳〵と菊川の鮎が搖れる、と水際立つた幾世が店の、立働きの白い爪先、褄はづれ、ちらりと見えて、又靜まる。

支那蕎麥には女ばかりの高笑ひ、醉ひしれた三尺帶が横のめりに露地へ出る。

海嘯は去年だつた筈。——世波の惡い事は、折から、廊の冴えた三味線の響きさうな處を、どうん、どうん、どし〳〵どし土足の太鼓で、救世軍の吶喊の聲。

夜鷹

三

若い客が、折角菊川の暖簾を潛つたものを、幾世が嬉々したらしいものを、こゝで言ふのは、聊か妓樓に米價を說く嫌なきにしもあらずだけれども、……いま太鼓に交つて軍歌の聞える……一隊の救世軍は、直き澤海橋の向うの詰に、牛肉店、一膳飯、居酒屋を周圍にして、旗鼓堂々として救の道を絕叫して居る。で、今夜で四晩續く、……其の二晩め、一昨夜の不思議な出來事を一寸話して置く必要がある。

其處に傳道のために、何處のか本營から派遣された一枝隊全隊に就いてではない。中に一人少尉候補生で木內甚右衞門と云ふ、名を聞くと千葉縣の百姓一揆のやうであるが、まだ年紀の少い、色の生白い、髭のちよぼりと生えた、によろりと脊の高い男で、世が世であらば淺葱の襦袢で咽喉を締めて袖に匂袋を提げて濟ますのに、世界ひらけて是非に及ばず、思切つた青道心、カアキ色の軍服に赤筋帽の身の上に起つた事で。

當夜――卽ち一昨夜――一順の大道演說が果てて、主の讃美歌を唄ふと、此の隊の中尉相當官が、一度下した傳道提灯を、居酒屋の繩暖簾越に、電線も貫けと廂の上まで反身に高々と指翳し、仰向けに口を開けると、軍服の腕を水平に、ヌイと張つて、調子を取つて、

「あゝ、本隊は……ぢや。十五分間休憩の後に、各員各一名を以て斥候傳道を强行する、……終り！」

とギグリと首を垂れ、ギグリと背を伏せ、ギグリと腰を折つて、而して蹲んだ。……續いて各兵員が、ばた〳〵と蹞つて、灯を消した提灯に、ぐるりと集つて輪取つた處は、牛鍋の割前に勘定不足の體がある。

キリストの子の彼等の言語に、斥候傳道と稱ふるのは、警察に於ける風俗係が、あいまい屋へ踏込むのと似て、非なるもので、露地に、辻に、袂を曳く私娼を捕へて、說諭し、訓戒し、敎化しようと言ふ意味で、露骨に言へば夜鷹狩なのである。

既に斥候と言ふ、偵察も大概似て居る。汐見橋、平野橋、此の澤海橋、界隈に、果してそんなものが居るか何うかは分らない。が、材木の陰、水の隈、深川の夜の暗ければ、時に處しての軍略であつた。

休憩終ると、思ひ〳〵に方向を選んで、東西平井町の兩方面、新開の龜井橋、反對に埋立地へ

行くもあり、黑江町、黑龜橋、一色町は石置場。蛤町、蛤橋、貝の仲町、牡丹町、佃をさして行くもあり。隊長殿は仙臺堀、阿波屋敷、おさん稻荷に向はるゝ。扇橋へも手を擴げ、海邊橋、高橋までも靴を伸して、名も可懷しき安宅町、お船藏の戸を開いて、兩國橋へ引上ぐる大策戰計畫の、其の中に、入舟町、汐見橋から、八幡樣の裏に成る、三十三間堂の跡と聞く數矢町へ曲つて、木場へ入らうとしたのが、前出の、ミスタア木内甚右衞門。

角の床屋も、戸が閉つて、看板ばかり電燈に光る、横町へ曲ると、不斷宵の內は、二階に世を忍ぶ圓髷の影法師が映つたり、出窓に鏡臺が見え透いたり、吃驚するやうな大坊主が、膝で算盤を彈くのが見えたり、取込むのを忘れたらしい干しものの赤い裾が掛つたりして居るが、もう十二時近いと、はねた後の芝居の道具裏のやうに、浮世らしいが寂寞して居る。……不思議なのは、何うかすると本所の馬鹿囃子は聞えても、此のあたり、木場、冬木町、蛤町、すべて水の里の一帶は、山の手の町と違つて、夜中に嬰兒の泣聲が聞えないさうである……それも寂しい。

で、通から町へ入口を少程すると、木の香を誘つて、水の匂がひた〳〵と潮の如く袖に迫る。

……道の左右は、材木の森である。

四

救世軍の其の少尉候補生は、路傍の二階の窓も悪魔の眼、鎖した門も鬼の口で、洒落た格子も、欄干も、縦横に罪悪の蛇の蜒蜒転くるが如く、薄目に睨廻して通つた。

が、やがて、左右が材木の森に入る、と水は音なく、風も死んだのに、ひや〳〵と夜氣の冷たさが、山、谷の氣勢を移して、軍帽の廂に迫る時、衣兜から一冊、小形で、茶表紙の原書の聖書を抽いて出して、ポキンと眞中から割るやうに開けたのを、生白けた鼻の前へ押着ける、と懷中電燈を燈と照して、一聯の章を映す。

「……」

（此處へ聖書の原語を記して、一寸氣取るべき處だけれども、文選課の煩らはしさを慮つて、やめて置く。）

と、映すのを機會に、半眼に成つて仰向いて、媼さんが前齒で豆煎を喰むやうに、モク〳〵と遣るは諳誦をするのと見える。……殊勝さは高野の山の山めぐり。――峰谷々や、山深く、――と琵琶歌の合方が要りさうな樣子があつて、靴音を靜めて行く。

行きつつ、又燈と懷中電燈を照しては、次の章句を移し出す。

「……」

……」

ぼうッと、蒼白い球の灯が、鼠の走るやうに、ちよろ〳〵と材木を傳つて舞上る。此しかしながら、千百年の樹の切られたる、木の葉の怨靈にも紛へば、基督の子を導く處の、龍燈の趣もあつて、折からの大和町は、もの寂しく暗かつた。

暗い處が、また、ぼうッと成る。

其處に、惠比壽橋といふ二間ばかりの木の橋がある。柳はなしに朦朧として、兩の袂も木の中に、描き出す深川の水の色。

時しもあれ、橋の其の向うの詰に、すいと立つた、婦か、と思ふ、ものの姿が見えた。――脊は、すらりと高い、が、水の隈に裳をぼかして、何やら眞直に立つた影法師が、大きな材木の、どれかに映るらしくも見える。

木内甚右衞門氏は身構へた。――斥候の任務を果すべき獲物の第一か、とも思つたから。

で、聖書を、ばたりと膝に着けて、唯、少尉候補生の姿勢を取つて、正しく橋に踏掛らうとすると、向うから、其の黑い姿がふは〳〵と動出して、橋を渡るよ、と見ると、……さあ、こゝが可訝しい、……其の姿が、ふはりと宙を浮いて、橋の欄干に乘つた……と言ふ。――

――結局、甚右衞門氏は、其の夜――此の前途に惠比壽の宮。神樂堂は欄干も折れ、軒も破れ

たが、町内年久しい宮がある。……其處を過ぎて、永井橋を渡つて、右へ水筋を入ると、また鶴歩橋がある。嘴か、脛か、白い頸か、讀んで名を見ると其のまゝなのが、地低に水が高いから、宙を飛んで、人の家の軒を傳ふやうに欄干を細長く、すらりと一面の池に架る。……夜更けては、家も納屋も寢鎭まつて、犬の聲さへ材木の深さを洩れず。流した筏は魚のやうに潜んで、ちらちら灯の影を呑み、纜つた船は大なる鳥の如く浮いて、岸を抽く舷は翼を合せた狀に、眞青な星がキラ〳〵と舳に宿る、船玉は皆姫神の、水の里の美しさ。……此の鶴歩橋を渡つた所で——

甚右衞門君は……結局、氣絶をしたのである。

五

尤も、甚右衞門君が氣絶をしたまでには順序がある。——こゝらへ都合で仕出しに出る、八や熊の徒なら、女の形の黑い影が、橋の欄干に乘つたばかりで、忽ち目をまはすのであらうけれども、天にまします、キリストの子の少尉候補生は、少くとも唯それだけの事ではダアと成らない。

なに、又欄干に乘つたと云ふが、其の實、其處へ其の姿が立つただけで、立昇る水氣が、あら怪しやな靄に成つて、裾も褄も蔽うたのであらうも知れぬ。が、一目見た所は、眞個稀有なものであつたと言ふ。

で、斥候は注意深く、渡り掛けた身をぐつと後へ退いて……遁出したのではない、用心をしたので、聖書なしに、右の懷中電燈を直角に向けて、屹と照すと、ほのかではあるが颯と此に射られたらしい、怪い影は光の末を暗中に消えた、トタンに宙を飛んだ。が顏か、胸か、それとも脛か、白いものが翼の影に飜つてちらりと見えた。

甚右衞門君は惠比壽橋を渡つた。

「……」

例の聖書を映しながら、誦しながら、然りながら、片手で欄干を心便りに撫縋りにせねば成らなかつたほど、潮は高し、歩調が浮いて、何故か、靴の裏が、古綿なんぞ踏むやうに落着かなかつたさうである。

材木は次第に深い。

深く成る、奥の正面に、水の影を薄く縱に映して、たとへば大きな額面に、瀧の面影を宿すが如く、一處材木の森を劃つて鳥居がある。道は、此の横を一つ畝つて行くので、これが惠比壽の宮である。

が、甚右衞門君は、星あかりに棟を見て、宮の名は知らず、土地の此のあたりの事なれば、大

方辨財天を祭るのだらう、と想像したと言ふ、……尤も後の話で。……

「へ、低級無知の民が、偶像をよ、へ……」

と此の際思はずとものを……商賣柄で、癖に成つて、つい心に泛んだ時、其の鳥居の横の神樂堂を偶と路傍に見るや否や、肩から頸へ、忽ち水を浴びたやうに悚然とした。

姿は認めなかつたが、何うやら例のものが神樂堂の出入口の一段窪んだ眞暗な處に、折れた欄干に頬杖して、凭懸りながら、じろりと此方を視たやうな心持がしたから。

はつと思ふと、物指のやうな細長い手がする〳〵と伸びて、ぶるッと夫が妙に撓つて、頸首へ引掛りさうな氣がしてならぬ。出足の窘むのを、ばた〳〵と身悶えして、振もぎるやうに、今度は堪兼ねて駈出す、と、目前に又橋がある。其の永井橋を、先より長いぞと思つただけでも、今しがたの欄干乘を目に見るばかり、又悚然した背後から、はら〳〵と追掛けて來る、……ものの音。

候補生が、堅い首を振向けて、眞黑な翼が人間の袖に成つて、裾が宙に飜つた、見上げるばかり高い婦の、顏が鳥居の上に見えたと思ふと、ふはりと背抱きに、其の翼で肩から顏を、鼻の上まで包まれた、……とまでは覺えて居る……

處で、甚右衞門君が倒れて居たのは、も一つ向うの、其の鵠歩橋を渡つた處で。——あの、白

白と水へ蔓に架つた上を、軍服の、足のだらりと、手のぶらりとした頸首を、うつぶせ狀に、女の姿が引銜へて行く狀は、羽の黑い、頸の白い、大な鶴が、鰻か何ぞ嘴に貫いて渡つたやうで、それが、青い松明の炎を流す、洲崎の空の遠灯に描出されて、物凄かつたと言ふのである。——此は、素見歸りの土地の若いものが二人連で、しかし、材木を楯に身を潛めて、震へながら見て居たので。

「又一人やられたぜ。」　「眞個に同伴がなくつちや危えな。」

扨は間々ある事らしい。……

で、二人だけに、氣丈夫に介抱した。……甚右衞門君の衣兜から、變な、其の廂髪の寫眞と一所に、蝦蟇口が溢出して、銅貨が溢れて。——

翡翠玉

六

却説、轉新道の菊川鮨では、暖簾を潛ると、賣場の卓子が細長く半圓に土間を劃つて、馬蹄型と云ふのであるが、娘が藤紫の花掛した結綿の其の色白では些と相應はぬ、鍵針の形としよう。

……附元の奥の處に、絲は卷かぬが白絲の白い巾を掛けた卓子が一脚別にある。其處の椅子の手を一寸壓へて、淺葱の襷を片袖に外したのを、皓齒に輕く銜へながら、何うぞ、と云ふ身で、何故か含羞んで待つた所は、媚かしいが、優品で、何うやら船宿の娘分が舳をついた意氣がある。

「滿員ではないのかい。」

と聲を掛けながら、若い客は、入りしなに、店口の暖簾に近く――確乎と兩の肱に手を組交して腕組をしながら、肩をだらりと下げて、熟と賣場に置いた麥酒のコップの、飲んだ減加減の寸法に瞳を据ゑて居る、――一員の水兵を見て背後を通つた。

「御免なさい。」

「や。」と云つた、……水兵は心持額を伏せて、頤を引込めたが、引込めても顏の長さよ、睨合つた、眞中の少しくびれたコップの丈ほどあつて、然も、鼻のあたりが、しやくれて居て、色が暗い。

「棧敷だね。これは奥座敷へ恐縮ですな。」

「まあ、」と、幾世は肩で嬌態をして、胸を反し、身を退きながら、

「こんな處へ……よう入らしつて下さいました。」

「いや、餘りよくも來ないよ。」と帽子を脫いで、

「しかし、大した難題も言ひには來ないよ。」

雇女のお鐵が、いま客の脫いで仰向けて置いた麥稈に、突然赤ちやけた鬼鼓燒に似た太い指を掛けたが、何分にも、此を違棚に直したり、亂箱に納めたりする寸法ではないのだから、表を飜して、不作法に、トンと卓子に縱に支いて、

「あら、おつしやいよ、難題を……」

で、すなほな、艶の佳い頭髮を、すつきりと短く、故とらしくない筋が通つて、色は淺黑く眉は凛々しけれども、生際の佳いことは、此の人に姉か妹かがあつたらば嘸や、と思はるゝのを、首も顏も一所に曲げ、涎が出さうな充滿した頰邊して、

「貴客の仰有る事なら、お幾ちやんは難題ではないんですとさあ、ようだ、一寸。」と眞額から一太刀浴びせて、おまけに横なぎの、怪しげな空氣草履を、腰ぐるみ、股を捻つて、土間を敲いてポンと鳴らす。

と駭然とした樣子だつけ、怯んでは叶ふまじと、拳を楯に、客は兩腕を揃へて、卓子をずはと壓へ、

「馬鹿なことを言へ、口說くのが、何が難題だい。」

「あら、まあ。」

「何が難題だよ、口説くのが。——女ぢやないか、口説かれなきや不可ないぢやないか。」
「一寸、貴客だから、そりやね、可いけれども、隨分だわよう。」
「何故だ。」
「だつてい、」と甘たれた胸を搖すりながら、
「口説かれたら嬉しからうと言はないばかりぢやありませんか。……まあ、お幾ちやんを——先月だつけか、それに今夜とさ、たつた二度ほか來もしない癖に、……隨分だわねえ。」
と笑崩れさうな顏をして、じろりと見向くと、幾世は、なよやかな帶腰の背を見せて、暖簾に向いて立つて居たが、おくれ毛のそよりと戰ぐ、淸らかな、白い耳許ほんのりと……

七

「ねえ、お幾ちやん。」
とお鐵が呼ぶと、呼ばれた事が事だから、幾世は何にも言はないで、袂の端を手で探つて、徐と一つ胸を煽いで、唯、暖簾から新道を透かしたが、眦は繪の若鮎より流るゝばかり疾く、逆に客の横顏に注いだのである。
「酌をしてくれ。」

と其處へ眉間の下から、猪口を挾んで、ぬつと出した、まくり手の太い腕が一本。象の鼻を延したか、と見えたのは、其の大獸の耳のやうに、ぶらりと緣を垂らした釜底形の茶の帽子を、目の隱るゝまで、ぐたりと眞俯向けに、賣場の臺に、のめつた體で。——此は鮨を置いた屋臺寄の椅子に、水兵とは不行儀な對向ひと云つた處に、早や五六本銚子を並べた、——肩幅の圓い、むくむくと肥つた、大柄な、小相撲とも言ツつべき、久留米の紺絣に黑い兵兒帶をメめた書生風の男で、大分醉ひしれたらしく、帽子ぐるみ、のめつたのが、目も眉も隱れたまゝで、突如腕を突出したのが、猪口を挾んで鼻が延びた、と見えたのである。
お鐵が、ズンと腰を廻らかいて、其處へ出て、
「へい。」と德利を突着けると、
「ちよツ。」久留米絣は粘々とした舌打して、拗ねたやうに、肩をぐいと上げて、壁を向いた。
「貴客、お酌をいたしませう、貴客。」
幾世が入交つて、優しく、覗き込むやうにして銚子を持つと、久留米絣は硬さうに捻向けた頤を肩に着けて、猪口を硬直に、づいと出し、一方の肩を後へ引いて、帽子の下から鼻も出さず、どろりとした眼を据ゑたが、一杯受けて、
「ちよツ。」また舌打して、啜りのみにチユウと吸ふと、腕をドンと支いて、肱の上へ、俯向けに、

グタリと突のめる。
「はッ。」と溜息やら、酒の氣やらで、水兵さんは、もう一息、肩を引摑むやうに高腕を拱いて、しかし窪んだ面を、陰に投首。
「隨分だわ、贅澤ねえ。」と、お鐵は書生君に聞えよがし。……尤も客に向けて、續きを喋つて、不躾千萬嫌はれた酌に出向くにも、離さないで爪さぐつた麥稈帽を、トンと置いて、
「御緩りなさいましとさ。」
と額で、見込んで、合點んだ頤で言ふのを、客は頰杖して、つく〴〵感に堪へたやうに瞻りながら、
「はい、難有う。」
「あら難有うぢやないぢやありませんか。お禮は此方で言ふことよ。ですから其の氣で何かお驕んなさいな、お鮨、ね、鮨さあ。」
「鐵ちやんか。」
幾世は、賣場の陰に火鉢に掛けた銅の湯沸鑵を見て、低く居て、玉なす咽喉を振向けて、
「貴客は、此の間も、召食らなかつたぢやないの。」
「あら、然う、不味いと言つたのね、隨分ねえ。」

「違ふ、違ふ、其奴を言つたのは、あの時の同伴の男だ。……商ひものを失禮な、私がそんな事を言ふものか。」
「構はないわよ、言つたつて。貴客ですもの。我儘をおつしやいとさ。それにね、あの、鮨はね、內で握るんぢやないんですもの、廓の臺屋から受けるんですから。——ぢやあ、何、鰌鍋？」
客は無言で頭を振る。
「酢蛸、ぬた、不可い、……胡瓜揉は何う……不可い、一寸、貴客つたら隨分だ、……ぢやあ生玉子。」
「拜む、」と一寸お辭儀をして、
「何でも、ぐらりと頂戴するから、後生だ、彼奴を、二つ小皿で叩いて、いきなり打破るのだけは堪忍してくれ。」

八

幾世が火加減を覗くのは、お銚子で。……客が一度來たことがある、と言ふ、其の時の樣子を覺えて居たのであつた。
一寸言つて置かう。ぐるりと半圓に劃つた賣場の臺は、內へ婦二人を入れて、飲み且つ食ひ、

且つ(張る。)ものの同勢は、外側に輪取る仕掛けの、内から覗れば身を護る砦だし、外から觀ずると、狼が城近に取詰めた體に成る。……突當りが一枚障子、出入口の、其處が住居で、式ばかりの二階建である。

襷を帶に挾んだのが、解けかゝつた扱帶のやうに、黑繻子を淺葱に彩つて、媚がしく、幾世が酌をすると、骨が水晶ででもあるやうに、透通るばかりの白い手が、些と堅く成つて、幽な慄へが響いたので。

「……可し、可し。」

と若い客は輕く受けた。

「肴はね、此の間食べさしてくれた、ちらしかい、玉子燒に、椎茸、おぼろなんか綺麗にならべた五目鮨があつたね、あれを御馳走して貰ひたいね。」

「あんなもの……」と、放つて云つたが、調子を沈めて、

「那はお生憎樣ですわ。」

「無い？」

「はあ。」

「其は殘念だ。」

「まあ。貴客、殘念だなんておつしやつて、内證をお聞きでしたら屹と後悔なさいますよ。あの、五目鮨は、内で拵へたのでございますものを。」

「をかしいな、鮨屋さんが鮨を拵へる、それに不思議はないぢやあないか。」

「否、内では、今も鐵ちやんが申しました通り、餘所から受けて參ります。彼處にございます握ばかり。前月の、あの日は、私の母さんの命日でございましたので、ほんの志の手づくりだつたのでございますわ。」

「母さんの命日に――」と、客は杯を下に置いて、

「姐さん、お前さんが拵へたんだね。」

「えゝ、飛んだお口よごしでございましたの。」

「道理こそ甘味かつた。」

「可厭でございますこと。でも、貴客お好きでしたら、もつとお甘いのを、すぐに取らして差上げませう。」

「否、那に限るさうだ。私も甘味かつた。が、しかし酒で我慢する。今夜來たのが、此の間の同伴だつたら、どんなに落膽するだらう。調弄ふのぢやない、眞個に甘味い、と言つて居たぜ。」

「まあ、嘘でも、私。……そして孰のお連樣でございますえ？貴客とお三方でしたわね。」

「あゝ、あの、いゝ男だ、尤も二人とも、好い男だ。」
「一寸！そりや貴客だわ。」と、折から入口に任務を替へて、椅子で、暖簾から人通を見張つたお鐵が、素頓興にぬッと立つ。
「ビイル。」と、音もさせず陰氣に卓子に拳を當てて、水兵が滅入つた聲で言つた。
客は卷莨に火を點じて、正しく燐寸殼を火皿に棄てた。
「……年上の方だよ、何さ、あの晩、海嘯の時の話が出て、お前さんが夜中の二時半頃、店を仕舞つて、寢衣に着換へて、二階へ上らうとすると、店へ、どつと水が入つた。……吃驚して一度下りて、片づける間もなしに、上へ上らうとした時には、最う、此處までと言つて、……」
と客が我が胸を手で劃ると、幾世はハツとしたやうに、袖で包んだのが、ふつくりとある乳のあたり。
「其を聞くと、(あゝ水が可羨しい。)と、義理も我慢も無ささうに言つた、——あの人さ。」と云つて微笑んだ。

九

客の言葉は、浮いた事。で、此を聞く娘の、此際の言科、仕科は、つい通りに若干もあるのに、

幾世は拗ねもせず、曲りもせず、可厭とも、不好ない、とも言はないで、何故か、身に染みたらしく、其の切の長い目を伏せて、
「では、あの方が、あの、」と一度口籠りながら、
「母の命日の五目鮨を、甘味いと言つて下すつたんでございますか。——まあ、嬉しうございますわ、私。」と乳を蔽うた袖を、引しめて、しんみりと言つた。
お鐵が差出る。
「最うお一方は。」
「あゝ、あの人か、あれは神戸の住人で、最う歸つたよ。」
「商人？」とお鐵が背後から客の肩を覗いて裏問ふ。
「何だか知らないが、一つの會社の社長さんだ。」
「嘘ばッかり、社長さんだなんて。」
「馬鹿を言へ。……失禮な。……立派な社長さんだから、我々お供をして來たんぢやないか。」
「では御案内で、あの晩、孰方へ。」
「何處へも行かない。洲崎を一廻りして歸つたんだ。」
「嘘々、あんな事を言つて。」とお鐵の頰邊は笑破れさう。

「ものを聞くなら眞面目に聞け。答へるものは眞面目に答へる。」と見向きもしないで、すかりと言つて、

「眞個だよ。……あの、神戸の人が、まだ一度も深川の景色を知らない、散歩かたゞ見たいと言ふから、……實は私だつて悉しくないんだらう。一人の人が道案内さ。……大分知つてたやうだ。……この邊へは一寸々々來るかい。」

「否。」と幾世が、姿を更めて、端正として言ふ。

「何、あの方は。」と又差出る。

「大層、聞き方が太粗雑だな。……饒舌つても構ふまい。が、名は直接に聞くが可い、——畫工だ。」

唯、向うに突伏して居た、大肥りの其の絣の書生が、肱をかへて、ドンと又帽子ぐるみ頭を投げた。

「あら、畫の先生、道理でお幾ちやんのお乳の處まで水のついたツてのを羨ましがつたんだわよ、屹とだわよ。裸體の模型とかにしたかつたんだわ。まあ、可厭だ。」

「何だねえ、お前さん。」と卓子の端を壓へて言ふ、人柄に品が見えた。

「へい、」と目を圓くして、首を窘めながら、

「そして、貴客は、旦那。」

「私か、おい、眞面目に聞くかい。」

「えゝ、もう一生懸命。」

「ぢやあ、聞かせよう、私は素封家の息子だ。」と言つて、澄まして猪口を擧げた。

此處で打明けよう。客は、芝高輪の且つ高臺に、大都を一目の館を構へた、名家の富豪を父にして、其の父君が監査たる、日本橋邊の某會社に籍を置く、某大學理財科の出身で、一昨年あたり、英京ロンドンの留學から歸朝した、俊才、峰桐太郎は彼である。

「矢張り、あの、繪を遊ばすんでございますか。」と、幾世は片手を優婉に膝に下げて弱腰を屈めたのである。

「商賣かい、私の商賣は、何、次男だから、養子の口を捜して歩行くんだよ。」

「おい。」……と沈んだ聲で、水兵が呼んだ。

幾世が優しく、

「はい、はい。」

「いや、女中で可いです。勘定を——」

十

勘定を濟ますと、ハツと又歎息して、筋も萎えたらしく、手をぶらりと、剩錢の銀貨を二三枚衣兜に入れつつ、水兵は蹌踉と椅子を離れたが、然まで醉つたのでは無ささうで。

兩方突込んだ手を出しもせず、軍帽で暖簾を壓して、ふら〳〵と影の薄さうな容子で出た。と振返つた顏の色が一際暗く且つ蒼い。

見れば、服が水に成つて、鮎が流れて暖簾の外へ消えて行く、……藻脫けのやうな、魂は、心は何處に殘したやら。

「お幾ちやん、あゝ、幾世さん。」と其の水兵を凝と見送つた、桐太郎は、名を覺えて幾世を呼んだ。

「はい。」と幾世は、白地の浴衣で、其の時下に居て目を淸しく仰いで峰を。——新しく銚子の燗を見た處。……

「一寸、此處へ來ておくれ。」と偶と更つて、

「少し、お前さんに見せるものがある。……而して話がある。」

「は、」と言ふ、花に一そよぎ風の障るほど唇が動いたが、すぐに寄つて、袖口へ一寸手首を曳い

て斜に立つと、片袖ばかりの姿に見えて、愼ましやかに纖りする。

「實は、實はと行かう。些と面倒らしいがね。」と、例の眦に微笑の影を浮べる。彼が聲を出して高笑ひをしたのを、親たちも未だ嘗て知らない、と言ふのであつた。——で、此だけでも可い機嫌で居るのが分る。

「其の用で、今夜態々此方まで出向いたんだよ。……何、心配な事ではない、見せるものは。」

袂へぐいと手を入れると、手巾を解いたか、包を開けたか、無造作に摑み出したが、ナンコでも握つた、串戲らしい、と思ふ無邪氣な拳を、正的にトンと卓子に載せて、

「此だ。」と指を放すと、コトンと轉げたのは、光を湛へ、艶を沈めた、簪のにして六分ぐらゐな、美しい綠の珠。

金魚でも掬ふやうに、お鐵が傍だと、ちよろりと奪て遣る所だけれど、例の店番で、暖簾にぶら下るばかり戸外を覗いて、人指で角を生したり、親指を押立てたり、かと思や、ベロンと目を剝く、鼻の下に二本棒。向家の支那蕎麥の同類と、甚だ穩かならぬ暗號を通はすらしい。其の代り、此方へは交渉なしで、至極無事で可い。

桐太郎は、肘を直して、

「私は珠を見る事を知つて居る。妹たちにも內々で見せたが、立派な翡翠だ。然も極髓の性なん

ださうだ。……一寸見て御覽。」
「では、失禮ですが。」と懷紙に密と拾つた、瞳に映す鼻筋は尙ほ通る
「まあ。」
「殘念だが、お前さんに上げられるんぢやない、――否、欲しがるとは思はない。が、實際ありのまゝを言ふんだ。珠はしかしお前さんに預かつて貰はねばならないんだよ。
其はね、出處は此の家だ。
唯、恁う唐突では分るまい。此間三人連で來て飲んだ時、歸りがけに、偶と其の菓子だの、水菓子だの、煮染物を入れた棚の上に紙人形が一つあつた。……あれをお前さん覺えて居るかい。」
「えゝ、」と、うつかりしたやうに幾世は棚を見返つたが、緣日ものらしい、河骨の水盤があるばかり、數を飾つた人形ではないのであつた。
「見ると夜鷹の形だつた――一つお酌をしておくれ。」

十一

「可し、……夜鷹だか、其とも喪を着けた婦だか何だか知らないが、黑い衣服で、白茶の帶、水色の褄、おなじ色の半襟だつけ。髮も顏も、それは白紙のまゝだが、潰島田に淺葱の切を掛けた

紙の姉樣人形。
お前さんも知つてる通り、眉も目も無いのだけれど、不思議に色も香も有つて、好い姿だつた。が、賣りもの、と胸の處に書きつけて貼つてあつた、……」
「あの、口でお客樣に然う言ひますからツて言つたんですけれど、早く解るやうにツて、父が、あゝいたしたんでございますのですが。」と何か、其の賣ものに札を下げたのを、濟まなさうな幾世の容子。
「何、早解り、結構ですとも。値を聞くと安かつた。あの時、直ぐに買つたつけが、さあ、まさか抱いては歸られず、袂へ入れると、島田が潰れさうで惡いから、姉樣に對しては些と亂暴で氣の毒だつたけれど、あれだよ、袖の中で帶をつかまへて、成りたけ浮かせるやうにして持つて歸つたんだがね。――姐さん。翡翠は、其の人形の、胸を卷いた帶に隱れて、衣服の中にあつたんだ。」と、桐太郎は深く懷中へ手を入れた。
「まあ。」
「間違つて入つたのぢやない。何か心得があるんだらう。翡翠に紅の絹絲を通して、眞白な人形の身の胸に、細い腹帶したやうに、美しく結んであつた。――私は返しに來たんだよ。」
「あら〳〵、あゝら。」

お鐵が額へ横皺を刻んで、上目で見ながら後退り。暖簾が其の顏をふはりと追つて、水兵の白いのが憎乎と顯れる。

「あら、何うしたのよ。」

「手巾を忘れたのだ。」と水兵は上半身をぐたり〳〵左右に曲げ、脚を鯱子張らせながら、椅子から卓子の下を、恁うソノ矢鱈に覗く、

「まあ、お忘れもの。……鐵ちやんや、氣をつけて上げないぢやあ。」と幾世が寄ると、手にした翡翠が、懷紙に、ほんのり照つて、露は無けれど瑩の影。

「有りました。」と、指で摘んで、土間から、ずるりと引上げたのを、ぶらりと下げて、ト幾世に視せつつ、一目二目、じろ〳〵と瞻るうちに、今度は、くな〳〵と腰が碎けて、卓子に手を掛けながら、氣の毒らしく少しづゝ、徐と椅子に腰を下して、

「ヂイダでも一杯飲むかい。」

玉を、くるりと包んだなりで、幾世が、其の飲料を、水兵の前に差置くまで、峰は默然として、莨を口に待つて居た。——

「貴客、返すとおつしやつて、私何うしたら可うございませう。一旦お手に入りましたものですから、矢張り、あの、」

と靜に壓して寄越すのを、トンと卓子の此方の端を打つて遮づた、桐太郎の手に力があつて、幾世の袖口が幽に慄へる。

「否、唯あれだけの價で、其の玉を自分のものにしようとは斷じて思はん。……尤も玉の價は大抵想像が着いて居る。姐さんの言ふ通り一旦手に入つたものだから、其相當の値段を拂つて、更めて買求めて置くと云ふのも一つの手段だけれども、さし當り私は必要がない。今其の翡翠が欲くない。手數で、氣の毒だが、賣ぬしへ返して下さい。」と判然言ふ。

幾世は袂で、玉の影を庇ひながら、

「でも、私……」

「一體、何う言ふ人なんだい、賣主は？」

峰は、カタリと椅子を寄せて改めて。

十二

幾世が、其は坊さんだと言ふ。

「坊さん？……」

此の前、峰たち三人連が、立寄つたのと同じ日であつた——其の日に志の五目鮨を拵へたの

だから、幾世の母親の命日に相當る。朝の間小雨が降つた。洲崎の辨天橋の方から來て、菊川の前を通りすがりに、――幾世は祥月だし、其母親の墓參りをして、歸つて、傘を疊んで店口から一度住居へ入らうとした。――處へ、小戻りしたのは、鼠色の道行合羽を着て、空脛のぢん〳〵端折で、日和下駄、土耳其帽とか言ふ鍔の無いの、目の窪んだ顏で、一寸見ると出來損ひの發句の宗匠か、（此の女の事だから、損ひなどとは云はなかつたが、聞くものには直ぐ然う悟れる。）今時流行る場違ひの活花の師匠と言つた年配の人だつたが。

姐さん〳〵、と幾世を呼んで、見掛けて是非とも賴みたい事がある。……何とも申兼ねた儀ぢやが、此を一つ店の隅になと飾つて置いて、望み手のあり次第に賣つて貰ひたい、と懷中から出した、紙包みを開けたのが、あの、夜鷹の姿をした紙の人形。

價は十六銅の十六錢。が、今日が十三日の十三錢。それだけに成れば此の方は難有いので、……尤も前金ではない。一寸々々此の邊へも來ます、今度參るまでに賣れて居たら、今言うた値の其だけをば、頂戴する。餘分は客次第何程にてもお儲けなさい。……實は拙僧とても或人から賴まれ筋、出處は仔細あつて申されぬが、何しろ、御迷惑な事は決してない。それ、此の頭につけても、と帽子を脱いだのが、すべりとした御出家さん。

尤も、懷中から出した時に、道行が寛開かると法衣が見えたので、幾世は最う其時から、何う

した由緣か知らねども、他ならぬ佛の命日、はい、畏まりました、と抱取つた人形の、裾は冷たく、胸は暖かだつたさうで。……お茶一つ、と、可懷しさに然う言ふと、胸もだぶ〳〵と衣紋を繕ひ、腹もだぶ〳〵と輕口して、然やうならば、其の中にな、雨は霽つた、いやどッこいしよ、と疊んだ蝙蝠傘の古ぼけたのを引擔いで出られた、が、新道に人通りの忙しいのに、幅をしてはと遠慮をしてやら、其の蝙蝠傘の柄を返して、ぶらりと肩に掛けて、腕組みをして、前屈みにすたすたと出て行つた。――と……お茶だぶ〳〵に、どッこいなどは、傍からお錢が手振で饒舌つて、雜と來歷は此の趣。

「……でも、賣りものッて札を附けますのは、私、私、何だつたんでございますんですけれど。」と見返つて言ふ、……幾世の聲は低かつた。住居には、其の憚るべき誰かが居よう。

「買ふ奴さへ爰にある。」

と、桐太郎は投げるやうに、

「夜鷹の賣りものに不思議もなし、遠慮もない。が、……珠數か知らん。」と、其の翡翠に輕く指を置きつつ。

「……數取の珠か、些と大きい。」

と明るい額に手を加へて、此の時はじめて俯向いた。一顆の名珠は、其の光を、碧潭の底より

放つに似て、緑が颯と影に添つた。峰が此の時の面色は、瞳の色淵よりも深うして、宛然哲人の如く見えたのである。

「幾世さん。」

「はい。」

偶と顔を上げると呼んだ、其の幾世の方ではなしに、峰は片手を帶に挾んで、水兵の又彌が上に沈んだ狀に、屹と胸を正して、晃乎と輝く瞳を注ぐ。

十三

辨財天の社を前に、一方は、長屋、船小屋、飛々の砂濱めいた片側町で、此處の埋立地を平久ケ原とか言ふ。一方は直ぐに廓へ入る、……新道を出て、一寸左へ曲つただけの三辻だけれども、大きな空洞のやうに、薄暗く寂寞して居る。……以前は却つて此の方が、廓通ひの、俥にも、漫行るにも一筋道であつた、とこそ聞け。電車が永代から汐見橋を越してからは、故道は人も稀に、客待の俥の提灯も、廢驛の灯まばらである。

幾世は其の辻に、新道の口を背にして、暗い方を向いて立ち、色仄白く、凝と峰を仰いで、コハ如何に、清い目に保ちあへぬ涙を湛ふる。……涙？……あの、桐太郎が、此の婦に對して、言

ふ處、爲す處。其を思へば、可懷さの涙、嬉しい涙……でないまでも、遣瀬なさの涙でなければ成らぬのに、廓の電燈を、横雲の、銀河にあらぬ流に隔てて、其處に、辨財天の社の空あたり、薄曇りつつ光を放つ——幾世が行く處には、必ず廻り繞るべき、——星あり、一座、露の如く涙を照す。……其の星の語るを聞け。……口惜い涙、悲い涙、情ない涙、且つ果敢さの涙と言ふ。

怪しや、峰が如何なれば——が、其の仔細は恁うである。……

今、菊川の店で、名を言つて幾世を呼ぶと、件の水兵に瞳を注いで、峰が、つッと立つと、最う、暖簾を半ば、外へ潛つて、繪の細流に潔い面を振返つて、

「一寸……」と言ふなり、づん〳〵出る。とまた何の猶豫もなく、幾世が宛然權威あるものに、指揮でもされたやうに、其の後に跟いて露地へ出た。

虞美人草か、夏菊か、知らず常夏か、花を一株、すかりと根こぎにして抱いて出た擧動に、鉢の土のお鐵なんぞが、こゝで驚いた樣子の如きは、言ふまでの事もない。が、忘れて成らないのは、一所に外へ出た桐太郎が、出たと思ふと引返して來て、其の水兵に、突然聲を掛けたことである。

「海軍の方。」

「は、」

「少時お待ち下さい。失禮ですがお話がありますから。」

「は……」

とだけで、呆氣に取られた。返事も聞かないで、峰は直ぐに新道に、うつかり立つた幾世と袖擦りに、先に立つて導いて、來たのが、此の辻。

「こゝに最う一顆翡翠がある。」

袂から、……此の方は筐人のものであつた。

「婦人に綺麗な玉を持たせて、一度持たせた手から、空しく直ぐに餘所へ遣つて了はせると云ふ法は無いのださうだ。其處へ預けたのは、」

幾世は出しなに、打合せの帶に挾んで居た。

「紙の姉樣の賣ぬしへ屹と返して貰ふんです。其のかはり、此をお前さんに上げる、さ、受取つておくれ。」

が、幾世は此がために泣いたのではない。

「しかし、此の方は、今夜來がけに、銀座邊で、私が自分の小遣で買つて來たのだから、可いかい、餘り負けもしなからうと思ふけれども、人形の腹に藏つてあつただけのものでは無いやうに思ふ。が、こゝざし、受けて貰ひたい。」

「否、否。」

とのみ、でも、しかし幾世は泣いたのではない。

十四

幾世が胸の痩せるまで、袖を狹うして辭むを視て、二三度繰返して優しく翡翠を勸めた桐太郎が、稍聲を强く判然と言つた。

「そんな稼業をするものが、人が遣らうと言ふものを、無暗と辭退をするものぢやない。」

「否……」

「いゝえぢやない！　第一、預かつた翡翠一顆だけ持つて居て、私に賴まれた事が整と果せると思ふかい、――迷惑ではあらうが、引受けたとしてだよ、可いかね、……境遇に依る。お前さんのやうな境遇ぢや、なか〳〵思ふ通りに行かないよ。母さんはないと言つたね、父親か、伯父、叔母、いづれ然うして稼がせて置く人が、何か知ら取卷いて居るに極つて居るんだ。亂暴かも分らないが、お前さんの周圍に在るものは、孰れ碌なものぢやないんだらう。……早い處が、雇女か、あの頰邊の赤い婢が、返さないでも差支へのない玉だと知つて、無理に無體に欲しがつたら何うします、――斷つて斷るにした處で面倒だらう。目上や勢のあるものが是非と云つた時、お

前さんには立切れまい。唯一つだけの手段で、一つの目的を達しようと言ふのは、相當の男さへ骨が折れる。弱い婦が何うして然う故障なしに、山坂を、晩の旅籠へ着けるものか。

私は唯手數に成るのさへ遠慮だから、其の上迷惑は掛けたくないと思ふばかりだ。禮を言ふことも、恩に被る事も何にもない。

分つたか。勘定は倍持つて居りさへすれば氣樂に飲めます。一番安全なんだから。」

幾世は恁くて對の玉を抱かない次第には行かなかつた。……と同時に、嬉しい事も、賴母しい事も聞いたのである。胸はひとりでに切つても、然しそれで泣いたのではなかつた。

「筐は打棄つてお了ひよ。」

峰は物優しく心着けた。

「誰か玉を狙つた時は、私の上げた方を見せるんだ。が、何の義理に……無暗に他に奪られるには當らない。成るべく自分のものにおし。私が欲しいんですと然う言ふんだ。其を強ひてとは言ひ得まい。」

「はい、」と、もう其の聲は濕んで居たが。

「で、首尾よく一方を、賣主が來次第に返しておくれ。」

「ですが、若旦那。」

可懷しさうな幾世の言葉には、先刻に、峰が、素封家の息子だ、と言つた意味が偶と籠つて、

「お預り申しました、此だけの見事な翡翠を、返すと申して、坊さんが默つて受取つて歸りますでせうか知ら。……屹と尋ねますわ。お返し下さいます貴客の御住所、それから、お名を……せめて、あのお姓だけも。」

俯目ながら恁う訊いた時の濃い睫毛は、思はず見直さるゝまで、床しいばかり賢かつた。

峰は名告つた。

唯、聞いて、其の名に、姿も、色も、高さも、幹もあるやうに、憧憬るまで恍惚と瞳に映して、然も嬉しさうに莞爾とさへしたのに、——星が、もの言ふ、怨恨の涙、口惜涙は何ならむ。

桐太郎が、四邊を視た。新道の口は、吸ひ入るゝ肩背の數に、今はしも流し出す脚を交へて、瀨は一汐急なるに、辻は雲淀み、地沈んで、俥の灯も、水も燈も、泡沫の泡の結ぶかとすれば消ゆる時、向直つて、

「おい姐さん、もし商賣なら、あの、水兵さんとねて遣らないか、御祝儀は心得た。」

——あれ、星が言ふ、星が瞬く、星が泣く、幾世の涙は此なりと。……

挿櫛

十五

峰が蒼空の星を仰いで、瞳を幾世の目に返した時、其の瞼にも露があつた。美しい涙の影は泣かない目にも宿るのであらう。

「悪かつた。」と、妹が何ぞ慰める時のやうに、女の肩を抱かうとして、衝と袖を開いたが、其の手を扨て掛けもしないで、

「――餘り、あの水兵さんを氣の毒に思つたから、――まるで半分死んだものに成つてお前さんに惚れて居るんだ。……時々、來るのか、何、今夜初めてだつて――様子を御覽、あんなに思ひ込むのは洒落や好事ぢやない、生命掛だ。それにしても、顔が見たいからつて、明日、明後日の晩また來ようと思つても、あの人たちには其が出來ない。……あんなに、滅入つて影法師のやうに成つて居る處を見ると、休暇も日が迫つて今夜あたりは艦へ歸らなければ成らないのだらう。遠ければ横須賀、近くつても品川です。悪くすると直ぐに遠洋航海で一年も二年も又お前さんに逢へない、と落膽して居る様にも思はれる。……同じ骨の折れる軍人の中でも、水兵は格別だ。

……直接に言つたら怒るかも知れないが、私は可哀相に成つて仕やうがないんだ。あのまゝで艦へ歸しては、屹と檣の天邊から落ちて怪我をする。

今、思ひ違ひをして私の言つた事は悪かつた。それは謝罪るからね、あんな道端の入込でなしに、近所の何處か騒がしくない處へ案内して、お前さん、對坐で、二三時間、心靜に一杯飲まして返してくれないか。大丈夫だ。……最う一人の書生風の奴とは違ふ。二人に成つても、お前さんが許さないのに決して手を一つ觸らうとはしないから。しかし念のため、座敷は靜で、家は賑かなのが可い、勿論料理屋だ。……とに角、恰好な家はあるかい、幾世さん。」

「えゝ……」

「有る。あゝ、越野家と云ふのか、然うか。」

其の越野家は、平久ケ原の片側を越した處、老鋪で平野橋のあたりにある。

「では其處におし。不安心なら藝妓でも雛妓でも取卷に呼ぶが可い、成丈け巖丈な處を――水雷除にね。」

と串戲らしく言ひながら、手早く金入を開けたと思ふと、

「若旦那。」と、幾世は思はず身を開く。

「往來端で、野天博奕見たやうだが、まあ可いや。否、私の頼みを肯いてくれるんなら、其がな

くつちや駄目だ。お前さんは欲しくなくても、欲しがるものが屹と居る、其の人に見せて相談して……」

やがて、菊川へ連立つて歸つた時は、幾世は、其の雙の翡翠にあらぬ、何か包んだものの白紙の端を、清く一寸襟の處に見せて居た。が、此の婦にしては些し取急いだ體で、ひらりと片脛の雪を、細りと涼しく見せて、件の障子を裡へ上つた。

之では誰も不承知な筈はない。

少時して出て來た時は、紙の其の包んだものが見えなく成つたかはりに、すつきりと、服裝が替つて、紺地に麻の葉絞の浴衣を素膚に、黑繻子と、白地に淺葱の露芝に、紅で姫百合をあしらつた、唐縮緬を打合せの帶を薄手のお太鼓に、しやんとして、ざつと撫でつけた髮らしい、殘ンの後れ毛を輕く搔上げる片手に、障子をがた〳〵と言はせると、露を浴びたやうに姿を見せたが、カタンと吾妻下駄を素足に拽つて、ト立直つたつけ、燃立つ樣な扱帶を掛けて、胸に扇子と云ふ所を、料理家へ行くのに、蘆柄の團扇は、可懷しく……可憐しい。

十六

「では、あの……」

幾世はつツと寄つて會釋して、濃い前髮を俯向けると、素地の月形が颯と照る、群青の露を裝上げた桔梗の花、女郎花、野菊を交ぜた草の花の極彩色、鬢の薫も、床しや、挿櫛。……やがて知る。此は幾世が母ぞと聞く、其の以前辰巳の廓の大籬に水を打たした全盛の、名も菊川と言つた遊女の記念なのであつた。

峰は店へ引返すと、「唯今御挨拶を。」と水兵に言つて置いて、恁うして幾世の出て來るのを、酒も飲まずに待つて居たし、水兵は「は、」と言つたばかり、何やら煙に卷かれた形で、幾度かじろりじろりと峰の顏を横目で視ては、其の頤を縮め、眉を寄せて、面を顰めむとして、其さへ得爲ず、住居の障子を峰の肩越に覗きつつ伸びた顏。

いや、お鐵に至つては論ずるがものはない、三輪の手絡も垂下として、股へ首を挾まぬばかり、暖簾の下で、頽然と坐睡る。——時に、絣の書生が見えない。此は峰が幾世を連れて新道を出ると一所に、ぬつくと立つて、握太なステツキを鷲摑みにしたから、脫らぬお鐵が、「勘定」と、此奴、念入りに手を出すと、帽子の下でギヨロンと睨んで、「何えッ、幾世が知つてるんだい、毎夜來るんだい、何えッ！」大砲が拔けるやう、暖簾が切布でなかつたら、穴が明きさうにずどんと出た。其切見えないのである。

で、觸らば落ちむ擧動でも、溢さぬ露の玉櫛の、辭儀をした結綿に、峰が默つて頷くと、水兵

をば目配せしたので、幾世は、峰の其の背後から、
「貴客、貴客。」と團扇を胸に、袖で招く。
「私ですかあ。」と、ぼやけた聲。
「一寸、何うぞ。」
「はあ。」
と怪訝な顔、が矢張り長い。導く幾世に、ふら〳〵と連れられて、障子の傍に、二つ重ねた棚の裏の、土間の暗い中へ消えた、と思ふと、花片の戰ぐやうな幾世のひそめく聲がしたのは、打合せをしたらしい。
唯、猛然として、立顯れた、水兵の面にクワッと血が上つて、ほッと息して、峰の横手に蠶乎と立つて、
「感謝します。」
「飛んでもないこと！」と淸しく言つた。
「私は、誓つて貴下の御令妹、或は御細君と思うて、約二時間、御酌を請けます。はい、私は嬉しくあります。はい。」と頤が縮むと、目を瞬いたのである。
峰は差俯向いた。

「鐵ちやんや。鐵ちやんや。」
「むゝ、あゝ、あむうゝ。」と欠伸まじりに、脇の下を搔きながら、ぬいと伸した拳が、幾世の背向けた鼻の前、と吃驚して、きよとんと見ると、餘所行の麻の葉艶麗。
「あら、姉さん、一寸お芝居、」と寢惚けてゐる。
扨て店からは出なかつた。……幾世が駒下駄を脫いで障子へ入ると、水兵も靴を脫いで後に續く。忽ち住居で、居直る音、膝行る音などがしたと思ふと、一度閉めたのを又開けて、ト麻の葉に、緋縮緬が、ちらりと搦んで、膝の上に櫛が見えて、白い手が靴に掛ると、上から引跨ぐばかり伸掛つて、軍服の諸手で、幾世の手を拂つて、水兵が我手で、掴んで、ポカリと其の靴を、上へ取つて引込んだ。
「では、若旦那。」
又引つけた障子を細目に、幾世は目ばかり差覗く。
「あゝ、歸るまで待たうと思ふが、都合で勝手に退散する、差支へはなからうね。」と峰が稍調子高に然う言ふと、
「旦那、唯今は御多分に……えゝ、御氣儘に。……ですが、御緩りと何うぞ。」と、顏は見せず、寂びた濁つた聲して、住居から言つた男がある。……其の聲で、

「鐵や、氣をつけろよ。」
お鐵はヒヨイと首を窄めて、衣紋を拔いて、暖簾口から轉新道。
「一寸、一寸、寄つてらつしやいよ、一寸さあ。」

十七

「宛然、海を見たやうだな。」
と峰は平久ヶ原を左に其の寂しい片側を一人行く、——電車の時間は最う過ぎた歸途である。
が、通を澤海橋の方へ取らなかつたのは、幾世が前刻に新道の晴がましさに、裏口から水兵を伴つたのが此の道で。越野家は此處を越した處と聞けば、時も經つたり、婦の戻るのに、途中で出會はうも知れない、と思つたのであつた。
原は一面に靄低く、風ぎつつ重い水に似る、地平線の一帶を黑く亂生ひた蘆で劃つて、彼方は、幽に底光する洲崎の海に、晃く星と、漁火と、風か、波か、いづれが動くともなしに、空と水とに入亂れて、吹くとしもあらず颯と蘆の葉越しの潮の香が音信るゝ。
一臺、二臺、ふと前途から來て廓へ通ふ俥の灯も、靜に舟の灯の流るゝに紛ひ、ひた〳〵と行く跫音さへ、磯打つ浪の響がある。

檜かと思ふ板屋の中に、舳がスツクと雲をさした、足場組むまで高い小屋に、造りかけの大船を眞向きに道に据ゑたのが、三ばかり町の側に續いて見ゆ。其の下あたり靄を分けて肅然として通る、峰の品ある姿は、いま立離れた鳥居の奥なる、辨財天の社を宛然龍宮の、弟分、鯱も鯨も供は連れずに、大蒼海の貴公子が、浪間を微行の裝であつた。
唯、何の小屋の陰に潛んだか、目前へ角の無い巖の如く、海豚に似た肥つた形が、眞黑に成つて顯れた、と見ると、發機を打つて、ドンと峰の胸に衝當つたが、サソクに肩を引いたので、其の圖體がムクリと流れて背後へ辷る處を、峰が、身構へて振向いて見るかとすれば、ずんぐり丸太棒の腕を矢庭に、我が桐太郎の胸倉を取つて、扼つたのは、菊川に居た紺絣の書生である。
「酒料が欲しいのか。」
「何だ。」と急込む。
「欲しくても遣らない、俺は可厭だ。」
「何、何、何だと、何を、貴樣。」
「喧嘩か。」
「勿論だ。」と喘いで言つた。
「然うか、何のくらるな程度で遣るんだ。どつちか轉がるまでか。それぢやあ相撲だな。そいつ

も大嫌だ。」と胸を取られたまゝで、桐太郎は自若として、
「血を流すくらゐで留めるか。それとも、……」
「默れ、汝、横ッ面を。」
「あゝ、撲合ひだな。」と峰は、書生が其の片手に握太の杖を取直したのを屹と視ながら、
「おい、學校仕込みぢやあるが、俺は一刀流は折紙だよ。」
紺絣の漢は、何と思つたか、杖を棄てた。そしてもう一方の手を加へて、峰の胸倉に兩手を掛けて扼つた。
「柔道は三段なんだぜ。」
ものをも言はず、うむ、と呻ると大書生は夜目にも赫と滿面に朱を灌ぐ、かと思ふと、峰が一足引くかとすれば、眞俯向にずてんと轉蹶つた。……途端である。峰の手が其の襟首に掛つたと思ふと、大書生は、地藏立ちにぬいと立つた。峰は投げたのではない、引起したのである。
「君、こんな事をする暇があるなら、私に自動車を一臺目着けて來てくれませんか。――あんな店で世話になるのも仰々しいから留めたが、家は遠いんだよ。」と澄して言つた。
書生が遁げたの何のぢやない。平久ケ原の靄の海に拔手を切る。
丁ど大きな石屋の前で、塔の形や狛犬に、石燈籠も交つて、朦朧とある中に、これを上から視

下して、腹筋を捻らせられたは、臺に乘つた、見上ぐるばかりの大和尙、布袋の石像、軍配で臍を壓へて、
「若旦那、遣らつしやるなう。」と搖り出しの、ニヤリ〳〵が、頰邊から風が出さうな笑ひ方。偶と見て、峰は苦笑した。

十八

橋が見えると、潮が高い。……水は薄光を帶びて、前途に靄が分れ、雲が切れて、二十日頃の月ならむ、二本三本、片側の長屋の軒の、瘠せた柳に幽に影の映すあたり。石屋が石を遺失し、木屋が材木を忘れた狀に、等閑に、大きなのが垣根に轉がり、長いのを背戸に立掛けたのが視められる、と最う埋立地の一側を出はづれ近く、向う岸の灯が水に映つて、小波に引寄せられたやうに屋並も近い。――平野橋――上下に二段に灯し連らねた電燈の、
「越野家は彼らしい……」
が、早や水に臨んだ棧敷めいた小座敷などは、月影を薄りと灯を消して、靄に柳條ある管簾……一人靜に視つつ行く峰の目には、風鈴か何ぞ、其處にチラ〳〵と白く鳴つてでも居さうに思はれた。

峰は、もう一つ月の柳を出て、石の陰を通つた。……橋の此方の詰に、一幅暈の如く月明の映る中に、恁う、弱腰を嬌娜に、低く地を探つて、彼方此方駒下駄の艶と、ちら〳〵と素足の貝を見せながら、渚の浪に追はるゝ裾の、清く冴えたる蹴出褄を、ひら〳〵と團扇で庇ふやうにしながら、心忙いた態で、其處にも靡く柳の影を、差覗き、差覗く、切も由縁の結綿島田。

「姐さん、幾世さんぢやないか。」

「はい。」と、汐干狩の繪に魂の入つたやうに、夢の覺めた目で凝と視て、

「まあ、若旦那。」

「何うした。」と、今度は峰が、却つて地を覗くやうに俯向いて、づッと寄つて、

「水兵さんは歸つたか。」

「えゝ。」

「安心なものだつたらう、水雷除の必要でもあつたかい。」と微笑んで言つた。が、眉は顰めないながら、角ある如く、キラリと三方へ目を光らした。一方は、路傍の草をがさ〳〵と踏んで、スツと埋立地の原へ横に切れた、首拔の浴衣に三尺帶して、褌も露呈に、兩手でくるりと尻を捲つた男である。——一方は、其の平野橋の欄干に胸を合せて立つた、痩せた親仁で、此は、中山高を前のめりに被つて、衣紋竹ではあるまい、怪しげな細長い杖をついたが、のこ〳〵と橋を向河

岸へ渡つて失せた。もう一方は、今、飛蒐つて一堪もなく逃げた肥胖書生を顧みて、且つ行方を ば推つたのである。……書生は知らず、あとの二人は、確と見たのではないけれども、幾世の身に左右から附絡つて居た奴の、峰來焉と見て避けたらしい。然も恰好は違つたが、件の中山高の親仁は、峰の輝いた瞳に紛ふべくもない、菊川の隣家なる、あの煙草屋の旦那である。

——道理こそ、彼處を歸る時、店番が膝のだらけた婦に替つて、餓ゑたる狼の如き目金は見えなかつた。——

其の離れても去り遣らぬ、幾世に迫つた夜の隈に、峰の瞼も柳の葉。

雲又切れて、幾世は顏の色颯と明るく、

「否、串戲一つおつしやいませんでした。御窮屈な、あのお服で、膝もお崩しなさらないで。……お盃を上げますと、兩手で頂いてお取んなすつて。……私は、折角貴客が、あの方の、お鬱ぎなさらないやうにッて思召でございましたのに……濟みません。……眞個不束でございますものですから。」

峰は一寸頭を振つて、且つ頷いた。

十九

幾世は我を忘れたやうに唯瞻つて話したが、うつかり顔が向合つたので、團扇を斜に楯にして、
「そして、何なんですわ。私のことを貴客の、あの……」と言掛けて、急に口籠つたのは、察するに難からず、(妹のやうに、奥様のやうに……)あしらつたとか、思ふと言つたとか、言ふであらうが、恥らふ色が月影の合歡に似て、瞼も聲も打霞む。……
「それで以て、」と一寸息して
「あの、ほろ〳〵お泣きなさるんですもの。久濶最う逢はないから、時候を厭への、大事にしろのッて……私は、何ですか、遠い旅行をする兄さんに分れるやうな氣がし出して、何ですか、悲しく成つたんでございますわ。もうね、何ですよ、莞爾々々お笑ひなさるのがお分れでしたの。私にも、笑へッて、」
と聲は立てず莞爾したが、頰が痛せて、
「お座敷が直き水岸でございましたの。お涼しいやうにと思ひましたんですけれど、氣の着かないことをいたしました。あゝ云ふお勤めですから、水を離れてお遊びなさりたかつたのでございませうのに――でも、威勢よく、何も禮のしやうもない。いきなり川へ飛込んで、横濱まで泳いで見せうか。くれ〴〵も貴客にッて然う言つて御機嫌よくお歸りに成りました。」
「よく、深切に、座敷まで氣を着けてくれました。私からも禮を言ひますよ。」

「あんな、あんな事をおつしやつて、まあ私、何うしたら可いでせう。」
と目の遣場なく、團扇を膝へ俯向く顔、同時に峰が心着く。
「あゝ、何うした。……何か遺失ものでもしたやうだつけ……ぢやあ、なかつたかい。」
「は、否、あの、」と、それでも、美しく瞳が流れて、
「一寸……私。」
「誰かに調戯はれたのかね、歸る處を。」
「否、貴方がお歸りなさいません中に、些とも早くと駈け出しましたんですけれども、……でも、其の所爲ぢやあないんですけれども、搜しものなんぞして居ては、もしか、お歸り遊ばした後になりはしないか知ら、と思ひましたんですけれども。……」
と言淀んだり、掠めたり、頻に何か、其の何か、ですけれども。
「何を――あゝ翡翠か。」
「あの、櫛でございますの。」と思はず、手先を前髪へ。
「櫛を……」峰は目に留めて覺えて居た。
「蒔繪ぢやあない、彩色で描いたのだつたね。」
「えゝ、もの惜みをしますやうですけれど、唯た一つ、母の記念だもんですから。……」

「記念、母さんの……其れは飛んだ事をした。お待ち——今夜私のした事は、お前さんのために間違つて居たか知らん。」と偶と沈んで言つた。瞳の心は、言葉の意味より深かつた。

「些と醉つて居る。」と靜と拱く。

峰の其の袖に、取縋らぬばかり、おど〳〵氣を揉む、肩さへ震へて、

「えゝ、可いんでございますよ。まあ、可いんでございますよ。……御免なさいまし、私は最う、駈出して内へ歸りますわ。」と云ふ聲も、最う褄も浮く。

「橋の上も捜したか。……ではお歸り。一所に歸るなり、もう一度橋へ連立つなり、共に捜して上げたいが、其は許し給へ。私には面倒だ。あの繪は誰が描いた、知つてますか、故人のでなかつたら、似たものは出來るも知れない。——知つてるかい。」

「存じて居ります。……でも、もう、貴客。」

「何故、可いぢやあないか、言つて御覽。」

「えゝ、ですが、構ひませんでせうか。」

「構はんとも、何故だ。」

「私の母が……何ですから。——あの、姉のやうなんですけれど、でも、貴客ですから、其の母が平時も申して居りました、先生のお名を申しませう。——あの三浦さんでございます。」

唯、顏を見て、

「三浦さん。」と、目を見張つた。

知らずや、畫家、三浦柳吉は、過般菊川の店に於ける三人の同伴の中なる一人である。

青い花

二十

「何だか考へさせる。——面倒だ。」

峰は汐見橋を渡果てると、袂を拂つて呟いた、後を見向きもしなかつたが、一寸でも振返つたら、尙ほ彌が上にものを思つたらう。

恁う渡越した橋の彼方の、埋立地へ曲る道の角に、吉原の柳に對して、梅かと思ふ枝振の榎が一株。辻も一里塚めく處から、俗に追分の榎と稱へて、本街道は大盡道、裏を行くのを間夫の通路に擬へて、心得違ひに今も故と外れて行くのがあると聞く。……其の榎の下に、なごり惜さうに幾世が一人、櫛ならぬ月を中空に頂きつつ、露深く悄乎と彳んで見送つて居るのである。經緯の何かがあつて、平野橋を最う一度渡返して、此の辻まで送つたらしい。が唯其ばかりではない。

峰の姿が、橋一つ離れたと思ふと、何處に潜んだか、首抜浴衣の三尺と、中山高の細杖とが、辻の兩方から、むら〳〵と影を攪濁てて湧いて來て、骨も筋も、あはれ抵抗ふ袖も萎えたを、帶が動き、髪が搖めき、團扇が悶えるまで左右から迫詰めて、引立てる如くにして、幾世を挾んで原の方へ曳引いて行く――見たらば一層、峰のために面倒だらう。

首抜浴衣は、幾世が母の夫に當る。が、都合次第で、兄者人と呼ばせもする、虻の群八、渾名のある妓夫上りの無職渡世。中山高の痩親仁は、根越萬兵衞、名古屋ものの金貸で、新道は略全體が其の家作で、且つ資本ぬし。根越の姓を猫萬とて、卽ち煙草屋の亭主なのである。

時に、幾世の立姿が榎を消えると、峰の後姿は、其處に大道店の茶飯屋の暖簾に隱れた。立並んで、尻切半纏が一人居たにも係らず。……露店の灯の黄に薄赤い屋臺は狹し、肩の擦合ふばかりに立つた、が、ぐい〳〵と肱で暖簾を拂ふのさへ透いて見えて、立處に玻璃盞で三杯、呷着けてづいと出る。

「すつかり醒め了つた。」

言ふ其の面は、月影に背いて、打仰ぐ天の一方に一つ輝く星の色を微に紅く染めたのである。唯見ると、富岡八幡の宮。門前、蛤町の角を掛けて、颯と夜半の戸が目前に開けて、月の市が新しく立つやうに、ちら〳〵と黑い人影。づらりと揃へた客待の、露に冴えたる俥の提灯。

忽ち一燈、花火のやうに欝と蒼い、氣紛れな街燈の影を浴びつつ、峰は横町の暗さに紛れた。――入つたのは數矢町、ト行先は大和町、惠比壽橋、惠比壽の宮、永井の橋、鶴歩橋。

惟ふに、木内甚右衞門氏とは、同じからず、峰は基督の子では無いさうであるから、神が此處へ導いたのではあるまい。

峰は豫て俥を嫌つた。渠が人間に曳かせ、喘がせ、轅棒に摑まらせ、龜の子泳ぎに、藻掻かせ、駈けさせ、蹴込みの上に、車夫の頭より高い處に、兩脚を突張つて、仰反つて乘つた形を見たものは未だあるまい。……歩行かない時は電車に便る、でない時は自動車を雇ふのである。が、持說でも、主義でも、主張でも、問題でも何でもなく、それが、都合で勝手なのである。

御宮の門に、數の多い、俥屋に惡勸めをされるのが、……

「煩いや。高橋通にはタクシイが、……」

横町の此の道は、嘗て三人づれの時、畫家の其の三浦柳吉が先導で、心覺えに覺えがあつた。

二十一

茶飯屋で引掛けた時、峰は半纏着の壯者と、めしやの爺さんが話すのを聞いた。

「昨夜また魅られたつてえぢやねえか。何處ン處だい。矢張り鶴歩橋、あの邊かい。」

「何に、昨晩のはね、もつと、ずつと冬木も海邊橋寄の方で、米倉の前に倒れて居ましたさうで。過日の救世軍ほどの事でもなかつたつてますがね、其でもお前さん、目を廻して居たにや違えねえんで。えゝ、世は樣々でございますよ。深川の若衆でも、又本所の三つ目あたりへ通ふのがありますからね。二三人連で歸つて來たのが、倒れものを視て、ぎよつとしながら、それでも、おいおいと呼ぶと、直ぐに氣が着いたさうですがね、無地の羽織で、年配な、一寸商人衆か、番頭さんてつた風俗だつたと言ひますがね。」

「一體、まあ、」と半纏が意氣込むと、

「さあ、」と、靜めて取つて、茶飯屋の爺さんが、

「ねえ、まあ、高い聲では申されませんが、恁うやつて夜あかし商賣の連中が、お互ツこに、ひそひそ噂をしますには、場所がらぢやありますし、辨天樣がお忍びでお歩行ひなさるんぢやあるまいか、とまあ、ねえ。……手前ども昔から聞いたんでは、それは〳〵天女方とは思へない、婀娜な御容子だけれど、月の良い夜に、池の緣へお出ましのお姿は、屹と白衣をめして居て、其が又申さうやうもなく神々しいと言ふ事でございますが、今度のは誰の口も暗夜に紛れる、眞黑な召物だと云ふにつけまして、勿體ない天女樣が裘をな、それ裘を召して入らつしやる。——地震で人を壓殺した梁もなし、火事で人を燒いた柱と云ふのも、有らうやうはございませんが、……

海嘯を御覽じやい。あの可恐しかつた……十萬坪、砂村邊へ流れ出して、橋を落すわ、屋根を崩すわ、山谷のもとの故郷の、天狗魔障が憑移つたやうな暴れ方で、人間を横薙に、何人生命を奪つたか知れないやうな材木が、それ木場一面の中には參差と立つて、血を吸つた赤い雫を垂々と、まだ乾かないくらゐなのもございませうで。それをお叱りなさいますか、それとも人間をお弔ひ遊ばすか、で、裘を召して、夜中頃、木の中をお徒歩ひに成るのであらうトサね。

お姿を視て、煩つたり、腰が拔けたり、倒れたり、いづれ無事で濟まないのは、昔將軍樣を、まざ〳〵と拜むと、目が潰れたとおなじ事なのかも分りませんよ。へい、へい。」

「だがね、爺さん。」

「へえ、否、しかし壓事は成りません、何にしろ人間業でございますまい。」

「そりやね、そんな事があらうも知れねえがね、鳥だか、魔ものだか、其の、空をふは〳〵と來る婦の形に威かされた奴と言ふと、屹と、蝦蟇口だ、紙入だつて、散然も燦然も無くなるツて噂ぢやねえか。此奴が變だ。私が思ふにや、ウイ、プツ（と酒の呼吸で、）失禮、失禮ながら、辨天樣や、お姫樣なら、何も。」

「否、それがもし、唐土で、（唐土でと首を掉つて、）虎が人間を啖ひますのに、嚙り缺いた、手なり足なり胴中なり、婦でも男でも、皆素裸で、靴までも脫げて居りますさうでね、へい、小兒に

行水を使はせやしますまいし、ソラヨなんて、お前さん、虎が、爪で、帶の解けよう筈はないので。人間自身が半狂亂で、可恐しさに、かなぐり棄てる……何でも、瀬戸際と云ふ恐怖さに怯えた時は、身に着いた一番其の大事なものを失くなしまさ。生命が第一、それさい絶氣けるくらるぢやあ、次に大切な、金、紙入……」

峰はそれまで聞いて茶飯屋をフイと出て來たのである。——渠は今、惠比壽橋を前に、材木を左右に見た。

二十二

餘の事は、然して耳にも留めなかつたが、洪水の波濤に荒狂つて、屋を崩し、橋を流した材木の、犧牲の雫の乾きもやらず、夜半は赤い露を點滴すと言つたのは、氣に掛けるともなく心に響いた。……餡掛爺さんが何を言ふ？……血こそは眞赤な嘘らしいけれども、數限りない材木の、自から川水を吸ひ、夜露を受けて、濡々と香を籠めつつ、幽に隨處月影を浴びた色は、動かぬ稻妻を描いて凄い。……どぶんと半ば水に浸つた丸木の如きは、草か苔か、蒼白く燐火を搦めて、角のない巖の、靄から飛出した平久ケ原の其のやうに、心なく見過さるゝものではなかつた。

餘り靜さに、跫音も立たず。辷るやうに橋を渡ると、

（過日の惠比壽の宮だ。）と思ふと、……月が隈で、たとへば漆を塗つたやうな、横木も拔け拔けて撞木を聯ねた、神樂堂の欄干の一小間に、大きな白い婦の顏が眉さへ目さへ透通つて……白い掌を、裂けたる角の如く頤を受けて其の欄干に頰杖した。此がないと繪にした艶婦の梟首に見えよう。匍匐つたか、蹈んだか、帶も裳もなしに、それは、折曲つて、奥へ一際暗い樂屋口の處に隱れて、顏だけ神樂堂の隅を取つて、青く仄くのである。

唯、通り掛りに峰の目の注いだ時、ニコ〳〵と唇を黑く笑つた。齒を染めたやうである。それも、仰向いて正的に笑へば稚い戯れして怯すとも見えよう。容は朧ながら、艶やかな重い黑髮を堆く束ねたまゝ、頤を引いて、頰杖で、俯向きで、然も嘲る狀にフ、ン。

峰が又、番臺で湯屋の女房でも莞爾ついたほど、物ともしない樣子で、其なり行かうとする、……此を視たりや、サと音を立てて、眞直に立つと、廂の隈が高々と黑く片頰を染めたが、時ならぬ桐一葉、星を貫く二尺角の材木摺れに、飜然と躍つて、欄干を下へ飛んだ。

有繋に凝然として瞬きを止めた峰の瞳に映つたのは、其の袖我に迫るにあらず、裳を返して、我家の裏木戸を潛るやうに、澄して鳥居を向うへ入れて、境内なる葡萄棚の葉の繁みを、一寸白い頸を見せて、肩を低めて入つて行く、鴉が立つた月影の黑い姿。

すぐに裏岸で、筏を渡るか、沈木を踏むか、ひた〳〵と行く水の音。

峰は袂へ手を入れた。が、トしたらしい煙草も出さずに、其儘腕を組んで、悠然と歩行き出す。

あの、永井橋の、橋の眞中頃に、水に根を持つて搖れもせず、又其の姿が立つて居る。潮に滿ち滿ちて、月を裝溢すばかりである。此處の丁字形の堀は、渺々として圓に靄に擴がつて、星は、月にも、潮にも遙に推流されて、水心に一點の光も留めず、雲に浮藻の漂ふ如き、遠近の森の梢に懸る。

明い船は高く浮いて、松ケ枝に纜を投げ、暗き船は、舷を水に沈めて、藥研に似て、恁ばかりの大潮を、其の底から搖り湧かすやうに胴の間に晃々と水銀の泡を散らす。

水の多さに、橋の低く見えるのを踏沈めるばかり、ずつと渡つて、間一間ばかりに進むと、其の婦は、くるりと向うむきに、裳に波を引くか、トすつと……すつと橋の上を退いて行く。

退くか、とすると、忽ち輕く鶴歩橋へ乘移つた。乘つたと言はう。すらりと弓弦に、高く反つて、細く長いのであるから。

唯、構はず永井橋を渡つた、峰の方へ、中有に浮いた狀して屹と向直つて、すつくと立つた、水を中に、橋と橋は、我と渠と、キリ〳〵と扇の要に寄るのである。

二十三

間は僅ながら、夜の深さは谷一つ水を隔てた……空に棧橋、夢のやうな仄白い鶴歩橋の上に、月に流るゝ一むら雲を颯と蓑の如く捌くと見れば、黑く艶やかな袖を左右に飜々と鳥の羽搏く狀して、裾を跳ね〳〵足をも着けず、ふは〳〵と飛蒐つたのが、恰も峰の渡り果てた永井橋の袂である。

象牙の鼻を嘴に、ツと寄せて、帶も腰も一捻り、斜向に躍縋つて脊も亦高い、――峰の耳を掛けて襟首を兩袖で引包んだと見る瞬間、「あれ！」と媚かしいが、忍び伏せた聲が夜陰に響くと齊しく、裳を空に一反り反ると、其なり絲を拔いたやうに、諸膝を折つたまゝ、黑い姿は仰向けに成つて、しな〳〵として地に倒れた。

寬かる胸の白々と、乳房から褄へかけて、月影が襞襠を縫つて、ちら〳〵と蒼白く、紫陽花の花の枝を、一束挫折つたやうな、艶に冷い婦の香が、芬とする。……亂れた腋明の肌を踏へて、峰の膝は、倒れた帶の上に折敷いて、其の掌は、輕く柔かに、然も可恐しき威力を以て、豹の如く婦の胸を壓へたのである。

唯、裳を膝なりに靑ずんだ蹴出しを散して折込んだまゝ、寢て露呈な顏も動かさず、背向けもしないで、――翼に張つた手首が急に出なかつたらう、――袖ばかりをふら〳〵と煽るのが、流に弄ばれるやうに見えた。

「何だ。」
峰は投げて言つて、眞直に離れて立つた。
「翡翠玉を銜へた化物かと思つたら――人間か……何だ。」と言棄てる、と僅かに捲れたらしい羽織の袖を肩なぞへにスツと落して、冷然として澄して去る。……月下に稜々として肩がやゝ聳えて見えた。
「旦那……」と呼んだ婦の聲は、驚いた咽喉に未だ整はなかつたらしく、よくは聞えぬ。……ト袖で敲きながら、胸を半ば半身に起したが、引掛けの帶の端を落したまゝ、ぐつたりしたやうにすると伸す、土に素足で、腰を支いて、
「あゝ、」……吻と吐く息が、乳に響く、片手で胸を擦りつつ、
「旦那、若旦那……」
今度は最う婀娜な聲――
「揚代を置いてらつしやいよ、御冥加にさ。見ただけでも投錢は出らあね、一寸、兄さん。」
と斜違に中空の月の弦に胸を反して、じろりと見た。が、惜い哉。此の時しも峰は既に道を折れて、深く材木の奥に隱れたのであつた。
「まあ、呆れた。」

立つた姿は、數寄屋か明石か、時節も構はず黑の無地の羅に、背筋も映る素膚の白雪。土も附けない指を跳ねて、頰に亂るゝ後れ毛に、水櫛を一寸拔くと、はらりと落ちたは懷紙。
――實は神樂堂で、鴨を待つ間に、ぐい〳〵逆氣を引搔いて、自棄に潰島田を搖ぶると、薄淺葱の切が拔けて落ちた。神の子の甚右衞門氏が見たら、此も靑い炎であらう。其處へ近づいた峰の影に、懷紙を引扱いて、櫛で留めて置いたもので。――最う少し間があると、長煙管を通すやうに、紙を繼いで何處までも長くして、近づく男の橫顏を遠くから撫でる處、四五度此の術も用るた姐さん。
其の懷紙、みだれた姿、腰紐もずる〳〵と、引摺る裾で蹌踉と起つて、
「お舟さん(と自分の名。)何うおしだ。一寸毒氣を拔かれたよ。……辻斬には苦手だね。」と、うつかりしたが、心着く、風一陣さら〳〵と、月夜の橋に林の音。身に沁みたやうに袖を合せた、夜鷹の褄も水色の、深川の夜は更けにけり。

露臺

二十四

此頃の十時は、未だ宵の口の事であつた。黒江町、高橋から、本所を抜けて來る電車が、龜住町の停留場で留まると、大きな風呂敷包を持つた女房だの、職人風のだの。此の邊の電車では誰でもよく見掛けると言ふ、白く塗つた、髢を長く出した婦に、白髮染の禿げかゝつた小さな圓髷の媼が附添つた一組。ものと品は、種々でも、歸する處は、慶庵が附いて月圍の目見えの往還、時刻なれば還りらしいのが、四邊を茹らして下りる、と其の後から一人……人を搔き分けもしないが、聊か心忙いた樣子で、衝と出た運轉手臺の方。急いで切符を渡さうとすると、取る方が手袋を嵌めた、もかりと威かすやうな大きな掌であるから、離せば落ちるし、待てば焦燥つたしで、押着ける發機に、風が浚つて飜然と飛ぶと、下りた客を、車掌の瞥乎と視る目が、嘲つて曰く、間抜めい、女房に逃げられたらう。

と言ふやうな目色を、背中に射掛けられた時分には、目前に立つた女房の背負つた大荷物を危く避けて、線路を突切る、――堅絽の羽織に紺絣で、鹿革の緒の散歩下駄を穿いた、其の男が向う側。

「向う通るは繪師ではないか。

繪師は繪師だが、

繪の具箱持たぬ。」

只見た處は、商人とも、會社員とも、勿論、學者ともつかず、況や紳士とは取れないが、下谷根岸の住人、浮世繪では人に知らるゝ三浦柳吉は渠である。

然れば車掌の目は高かつた。ものはもので、單衣の紺絣も結城らしいが、羽織の疊皺でも知れた、年紀は三十六七らしいが、目下獨身ものの……遁げられたのではない、昨年の春、女房に死なれたのである。

御愁傷の際、こゝで敬意を表さう、畫伯、畫伯の亡き夫人の實家は、兩國彼方とも聞かず、墓は本所とも聞かないのに、今時分何處へ行つた歸途であらう。

時に、廓前の新道で、去る年の出水が、鮨屋の娘の滑々と柔かさうな肌理こまかな胸を浸したと聞いて、我を忘れでもしたらしく、「あゝ羨しい。」と言つたのは此の人で。「裸體が見たいのだらう。」とお錢にまで舐められる。ソ、ソ、其樣な不見識な吾夫哉、……何ぼ戀中だと言つて、先だつた美しい夫人が、上野の森か、天王寺、御院殿あたりなら知らぬ事、隅田川向うの此樣な處、剩へ人混雜で、嘘にも幻影を顯さう道理がない。――柳でも點滴るばかりの露が無くては、幽靈に成つても埃に噎せさうな華奢な夫人であつたから。

――何を見て、柳吉が、然までに慌しかつたらう。眞中ほどに釣革で立つて居た、停留場に近づいた電車の中から窓へ伸上つてまで、後の方を覗いたのであるが、下りると今、向う側の交叉

點の角が、武藏屋と言ふ煎餅屋、其處を拔ければ根岸へ戻道の乘換の順だのに、風やゝ吹きしく宵の灯の、華やかに流るゝ廣場の、人通りを拔けつ、潛りつ、舊來た方へ半町ばかり漾ふ形が、新しい夏帽だけに、急ぐのが浮いて目立つまで、取って返して、つか〳〵と寄って、足を留めたのは、いかゞな十德を着て土耳其帽を冠つた辻賣卜者の店である。

二十五

易先生の其の乾坤一露臺の上には、人相手相の、惡くすると遁げた亡者のお尋ねものを、地獄から配附に及んだやうなのを前並びで、算木筮竹式の如く、一具の天眼鏡を、ぴたり三方に据ゑた體に、道服の胸三寸に引着けた、かんてら入の看板には、天に乾の卦を朱入に記して、正面に觀星堂、横に北斗の七星を蒼く描いて、下に如海道人と、黑々と銘を打つ。

威嚇には似ないで、中肥りで、髯の無い、日燒か、酒か、鼻の頭の稍赤い、地藏眉毛の柔和な仁體。莞爾やかな顏色で、胡麻竹の骨で一面に古風な東海道、一面には田子の浦打出でて見れば白妙の富士を描いた名古屋扇を、胸へ半開きに當がひながら、

「さ、さ、緣談、待人、はしり人、方位方角、當事、當用、過去、未來。……さ、さ、すべて身の上の判斷。人相、手相は特別を以て無代價で見て進ぜる……師匠の命日でなけれどもな。」

と獨りで擽つて微笑とすると、立合の湯歸りらしい職人風のも釣込まれて莞爾と成る……と言ふもので。小僧まじりに四人ばかり立掛つたが、誰も占つて居るのは無い。如海道人も不心得な、業體としては、憮然として、超然として、聊か傲然を加味して、愁ふる如く、澄した如く、納まり返つた如く、癪に障つた如くでないと、信仰が薄いものを、今時は場末の前座でも饒舌るまい、惡洒落を申さるゝから、何か話などはじまりさうに見えて、人は散らぬが、見料は出さうとしない。處へ柳吉が立つて、小僧の上から夏帽で覗いたのである。

色の淺黑い、細面の、瞼に醉を帶びた顏を見せると、

「少々。」

「はあ、此は。」と仰山に、如海は茶番の三番叟の如く土耳其帽を仰向ける。

「願事ですが、……何うぞ。」と、柳吉は帶にした扇子を取つた。

「はあ、御希望、お目的の、成就、不成就、善惡、吉凶、そも如何と言ふ……はい〳〵。」と頤を膨らまいて、立合をづらりと上目に、一つ氣取つて、卜恭しく貫目を示して、右の天眼鏡を張肱で取るのに、道服の裄の長いのがぶる〳〵と搦まつて、些と什うも中氣症染みる。

「お手を、左、お左。」と咳いて言はるゝ。

「手ですか。」と柳吉が、扇子をあとへ引いて胡散らしく猶豫ふと、

「念のために……手相をな。」
「急ぎますから、折角ですが。」と柳吉は金入を横向きに、一項につき見料金若干也をカチリと置いて、
「易だけお立てなすつて下さい。」
「承知しました、いや、しかし此は御均等でありますな。むゝ、」と又一つ頤を膨らまして、天眼鏡を一寸頂いて差置いた手に、筮竹をザクリと取つて、丁と翳し、口の裡に、もん〳〵もろ〳〵と唱へながら、パチリと跳ねて、呼吸で颯と割る處を、
「あ、御道人。」と看板を横目に睨んで、柳吉が呼掛けて、
「お待ち下さい。」と何故か止めた。
「はい？」と、筮竹を露臺に取つて、半ば怪訝な顔色。
柳吉は帽を脱いで、扇子と一所に引摑み、
「餘り唐突で亂暴のやうですから御家業を縁に伺つたんです。……御道人、失禮ですが易をお立て下さらないでも、貴下の御判斷次第で、成就、不成就、吉凶ともに即座に分る事なんです。」
「が、願事とおつしやつた。」
「其が願事なんですよ。」

と迫つた眉に似ず、優い目許で、莞爾するのを、じろ〳〵と見るうちに、頤と頬を揉開いて、大口でニワリとして、
「あゝ、相分りました。」
「分りましたか。」
「源三位頼政、化鳥に當てた、此でがあしよ。」と看板の傍を敲いた箱に、夜鷹の姿。

二十六

「道人さん。」
賣卜者の、其の底意の無ささうな、言語、擧動に、柳吉は早や打解けて、
「驚きました、お見透し、確に中りました。が、肝心なのは願事の叶ふか、叶はないかなんですが、御判斷一つです。」
「對象物は。」と此の時觀星堂、可恐しく堅く大きく出て、蓋も無い古箱に、人形の、萎えたやうな帶の結び目を見せて後向に飾つたのを、ぐるりと燈に向け直いて、
「えゝと、扨て此に相違ないと、私もさ、存ずるが、何か此の紙人形の横縦、肩裾の有樣とか、前後の向方とか言ふ其の工合、鹽梅で、御自分に占ひをなさるとでも云ふ事ではありませぬかな。

卽ち、それ、願事の叶ふや否や。」

「否え、人形其のものが、直ぐに今申した願事なんですよ。……何ですか、些と申兼ねた事ですが、其の夜鷹は、賣りものぢやあないのですか――御免なさいよ。」

柳吉は、かんてらを覗いて卷莨を吸ひ着けながら、

「恁う言つた所は、……柳原の土手で狐に魅まれて、石地藏に出會したやうな、半間な言種ですがね、其の夜鷹は賣ものですかッて、」と、も一呼吸醉が出たらしい顏色である。

「賣りもの、……」と目皺を寄せて、――此の返事を聞かせるのが樂みさうに――觀星堂は獨りで味つて、ぺろり、と唇を横舐めにする處を……

「や、賣ものか。」と立合ひの角刈が、居合腰の、グッと胸を突いて覗き込んで、

「看板かと思つたい、土御門家傳來と云ふ處で安倍の童子へ術讓りの葛の葉かと思つたぜ。」

「眞個でさあ。」と合槌を打つた立合の老實なのがある。

「藥屋ぢやと、臨月の腹を解いた活人形と言ふ處か、はゝはゝゝ。いや、土御門で葛の葉は成程見立てぢや。が、此は正しく夜鷹だて。」と、矢張り莞爾やかに左右を眄し、また三浦に打向うて、

「しかしながら、觀星堂我折れました。よく、これが賣りものと分りましたな、全く其に相違ないので。」

「難有い。」と柳吉が、うつかりしたやうに一禮する、熱心な顏を瞻ると、

「やあ、此は心着きませぬ、えらい失禮な事で。」と、くしやり、ト引摑んで土耳其帽を脫いだ頭は、すぺりとした坊樣。

「實は一寸行違ひの間に賣れて了ひはしないかと、電車を下りるのが、もどかしい位でしたよ。……觀ておいでなさる方が有るもんですから。」

「まさか。」

「夜鷹ぢやあ。」と立合が、左右から聲を合せて言つた。

嘲罵と、冷笑を兩方に、傍聞した小僧さへ笑ふものを、柳吉は、些と大袈裟だけれども、膚撓まず、

「一度、經驗があるんですよ、道人さん。」

「はあ、御鑑定。」

「鑑定も何も無いのです。連があつて、餘所で飲んだ時、それも、些少の腰掛で一杯なんですがね。ふと連の人が棚の上に有るのを見つけて買つたのが、此と違はない紙人形です。賣りものの札まで有つたものを、些とも氣がつかないで居て、人の手に渡つてから、一目見ると、頻に欲しく成つて〳〵……いや、人のものを欲しがるなんて、お恥かしい次第ですけれども。」

殊勝に、柳吉は恥ぢたる色。

二十七

觀星堂は咳いて、

「手前、賣品を恁う言つては如何はしう聞えますが、一體が然したる品でもありますまいで。何か先生方、……」と云つたが、繪は人相には顯れまい、此の意味はあやふやで、

「其の何か、御覽に成ると、別段な見處でも有ります次第で。」と仔細らしげな目である。知るや、知らずや、頭も同鑄型の坊樣の、菊川に託した人形には、胸に包んだ翡翠玉があつた。

柳吉は何も知らない、率直な態度で、

「別に何うと言ふ見處も何も無いのですが、其の人形には、不思議に情愛が籠つて居るので、堪らなく引着けられるやうな氣がするんですよ。」

「はゝあ、で、既にお求めになつた御友人の方も、矢張り右同樣なお心持でありませうか。」と眞顏で訊きつつ算木を撫で、

「さあ、まだ其の人には其の時ツきり逢はないのですから、何と思つてるか分らないのですが、何ですよ、逢つても、うつかり此樣な話は出來ませんよ。」

「成程、いまでは右に左、貴下が然まで御執心で、今夜の此がお見當りに成らずと致いて、都合でお讓り受けなさらう場合には、成程、讃めてお談しをなされたでは、如何にも御友人が御惜みに成るは必定――此は人情、いや、易にも出て居る、易も人情。」と又咳く。

「飛でもない。」と言ふ柳吉の打消しやうが聊か激しかつたので、此の場合、易をば詈られたのかと、如海道人異な顏をすると、

「否、其の人が、もの惜みをするやうだと、喧嘩をしても奪ひ取ります。」と言ふことが亂暴で。

「些と手暴い、あはゝ。」

「先方は尙手暴いんです。見た處は蒲柳の質で、柔道は三段と言ふんですから。でも投げられるまでも私は遣ります。が、何うして、御道人、一寸でも讃めようものなら、（氣に入つたらお持ちなさい。）で、餘り手輕いんだから、浮かり話も出來ないのです。此方が物欲しさうな事を言つて、清く讓らうと言ふ時に、惡く辭退でもして御覽なさい。面倒だ、と後で品ものを打棄り兼ねないんですから、爲にね、遙に引退つて遠慮をしました。――其の癖、欲しいには欲しいので。……串戲ぢやあない。（と莨の吸さしを投げて、）夢にまで見ましたよ。……其の、白紙に、水色の切で、艶墨の、袖、褄の、嫋娜として立つた處は、思が殘つて姿を顯す、美しい人の幽靈のやうにも見えれば、喪を着けた婀娜つぽいのにも見えるし、怪しい婦の月夜の影法師らしくも思はれる。」……

…と半ば獨言のやうに、うつかり言つたが、
「あゝ、此方を向けて、顏を見ても構ひませんか。」
「さ、さ、御遠慮なく。」
「夜鷹に遠慮が要るものか。」
「武士道は不自由だぜ。」――と立合が一人、警句を放つて、そして齊して笑つた。
「いや、然うでない。」と眄して、
「業體柄、天上の星に對して遠慮なのぢや。まだ宵の間ゆゑに、故と背後むきに愼ませて飾つて置いたて。――先生、さ、さ、手にお取りなさい。……既にお聲懸りの婦人ぢや。私も爰に於いて、濫に手を懸けますまい。」と、何か、得意顏に頤を撫でる。
三浦更つて、
「お價値は。」
「然れば。」
「取引きは些と拙かつたな。先へ讃め過ぎましたよ。」
「否、御朋友がお求めとあれば、其の砌、略御承知かと存じますが、お望人に應じ、價値は臨機應變と申す儀で。」

「弱つた。今夜は高いんですか。」
「はゝゝ、敢て然うでもありません、が、少時。」と、用ありげに言つて、例の恭しく天眼鏡を取ると、ぴたり、と差當てたのが、柳吉の正面。で、道人はづいと立つた。
ト夏帽で、半ば面を蔽ひながら、
「人相を見るに及びません。餘り持つちやあ居ないんです。」
然うではない。辻の藏の廂はづれに、晃乎と宵の明星を映したのである。
「……亥の上刻であります、十時の金十錢也……今夜の價は時間で參る……」

鶴の紋

二十八

今日此頃の陽氣と雖も、獨身ものの寂しさは、玄關番の書生が突出す膳の侘しさに堪へないで、何處かで晩飯を濟した後の一杯機嫌の點燈頃、柳吉は實は昔馴染の辰巳の廓の、「鶴兼。」と言ふ引手茶屋を音訪れたのであつた。――本所の易者の店で夜鷹を買つたのは、抑も其の歸途を黑江町で乘換へた道順で――何をしに出掛けたらう。大籬へ送られて、辨天さんと添臥の寸法は固より、

船宿の二階で三筋霞の連弾にした處で、（お立ち……またお近いうち。）の、時間が此では早過ぎる。故あるかな、柳吉は其の茶屋の女房に目玉を啖つて、合方と口説でないから、（階子下りるもすご〳〵と。）と言ふ唄に成らず、店から下駄を穿いて歸つたので。

一體、其の茶屋は、何某と云ふ大店の暖簾下で、上へ本店の稱が付くのであるが、女房が、昔、深川仲町の羽織の氣負を、色香に殘さぬ老樹ながら、松に鶴賀の淨瑠璃に、風の音〆の冴を留めて、長火鉢の横壁に、初見世の張片と、不動様のお札の間に、鶴賀小兼の家名を見せて、廓の藝者の志あるものに、稽古をつける意氣があるから、鶴兼で聞えが通る。……世に連れない昔堅氣、最う七十歳に近からう。何の祟と言ふでも無しに、三四年以來は、宵の間から奥の間で寢て暮すが、それでも、客によつて、老主婦、送りのために出馬と來ると、箱提灯を拳下りに、ひたりと取つて、突袖で、しやんと胸を張ると、腰が据つて、御存じの廣い階子段を反身の姿。遣手部屋を突切るまで、蹌踉ともせぬ。が、新米の女中が、或時其の看板で出るのを視て、吃驚した、「お上さん、戸外は電燈が點いて居ります。」此は未だ可し。二階の廊下を筥提灯で通るのを見て、何とか云ふ出嫁娼妓が、「アラ婆さんはボケてるよ。消すのを忘れてサ。」と言つたと聞く。

然れば、世に疎い事は、水天宮へ參詣をして、朦朧車夫にポン引かれて、靈岸島へ勾引かされ、巾着を拔かれた時代もの。

小さな祖母子の白髮さへ、月夜に提灯を點けた所爲だと思へば、過ぎし昔が偲ばるゝ。

十二三年も過ぎた事……誰の身にも有るさうな、兄分の先達分。惡友の信友と言ふのに、そゝのかされて其の頃の相乘車で、天狗に攫はれて龍宮へ落ちる上の空、足も地に着かぬ時分から、柳吉は、歩行は上手、轉ぶはお下手で、此の媼さんに手を曳かれて、おんぶの世話に成らないばかり。で、門を入ると罰利生ある伯母よりも煙つたく且つ可懷しい。――後の三浦畫伯が、ぐでんぐでんに醉つたのを見ると、「おや珍しい、お猪口で三杯も飲つたか、」と言ひ、前後を忘じて、愚談に及ぶと、傍聞きして感心して、「お宅でも口をお利きなさるのかい。」と言ふのであるから、跳ねても、飛んでも、泳いでも、柳吉は、此の鶴兼に對つては、蠢にも、蜻蛉にも、鮒にも成れない。……傳へ曰ふ、隅田川に、（おぼこ。）と言ふものあり、二才にして、（いな。）と言ひ、漸く長じて（すばしり。）と成る、息子にさへもまだ成らぬ、（おぼこ。）は鯔魚の嬰兒のみ。

其の鶴兼に――引叱られた。――

が、熊さんのために辯じよう。老主婦が貸さないのでなく、畫伯が返さないためでもない。勿論、前勘を啖つて引退つた次第ではない。……元來、柳吉は、亡き其の細君と結婚してから、根岸の風の吹廻しは、此の里へ、一年に一兩度の、其さへ夜半に吹きつける野分のやうな氣紛れで、町や山の宴會くづれを、どつと吹いて、吹く時は、戸を敲き、簾を捲くが、忽ち、ひツそりと止

むに過ぎず。露は散らせど、女郎花を折りはせで、萩の波をサラ〳〵と籬に音信るゝばかりであつたに――今宵來ての言條を聞け、――新道の菊川の看板娘を、茶屋へ呼びたい――と言つたのであつた。

二十九

内の電燈は未だ點かぬ。が、燈明を捧げた店の縁起棚。横に長火鉢を避けて、づしりと坐つた、……部厚な、大柄な、其割に色白で、眦の下つた莞爾やかなのが一人。中形浴衣に打合せの帶を、太い腹に、ぐたりと卷いた、居坐膝自ら崩れて、少々淡紅色を溢出させ、狹布の細布胸合はぬ、むつくりとした乳房も透くのか、髪は濃いのを大圓髷で、赤い手絡を掛けた形は、乳母の目見得、でなければ場末の床屋の花嫁御で、何う見ても、そんじよ其處等の姐さんとは受取れぬ。が、房州産の鶴兼の女中で、老主婦の提灯を見て、戸外にや電燈が、と言つたのはお鹿と言つて、此の女。――讀めはしまいが、新聞の、何か挿畫を見て居た處へ、俥も着けず、散歩下駄で、三浦柳吉。――

「おや、入らつしやい。」と、其でも奇特さは、老主婦のすなる、挨拶を口うつしに、和笑として、「お珍しい。」と又ニヤ〳〵と成る。

「豪いな、そつくりだ。」と長火鉢までづッと寄つて、

「だが、然う無暗に愛嬌を溢すなよ。涎と一所だから、歩行くと辷るやうだ。」と柳吉は片膝支くなり、お鹿の肩をトンと撲はす。怪しからず好い機嫌で。

またお鹿が、正直に、浴衣の袖を口へ當てて、中で唇をニチヤリと舐めて、最ど眦を下げて彌が上にニヤリとして、

「憎らしい、おいらんに言着けますよ。」

「お前と恁うした中をかい。」と、突如、お鹿の背中へ廻つて、夕立に三太郎法師を引被つた、と言ふ形、大圓髷に顔を隱して背後抱きに、ぐい、と抱く、とぐたりと膝が浮いて、倒れかゝつて、黄昏だから可けれども、其の朱鷺色の埒の無さ。

あはゝ、とお鹿は大な聲で、

「何ですねえ、店前でえ。」

「心得た、二階へ上らう。」と、額を鬢に潛らして、鼻を頬邊へ持つて行くと、練馬大根で、どんどんと疊を敲いて、

「あら、不可ませんよ、老主婦さん。」

唯、薄暗い古簀戸の彼方で、

「誰方？……根岸の先生かい。」と老けたが、透る、壓のある、沈んだ深い聲である。
「あゝ、老主婦、私だよ。」とお鹿の肩に枕するやうに打傾いて、其方を透かすと、小縁前に燻べた楠の蚊遣薪、一燻くべたのが、一呼吸ついたらしく、今戸の豚が薄りと煙を吐く。背戸の外は、砂場の空地に、蠣殼が、夕顔の實の落ちたやうに仄いて、粗雜な四つ目垣、搦んだ朝顔の葉が打水の餘波を滴らして、垣根に植ゑた紅白の鳳仙花に煙の末が薄り掛る。成程、老主婦は浪花節と蛇が大嫌ひだと思ふ、……其の人は、縁の方を枕に、梅雨時出したを其のまゝらしい藍微塵の半纏を、腰へ掛けて、浴衣で細々と小さく寢て居ると、背筋をちよろ〳〵と傳ふやら、袖の下を、むく〳〵と潛るやら、裾にも一匹ひよい、と轉戯れて、生れたての三毛の小猫が三匹。煩惱菩提、もろともに、縁端へも押遣らず、枕頭に牛乳の皿。
「まあ、お珍しい、先生。」と齒切の好い聲、もう一息きつぱりと成つて、半ば起きさうにするのを見て、
「起きなくツても可いよ、可いよ。今私が其處へ顔を見せに行く。多日だつけね、逢ひたかつたらう。」と巫山戯た事を、柳吉は然し沁りと言ふのであつた。
「後生をさして頂きませう。……飛出したいにも、お前さん、（と鐵拐なものいひ。）腰が痛んで言ふ事を肯きません、年を取つちや、まつたく意氣地アありませんねえ。」

「寢ておいで〳〵、お鹿さんで立派に用は足りるから……なあ、おい。」と低聲で言ふ。
「知らない。」と肩を搖つて小さな聲で、
「知りませんよ。」

三十

誘はれたやうな、柳吉も又小聲で、
「三匹か。」
お鹿が、然も一大事に、尙ほ小聲で、
「四匹。」
「產んだのかい。」
「拾つたんですよ、裏の空地に打棄つてあつたのを。」
「好きだなあ。」と歎息して、
「爰を先途とちよろついてる、——彼奴魔物だと言ふのに、逢魔が時と言つて、いまが丁ど汐合だからね。踊りつ跳ねつの物凄さだ。うつかり御後室の御機嫌は窺へません。——燈が點いたら、一息影を潛めるだらう。」

「電燈を點けませう。」と、どツさと立つのを、
「逃げるなよ。」と引据ゑる。
「老主婦さん、不可ません、先生がお巫山戯なすつて。」
「失禮をしては成りませんよ。」と葭簀越に沈めて言ふ。
「失禮も何もあるもんか、お前とは許嫁の中ぢやないか。……慌てるな、知らないだらう。此の鶴兼でも、亭主は亡くなるし、養子にするつもりの甥は持遁げをするし、他に小兒はなし、お前の心根を見込んで養女にして、可いかい、お茶屋を讓つて、私を婿にするつて老主婦が然う言ふんだぜ、ねえ、老主婦。」

うと〳〵したか返事もなし。小猫が牛乳を吸ふ音が暗い。が、柳吉は頓着なく、
「實際此の娘は心意氣が嬉しいよ、ねえ老主婦、――春だつけか夜中二時頃に來て何處かへ倒込んだ、ね、あの翌朝、蘇生ると、此の娘が私を迎ひに來て、此内へ歸るのに、ほんに思へば思はるゝで、附着いて仲の町を歩行いて來ると、目も鼻も霞の中で、何うだらう、(先生今朝は好い氣持でせう。)ツて莞爾ともしないで然う言ふんだ。――はてな、床盃の濟んだ後で、媒妁人が言ふ口上には式がある。……お茶屋の女中さんが、朝迎ひに、昨夜はお樂みとか、おいらんに好遇たでせうとか言ふお儀式は有ると聞いたが、(今朝は好い氣持でせう。)……は聊か長崎丸山で、じゃ

がたら唐人に分らない。(何故だい。)と訊くと、(だつて、藝妓を呼ばうとお言ひなすつたのを、無駄だからつて止めたら云々を言つてさ……それでも止さしたから勘定がお内端で、今朝は好い氣持ぢやありませんか。)――私は嬉しかつたぜ、死んだ女房も氣が着かない深切だ。ねえ老主婦。……おい、お鹿。」と又緊める。

と、ほてくらしい措かしやんせ、で、一つ突退け狀に振捩つて、づつんと立つて、電燈を捻る、と背伸びに、くろぶしの太く出たまゝ、長火鉢の前へ、のつしと構へて、急須引寄せ、茶釜の蓋、柄杓を取つて、拔衣紋。卜丸い肱を張つた處は、何ともソノ名狀し難い。

時々口繪を賴まれる、婦人の雜誌の、令孃、淑女、良妻、賢母、大一座と言ふ活花、茶の湯の會の寫眞の中には、屹と不思議に魔が魅したやうに、恁う言ふ型が一人づゝ有るもの、と柳吉は、お鹿の背後へ入組みの、突離されたまゝ、不動樣のお札の下に――亭主が、ねつり〳〵と賭を遣つて、少からず老主婦を惱ました、祟りのある――將棋盤に、くの字なりに、頽然と肱を支いて、感に堪へて、まじ〳〵と視ると、視られて、まじ〳〵と澄ますほど、ニタリ〳〵と自から口が開くのを、横に向いて、揉隱して、柄杓で茶釜を搔廻して、
「可厭だあ、私。」と、唐突に大きな聲。
「何だい。」と吃驚する。

「一度は素面で入らつしやいよ、おいらんが氣にしますとサ……さあ、早く何樓へ行らつしやい、よ。」

柳吉は又驚いて、

「何だい、まるで、追出すやうだな。」

三十一

處で、菊川の事を言出した——「知つてゐるだらう。」と柳吉が聞くと、お鹿が「知つて居ますとも、すぐ鶴兼の前あたりに向側に出て居た、おでん屋でせう。」と言ふから、「違ふ、新道の鮨屋だ。」……其は其筋のお取締りで、大門内におでんの店が出せなく成つたために、引越したものだと、心得て話す。ハテナ其筋でお取締りに成るやうだと、して見ると、「怪しいのかい。」「そりやね。」と大分さましたやうに、お鹿が大圓髷を仰向けたので、柳吉は將棋盤に凭懸つた儘で手を伸ばして、此方から掌で、括頤を受ける恰好をしながら、「何だ此方が怪しからう、……新道のは、そんな樣子ぢやなかつたよ。」「否、それはね、以前づらりと向側に並びましたおでん屋を、眞中から兩分にして、内の本店、波除へ寄つた方の、引掛帶の銀杏返し、櫛卷の年增の分は、引張るので。大門よりの、島田、三輪のお太鼓の分は、引張……られるんだとかツて堅固いんだと言つ

たんですが、何それだつて。」と今度は注いだ茶を冷して居る。「茶くらゐ飲ませろ、」と柳吉は居直つて、「孰方だつて構はないが、彼の連中は店より外へ出てお酌はしないか。」と眞面目で聞くと、それはレコ次第と、畜生めが、房州でも、こんな時、指を圓にする事と見える。

柳吉は狹い懷を平手で敲いて「分散をするから呼んで來てもらひたい。」と大業に氣勢つて見せると、「食意地が張つてるわねえ、おいらんをめしあがれ。」と又莞爾々々して、職過ぎたじらしを吐しをる。「五目鮨の味を知るまい。」と浴せかけたが、樂屋落なのに心着いて、燕雀なんぞ大鵬の、と昔コロンブスが大陸から歸つた時のやうな囈言を放つて、

「お前は知るまい、菊川と言ふのは、私のね、馴染の遊女の名なんだ。可懷しいんだから是非呼んで見たいんだ。」

些と此も、茶を飲みながらぢやあ意氣過ぎた事を言つた。が、しかし事實で。……先日、峰と信友の神戸の社長さんの深川見物の案内して、新道を拔けた時、フト先へ立つて、あの暖簾を潛つたのは、幾世より前に屋號を可懷しんだためである。——丁ど幾世が姉とも言ふ……亡き母の命日だつた事——それから、其記念を過失つて落した櫛は、彩色の草の花で、繪は三浦畫伯が描いたのだ、と幾世が峰に、遠慮しながら打明けた事とを——讀む方は、更めて御記憶を願ひたい。

當夜、廓内も一廻りしたが、二人の都合で、鶴兼へさへも寄らなかつた。……老主婦は息災か

い、と門まで、柳吉が一人音信れて、此處まで來て寄らないのは、氣に掛る、しかし急ぐから、老主婦にお蕎麥でも、で、若干かお鹿に渡して、大門へ引返した次第だつたが……

「まあ、お亡くなりなすつた遊女の。」

今のを聞くと、お鹿が柳吉の顏を珍らしさうに、

「然う〳〵然う、菊川さん、と言つたんですとね。優しい、おとなしい方で、先生に押惚れたちけ。」と言ふ事に氣が入る、と訛が出る。

「難有い。」と坐り直して、一禮して、

「知つてるかい。」

「えゝ〳〵、老主婦が何時も噂をして。」

「難有い。」と又一禮する。

「おいらんの思つたのも先生一人だけれど、先生の思はれたのも、おいらん一人だつて……」

「難有い。」と言つたが、しばらくして、……今度は妙な顏をして、而して再拜に及ぶ。

「呼んで來ませう、名だけも可懷しいツて道理だよ、……其筈だあ。」と膝を揉合はせて、力んで言つた。が、其のまゝ氣輕に立つのを、あのお尻で、トそんな氣で、ひよいと見ると、蠶豆の露と云ふ目頭に涙を溜めて居たので、ヒシリと胸へ來た處、お鹿が直ぐに下駄に脛を掛ける處を、

蘆簀越に、透る聲で、

「お鹿や！」

「……」

「一寸、お待ち。」

三十二

「待ちな。」

と最う一度聲を掛けながら、年紀を老つた身體の、弱目に、其の藍微塵の半纏をば、浴衣の片袖に搔込みながら、それでも胡麻髮を判然と、蘆簀を開けて出て來る鶴兼。

「入らつしやい。」と、長火鉢の前面へ坐る、と、ふと心着いたらしく、膝に絡はる半纏を、片隅へひらりと投つて、

「御挨拶は後でいたしますが、先生。」と、長煙管の先とともに、聲を沈めて、些と……俯向き加減に、

「今のお話はお止しなすつた方が可うございませう。」と痩せた頰に薄く微笑を見せながら、額で凝默と顏を見た。

以前、時々出向いた時分、柳吉の同伴の觀察する所に因ると、雨降りを尻端折で音信れても、客の懷中に勘定の確な時は、其長火鉢に猫を撫でて控へた老主婦が、細い目で仰向いて「入らつしやい。」と言ふ。處で、借りる氣の錢なしが、晴天を幌俥で乘着ける、得て故とソレ擬勢を示す——と、然うした時に限つて、「入らつしやい。」を、俯向いて凝然と額で視て言ふ。米の生る樹は知らないやうでも、商賣の目は鋭い、と恐怖をなした。が、柳吉も經驗なきにしもあらずで、俯向いて凝然との味を、こゝで久しぶりで味つて、唇を苦くしたが、

「何故だ。」と、不服な色を示せたは、同じ苦さでも、勘定は心得て居たらしい。

「不可ません。」

と輕く頭を掉つて、其處へ如才なく、ちよろ〳〵と來て膝の上へ乘つた、小猫の耳を壓へながら、

「お爲になりません。」

「だつて、老主婦。」と、ぐつと寄つて胡坐に成るのが、翼も鰭も利くのでない。右の（おぼこ。）だから、惡く油をつけない、もしや〳〵の頭髪も、黑く成つた一群の雜魚に似る。

「呼んだつて何うしようと云ふ譯でも何でもない。また何うにも成るまいがね、彼處に居たつて酌をするんだもの、同じ樣でも餘り道端だし、多勢入込だし、眞ものか贋ものかは知らないが、

髮を長くした、怪しい仕事着のなんかも見えるやうだから、實は氣がさしてね。ぢやあ止せば其までだけれども、あの、暖簾の名も名だし、何故だか一度見た結綿の人柄も可懷いから、二階を借りて、一杯飲まうと思ふだけだが、不可いか知ら。」

「內は此樣でも、茶屋へお呼びなさるんぢやあ、あの娘たちには旦那だからねえ、そりや喜んで來ませうよ。隨分、一品料理とやら、蕎麥屋などへもお供をするのがあるんだと言ひますから、そんな事は構ひませんが、菊川……」

と言ひかけて、潮風に誘はれたやうに肩を緊ると、老の目を瞬いて、

「まつたく可愛い、可憐らしい、若い佳い遊女だつたねえ。もとの任俠のなごりの年增が、幅を利かした中に、住替知らずの新妓さん。それは全然處女だつけ。それでも、鼈甲の突通し、金子を掛けたものだつた。……指環なんぞは持たないでも、櫛笄はね、伊達の本玳瑁。」と、トンと疊に片手を支くと、煙管を翳して胸を反らすと、斑を透かして見るやうに恍惚と瞳を寄せた。電燈も曇るまで、笄の艶が颯と照る。

「長さツたら、突通しの、嘘のやう、（と煙管の吸口を一寸劃つて、）まともにや座敷へ出入りが出來やしない、障子を細目にした處を、肩のこなしで、故とらしくなく、品を持つて、恁う少し斜かひに、なよ〳〵と島田を見せて、すらりと入つて、（柳さん。）と美しいのが莞爾。……先生が、

然うさ、二十か二十一……お鹿、お前なんぞに見せたかつたよ。」
「澤山だ、澤山だ。」と胸倉取つて、搖ぶられたかと敗北して、胸を掉つて背けた目に、お鹿が上端の我が背後に、鳶足で團扇で煽いで居るのを見着けて、も一つ敗北して、
「澤山だよ、串戲ぢやない。」
「へい。」と唇を撫でた手で、お鹿は淡紅色を膝へ揉込んで、乘つて出る。

三十三

「おひけの調度が積重なつて高いから、跨いで、緋縮緬ぢや嬌態が崩れる。……枕頭の碁盤に、ふうわり腰を支いて、部屋着の裾をすらりと捌くと、雲に浮くやうに、すつと横に成る、てツた寸法。……然うさねえ、最う、あの遊女あたりが、其を知つたお終ひだらう。怜悧で、深切で、情があつて、義理も首尾も分つて居て、仇氣ないツたら小兒のやうで、あの襟脚の好いのと、髪の濃いのと、紫や、淺葱の絞の切に鼈甲の照りの配合つた事。海や、池を前にして、すつきりと、黑地の裲襠で、露の垂りさうな姿と言つちや、」
と爽かに言つても年寄の、呼吸の沈むのが犇々と身に沁みて、柳吉は拔掛けた羽織の紐を結び直す、とお鹿は、目を桂馬飛びに將棋盤を向う覗き。此は何うやら掃除の砌は、一寸腰を掛けた

さうな顏である。
「おまけにさ、お前、先生より、おいらん、年紀が上なんだ、……思ひ遣られるだらう。」
「いや、全く澤山だ。」と柳吉は打背いた。
「あ、煽がずと可いとさ、お鹿や、お氣まゝにさせ申しな。貴方には其の方が可いんだ。アレサ、そしてお茶を上げないかよ。」と言ふのが、待遇とよりは清涼劑の飲ませさうな、此の場の樣子。
「私は猫をいぢつた手だから。」と言ふ時、早い奴が、一匹、背後から帶にじやれる。
「先生、もし、お嫌ひの、内の古猫さ、あれの斃ちたのが春の彼岸で、遊女の亡くなつたのは同じ一昨年の秋でござんしたよ。お可哀相に、おいらんも、何や彼や、無理が祟つて、不運續きで、——あんな病氣が出るくらゐだから——それこそ夢を見たやうなものかも知れません。變な男に引掛つて、大門の内外で散々苦勞して、久しく煩つて居た揚句、氣が狂ふと戸外へ駈け出すやうになりましてね、ふら〳〵と私の許へ來ちやあ、(お上さん、根岸の先生に逢はして下さい、後生だわ。)ッて、手を合はすかと思ふと、いきなり褄を取つて、威勢よく、すつくり立つて、(上野の展覽會へ行きませう。柳さんの繪が出て、新聞で、評判ださうですから。)ッて、言ふかと思へば、ほつれ髪を搔上げながら挿櫛を視て泣き出しますね……取留めの無い中にも、私が承知しないでは、氣まゝに逢へないものだと、能く覺悟をして居ましたつけ。可憐らしい、不斷引被つて居る

ものを、お前さんに逢はせろ、連れて行け、と言つて、駄々を捏ねに來る時は、屹とだよ、窶れた顏にも薄化粧で、今時餘り見掛けません、口紅をつけて居たのが、私あね、先生、悲しくつて成りません。……此の春の末でしたつけか、夜遲くお同伴樣たちとおいでなすつた時、餘りお珍らしいから、年寄が久しぶりで、本店へお連れ申してさ、(御新姐樣は。)とお尋ね申すと、(去年亡く成つた。)とおつしやつて、大層醉つてお苦しさうなが、お交際は辛からう、此も御愁傷ゆゑの無理酒だと思ひながら、後では心ない事だつた、と後悔をしましたけれど、近頃ぢや何時また、こんな場所でお目に掛れるやら覺束なうござんしたから、私が言はないぢやあ、何處から聞いてお知んなさらう。……それだつて、御新姐樣が在らつしやれば、怪我にもお話をする事ぢやあありませんがね、おいとしい、が、最う佛樣だからと然う思つて、おいらんも、あんなに思つて居たものを、亡く成つたくらゐはお知らせ申して、あゝ、死んだか、然うか、とだけも、お前さんが心に思つておくんなさりや、おいらんが嘸ぞ本望だらうと、場所柄とは氣が着いたけれど、藝者衆の三味線の下を潛つて、おいらんの身の果を、一寸、お耳に入れましたつけ。……俯向いて頷いちやあおいでなさいましたが、あの醉拂ひ方ぢやあ。」

で、くな〳〵と肩を搖つて、型をして、寂しく莞爾とするのを視て、時々、すゝり上げて聞いて居たお鹿が、あはゝ、と不意に笑ひ出すのを、遣場の無い目で、ト睨みながら、柳吉は思はず

額に手を加へた。

三十四

老主婦の今の態度は、亡き人に代つた述懷に、渠自身の諷刺が交つて、際立つばかり娑婆氣なものだつた。が、煙管を杖に肩を落す、と猫も潛まる總の身に濕潤を帶びつつ、

「それでも、まあねえ、お優しく、こんな惡所の無常事を、何處に風が吹いた、とお思ひもなさらないで、名が可懷しいばつかりに、菊川と言ふのを、まあ！其こそどんなに、おいらんが草葉の蔭で喜ぶかも知れません、私もね、お志は眞個嬉しいんでございますよ。」

と一寸俯向いて禮をした、胡麻髮の地赤の透くのが、無常の風で、氣が違つた遊女で、草葉の蔭の折からゆゑ、柳吉の目には、蒼く燃ゆるが如く冷く光つて、ヒヤリと胸を射られたのである。

老主婦さんに言はれて見ると、過ぎし事はさて措いても、今宵此處へ來て、自分が爲た事、饒舌つた事、お鹿の肩に抱着いたり、涎で辷ると云つて見たり、遠くから頤を掬つたり、薄ッぺらな何の醜態だ。洒落らしく、氣輕らしく、思へば氣障さが堪らなかつた。生れて何の果報あつて、正直、眞當な者を愚弄する。不斷菊川の身の上に就いては、ものの哀を老主婦から聞かされて居るのであらう。其の菊川の名を言ふと、はや目のうちに涙を含んだ志、聞かせる人の心につけ、

聞く者の情につけ、餘所事ではない、婦ゆゑなら半は我が身に掛るものを、人情を知つたなら、いや、人情などは口幅つたい、寒暖の挨拶だけも、禮儀の一端を心得たら、膝から緋襌が溢れて居ようが、圓髷が大きからうが、唯其の一粒の玉の如き涙に對して、我は正に兩手を支いて謝すべきならずや。何ぞや、其を――身輕に使ひに行かうとするのに、尻の重量を思ふなんぞは、其の了簡の薄つぺらさ、掃溜を飛ぶ犬の毛だ。沙汰過ぎにも、儚き人の面影を（可懷しい。）と言ふ柄ではない。

「菊川の名が可懷しさ。」と我が口で繰返すと、グワンと横面を撲られた如く、思はず自分で赤く成つた。が醒際で、顧みる胸の紙入入れた羽織の紐も、縞の羽織も、角帶も、第一此のわけ知りの老女に向つて、青蛙めが洒亞々々と肱を張つて、胡坐かいたのが我ながら淺間しく成つて、悚然としたやうに、膝を正して俯向いた。

「先生。」と老主婦は更めて、

「お前さん、菊川の、あのお幾坊を御存じらしいが、全體、身の上を知つて居なさるのかい。」

「知つてるつて、」と今は目の瞼が白く成つて、

「身の上つて、何かね、飛だ莫連ものでもあるのかい。」

「そんなんなら、些とも心配はありません、ぢやあ何にも御存じないのだね。こゝで、少しでも

心安くお成んなさると面倒が起りますから、それだから、私がお留め申しますのはね、第一、あの娘が、おツそろしく、不斷から先生に逢ひたがつて居るんだよ。」

「何處の先生さ。」と此は全く分らなかつた。

「あれさ。お前さんにだあね。」

「老主婦、僕は（と最う、だらしなく、若く成つて、）恐れ入つて居る處なんだよ、……串戲ばかり。」

「何も恐れ入んなさる事なんぞある譯はありませんがね、ぢやあ全く御存じないのだ。……お幾坊はね、先生、ありや菊川おいらんの娘なんだよ。」

「え、あの、別嬪が、」と言つて、此の際の、輕薄らしさに言直して、

「何、あの娘がかい、老主婦。」

「先おでん屋の店を出して、近頃は鮨屋かねえ、屋號も其からぢやありませんか。」と、猫を壓へて、靜に羅宇を膝に取る。

三十五

雙膝正しく坐つて聞く、……柳吉の硬く成つた胸に、水晶か、石か、ドキ〳〵玉に成つて躍る

まで、由縁の色の響くのを、窪んだ目に確と認て、鶴兼老主婦。
「先生、あの娘がおいらんの娘だとお聞きなすつちや、尤も養女ぢやありますがね、眞個串戲でなくお逢ひなさりたいのは分つて居ますが、」……皆まで聞かず、
「謝罪る！」柳吉は肩を聳やかすと、拳を眞四角に膝頭に握つて、腰を擡立てるばかりに、辭儀をして、
「老主婦の口から、死んだ人の事を聞くにつけて、自分の碌でなしが今分つた。否、廣い世界だ、棚の隅には煤ぐらるな取柄があるかは知らないが、少くとも東京の片端を碁盤の目に埋立てた、洲崎の門を潛つては、僕ほどの碌でなしは他に有るまい。先刻からの話につけても、冷汗を搔くんだが、實は、菊川の娘を此の茶屋へ呼ばうとしたのは、洒落半分の吝な榮耀で、晩飯過ぎの（おやつ）强請と言ふ間違つた了簡だつた。が最う、恁う成つては眞劍だ——洒落や串戲では實際ない。……死んだ人の樣子も聞きたし、昔話もして見たし、どんなに可懷しい、……（と聲が掠れて、）可懷しいか知れやしない。老主婦が不可いと言ふ處を、恁う言つては逆らふやうだが、然うでない、眞劍に逢つて見たいのだ、が何うだらう、呼んで貰ふ次第には行くまいか。」と見つともの無いほど眞顏である。
「何でござんすかい。いづれ一度幾世さんの顏を見なすつたからの思ひつきで有らつしやらうが、

お逢ひなすつた時、あの娘が、何か、離れがたない、お慕ひ申すやうな素振でもあつて、それで、そんな氣にお成んなすつたんだらうかね。」
「馬鹿な事を、何度逢つたつて、婦が離れがたなかつたり、お慕ひ申されたりなんぞ、……自惚にも何にも唯の一度だつてありやしない。——お鹿も言つたけれども、些とでも其樣な樣子の有つたのは、生れて以來、死んだおいらん唯一人だ。」と吻と息。
（おつしやるよ。）とか何とか言つて、はぐらかしでもする事か。老主婦さんは、眞顏で頷いて、これには答へないでお鹿を見た。
「喃、一寸、本店へ行つて樣子を視て、晩だから何か食るだらうから。」
「あゝ、忙しいんだね。」
「何、お前さん、內は此の通り——一人ね、田舍の客が一昨日から流連して居るのがありますのでね、——見繕つてお置き。」
「御緩くり。」と、圓い膝。
「お鹿さん、今度賴むよ、一所にね、おいらんの墓參りに。」
「可厭ですよ、貴方と行くと、化けて出るから。」と洒落では無ささう、身震ひをして、とつかは出て行く。

「人の好いものだけれども、口が輕うござんすからね、先生。……お幾坊は、そんな素振はしますまい。感心なものだ、若いのに。」

と又頷いて、

「私の言ふ事も、よく聞分けて、自分でも、よく承知をして居ます。其の癖、蔭では、お前さんの事を親身のやうに、思へば、慕へば、案じもして、唯お健かで、お仕事の評判を祈つて居ます。可憐しさつたらありませんけれどもね、……今あの娘にお逢はせ申すくらゐなら——肩につかまる、袖へ縋る、こんな懐中へ、(と俯向いて、)柔かな顔を入れて熱い涙を流してまで、甘えたり、拗ねたりして。」——唯、見ると、小猫が同じ處で潜つて居て、淺葱鹿の子の首玉で、ひよいと白く向いて、青い目で熟と視たので、柳吉はハッと思つた。早や新内のながしが通る。

「ねえ、おいらんが頼むのを振切りはしませんのさ。其のおいらんから据置で、……あの娘に今も附いて居る、居まはりの人間を、もし……どんな奴等だとお思ひなさるえ。」

兩國橋

三十六

「一々尤もだ。」

柳吉は——さて夜鷹の姉様を、途中で工面したらしい新聞包で抱込んで、ふら〳〵、兩國橋を本所の方から渡り掛つた。又あの上に醉つて居る。夜鷹を買つたからと云ふのでもあるまいけれども、見當は蕎麥屋らしい。

成程聞いて見れば、棚のものを取るやうに、伸せば手が屆く、容易いのではなかつた。——可厭な奴で、菊川の女房が亡く成つてからは、專ら兄さん、親方などと幾世に呼ばせて居るさうだが、養父の虻の群八は、もと吉原の妓夫上り。で、洲崎では何某樓で一時書記をして居た。丁ど其の頃、菊川は同じ樓で、新造ともつかず、二階に手傳つて居たのが出來合つたのだ、と云ふ。……一寸々々鶴兼へ遊びに來て菊川の話では、道樂の仕過しで、女郎屋の書記なんぞはして居るが、群はんは矢張り美術家だと云ふ。……言ふの聞いて言ふだけで言ふ意味は菊川には能く分るまいが、美術家で、畫工ださうで、夥間とまでも無いけれども、根岸の先生の事は知つて居る。——連中は皆酒を飲んで、壯に遊ぶ、美術家と言ふものは、皆酒を飲んで、壯に遊ぶもので、群はんは些と度が過ぎたのだと言つた。……

「悚然とする。」柳吉は老主婦の話を思ひつつ、兩國橋を渡りつつ、肩を拂つたのである。

しかし今の曇が雨に成つて、カラリと晴れて御覽じろ、洲崎の空から上野の森へ、虹に成つて

燦然と顯れずには置くものか。で、書記をして居るのは、仇を打つものの、本望を遂ぐる爲に、身を窶して居ると同じらしい。但し燗鍋の蔓一筋、笹の葉一枚、むだ描きにも描いた驗が無いので、何うした譯かと思ふと、生命掛けの尊い仕事は、苟くも女郎屋の棟の下で濫りに一枝を染めるのさへ汚れるからだと言ふ見識。「見上げましたわ。」と菊川が話したさうで。眞個志の淺からぬ證據は、畫工と言ふが賴もしさに、內證で大事な三浦さんに描いて貰つた挿櫛の彩色を見せた事がある。と群はんは坐り直つて、一寸頂いて見たつけが、豪い！と言ふと、忽ち顏色を變へて、殘念だと拳を握つて、私も同じ美術家だ、先生と言ふのは口惜しい！……が、なか〳〵以て今の腕では此の人に及ぶのでないから、兄貴と言はう、兄貴偉い！と言つて、又頂いたのが嬉しくツて〳〵、他人のやうには思はれない、と菊川の老主婦に話したのなぞ緣と成り、人の案じるうちに、群はんと二人で、其の樓を出て、汐見橋邊の裏屋へ所帶を持つた。

柳吉は思はず川風に身震して、「可哀相に——おいらん。」唯、偶と其袖擦れに行く欄干の暗い處に仄白い顏がある。水色の地に蔦の葉の浴衣が、嫋々と橋に搦んで、大川を背に、恁う悄乎と凭懸るやうに立つて、細い手先を黑繻子の帶に挾んで、片手を二の腕あたりまで雪のやうに露呈に見せて、明石か珊瑚か、ぽツつり紅い銀脚の簪の拔かゝりさうなので、銀杏返の前髮のぱらりとあるのを、堪げに搔く。……ト搔く手を留めて、思ひ出したやうに又簪の脚を挿して居るの

が、あれ、其處に、と思ふと、鬢を上げて凝と見る、黑目勝なのに、はら〳〵と涙を流すと、其の涙が颯と流れて、漫々たる隅田川が兩岸へ波を打つて渺々と大きく展けた。

「あゝ、丁ど此處で別れたなあ。」

あはれ、水に映る岸の燈は、其の波を、其の流れを照さないで、行く人の浮世の影を映すらしい。橋は長ければ長いほど、映畫の狀も、尙長く、尙深く、尙濃いのであらう。

柳吉は、まざ〳〵と、可懷しい、其の幻影を見たのである。……

三十七

見た！……其の瞬間、橋も以前の木造りのに變つて、婦の浴衣も、大川の水も、おなじ夏の黃昏の色に成る。と、模樣の蔦の葉が、吹く風に、ちら〳〵と搖れて、おくれ毛と褄と颯と靡く。……と思ふと、欄干の木の朽目も蟲が這ふ形には見えず、散りつつ縋る柳の葉。搦まれ、縋らるるやうな思ひで、動く波に送られつつ、——あの時——振切つて別れたが——

「目に見える。」

涙も見えれば、笑顏も見える……別れるまでには、何處か今は忘れたが、回向院前あたりの鮨屋の二階の小座敷で、お衣（菊川の本名。）の好きな五目鮨を取つて、二人で飲んだ、一壜のビイル

が半分。……其處では添はうの添へないのと言つて泣きながら、歸るのを見送らう。と、橋へ懸ければ、

「長い〳〵兩國橋長い。
お駕籠で遣ろか、
お馬で遣ろか。
お駕籠も可厭だ、
お馬も可厭だ。
十六七に手を曳いかれ、
手を曳いかれ。」

とお衣が低聲で唄つて、(嬉しからう。)と笑つたつけ。廓を出たてで、駒下駄が輕くて撥んで危い、とふら〳〵して、衣服の裾を蹈んで躓きさうにしては、(曳いかれ。)だか、(曳いた。)のだか、橋の中央へ縺れて來た、ハテナ二人ばかりの世だつたらうか、此の兩國の橋の上に——

「いや、舞臺が勝過ぎた。此の橋は、引上げの義士でないと、世の中が承知しないんだよ。おいらん。」

と思はず苦笑して四邊を視ると、忽ち現下の、蜘蛛の巣のやうな鐵橋と成つて、流も黑く、そ

ろそろと間も措かぬ往來の人。

薄り影のやうに成つてフツと消えた。

消えたは、可哀に可懷しい幻影である。其の幻影を現世に留めて、瞳を浮出させ、鼻筋をすつと透らせ、唇を微笑ませ、玉を暖かに、血を通はせ、ふつくりと柔かな胸を膨らませて、手に抱き、頰に取るべきは、新道の鮨屋の幾世である。と今更思ひ募つて、亡きお衣の血を分けた一體分身の美女である如く、胸をそゝらるゝにつけても、思ふに任せず、逢はれぬ羽目に成つたのである。——

——お衣は苦界の可厭しさに、當時、無理をして廓を拔けた。が、其のまゝ、五目鮨でビイル四半分の働きものの若い男と、添はれよう次第はない。着いて廻る借金のために、一度靜岡へ行つて、二長町で藝妓で稼いだ。深川そだちで聞覺えにも絲道は明いて居たのである。其の時、近在の中農ぐらゐな檀那が出來て、自前の簞笥に稍重味のついた頃、五歲になる、いたいけな兒を、土地で、親知らずで貰つたのが幾世であつた。

仔細あつて、其の檀那と一所に古巢へ歸つて、一時、洲崎の引手茶屋の居拔へ入つて、お衣が客の送迎ひをして居た事あり。柳吉が同伴と鶴兼から女中に送られて、何某樓へ入つた時、彼此出入りの綾の廊下で、思ひがけなく、何年ぶりかで、ハタと縞の衣類に繻子の帶、圓髷に結つた、

柳は綠の菊川に逢つた。

目で知らせ合つて、座敷を外して、鶴兼の二階で逢曳したのを、一度だけは默つて見免したが、日も措かず、翌晩すぐに出直した時、老主婦が「入らつしやい。」で、例の俯向いて、(額で凝乎。)を啖はせた。

二階へ上げて、膝詰で、「おいらんは亭主持、姦通の宿はお斷り申します。」——「柳はんは?……」と階下へ來た、……媚めかしい聲を聞いて、唇を嚙んだのが最後であつたが。

其の群八のものたるや——

菊川の引手茶屋は、世の不景氣と貸倒れで、沒落して、靜岡の亭主は行方知らず、が、手を切つたのではない。所在知れずの幽な仕送りに、暮しかねて、新造の手助けに住込んだ樓で、書記で、世を忍ぶ美術家に、兄哥、と思ふ、偉い!……と櫛を押頂かれて、秋草の露よりもろく、菊川はホロリと落ちた。

幾世は其の頃、菊川の實の父、紺屋の職人の、よぼ〳〵なお爺さんの内に、預けられて居たと言ふ。

二人で所帶を持つて、幾世も其家で一所に成つたが、爺さんは、よぼ〳〵と紺屋の手傳。肝心の群八は、何しろ世を忍ぶ美術家だから何もしない。お衣が持殘した髮飾衣類など、一枚一具賣代で繋いでも、時が經てば饂飩でさへブツ〳〵切れる。はじめは、爺さんの仕事の緣で、染物や、湯のしの註文取り。幾世が器用で覺えた引解きものやら、易い賃仕事でも苦勞が追着かなく成つて、情なや傾城の身の果が、母娘で廓へおでんの屋臺。其の頃群八は、新演劇とやら、舞臺何とやら、煙草を飲ませない、椅子で見せる芝居の俳優に成つて、菊川羊君、——「羊羹ではないのですよ。」と、老主婦が註入りで——とか名のつて、べた〳〵白粉を塗つて居たつけ。帝劇へも一度、有樂座へも何度とか、何、其は自分で言ふので、いづれ場末の寄席小屋で、何とか踊の茶番だらう、が、其の一座さへ不都合があつて構はれる、と今度は俺が座長に成つて改良劇を組立てるんだ、と言ふうちに、然うでもない、大道店のおでん屋へも、ふと鱸が泳いで出て、女房を乘せて天上しまいものでもない、懸念から、母娘で店を出して居る、片蔭の柳を小楯に、棍棒を懷中に抱いて頰被りで見張をはじめた。妓夫が、書記の、美術家で、新劇團の屠犬兒。

近頃は鮨屋の兄さんで、小賭博をうつて無職渡世で納まつて居る、と言ふものは、妙齡の幾世の容姿を的に金主が着いた。尤もおいらんの氣が狂つて亡く成つた後で、——いや其の間の幾世の艱難、おいらんに盡した、孝行、深切、口にも言にも盡されぬ。が、其は措いて、……但其の

志に感じて出來た情を知つた金主なら、一先づ市は榮えるのであるが、なか〳〵以て然うではない。

彼處の地主、家作もち、で、根越萬兵衞、御存じのネコ萬は、貪亂、强慾、就中好色無敵の老父。女房子は別に本宅に差置いて、自分一人は出張して居て、兩側の女どもを片端から取替へ引替へ、晝づとめ、夜の伽、朝の枕、と稱へるばかり、甚だしいのは一晝夜に三人を入替はらせて、白だ、紅だ、肥えたわ、痩せたわ、肥つたわ、と皆試める。娘、雇女、下女、後家、女房の差別容赦はない。無論、無錢で。其のかはり、家はもとより、酒肴の仕込みから、玉出し、玉おきの資本を高利で下ろして、滯り勝な處から順繰りに、食指を鎌首にして動かす上に、潛り辯護、三百代言と云ふのが、髯を捻り、鼻を穿つて、控へて居るから、店子に口は開かせぬ。

幾世の金主は此である。

が、不思議と未だ其の牙に掛らないのは、見免がして居る次第ではない。饅頭の皮を食つて、殿々に餡に及び、腹脂をせゝつて後に鯛の目肉に至るの類。五箇山の見鹽のやうに、老漢めが、大事にして藏つて置く。いざと言ふ時、一口食つたら、三千年は生きのびる仙家祕藥の桃である。かはりには、其思ひで一口に食はれる時は、一度で生命が消えるであらう。「痘疽や、癩疹の流行ります時、町内で一番後のが一番重いて言つたものでございます。」と苦笑して、先刻、老主婦が話

した。——のみならず、然ばかりの群八が、寢起を一つ家の、あれだけの美女を、餘つて見て居る道理がない。間がな隙がな、袖褄を引くのであるが、其處は猫萬の目金が光つて、睨め競の持合ひ、ホンのかね合ひと云ふ危い絲に引掛つて、幾世は落ちずに今日を過ごす、と言ふだけで、泥も油も一所に湧いたら、忽ち血の池、焦熱地獄。「唯聽いてさへ可哀なものを、親身のやうに貴方を慕ふ、おいらんの娘と知つて、其の火水の中へ飛込めますか。飛沫は瞬く間に、貴方を傷け、貴方を爛らす。それを知つて、賢い娘が、逢ひたいのを死身で堪へ、見ても知らぬ振をして居ます、——お分りになりましたか。大切な、先生、貴方のお身體。」と老主婦が沁々言つた。

「大事なお身體が、天麩羅拔で、五合呷つて、夜鷹を抱いて歸るんだ。」

と新聞包を搖直して、柳吉は、ふら〳〵と橋の上を二足三足。後髮を引かれたやうに衝と戻ると、欄干にほんのりと、蔦の葉薄き婦の面影。

「お前には別れる。女房には死なれる。仕事は苦しい。……おいらん、僕も辛いんだよ。」とヂッと視る。

とパッチリ睜く瞳の露が、ほろ〳〵と雫になつて、星ながら、隅田に颯と小雨の音。

番附と茄子

三十九

濱町矢の倉の越前樓と云ふのに、書畫骨董商、兼、丹青倶樂部委員、小宇田何某の業務創立十五周年の記念の祝宴があつて、三浦柳吉が招待されたのは、少し日が經つてからの事である。二三の友達からも誘はれたし、柳吉は、あの邊に、尙其の上に丁ど便宜の用事があつた、とだけで、些と立入つた事だけれども、讀まるゝ方は略想像をされよう、と勝手ながら心得る。

柳吉の人形にも、峰のと同じ翡翠が一顆、肌に含ませつつあつたのである。

時間は午後六時の通知、惡く濕潤とした日で、雨具を持たうか持つまいか、と思ふうち、出掛けに、ざつと一降り來たので、蛇目傘で、足駄の支度。紋着に羽織袴だから、俥を奮發して、兩國まで乘着けた。……時分に雨は霽つたが、空模樣で雲が暗いから、もう、ちら〳〵點燈が早い。夜商人の店も早出の樣子に、はじめは宴會が果てから回向院先方の辻の、觀星堂如海道人許音信れて、亥の上刻十時の金十錢也、テペンカケタカ時鳥と蝙蝠で、殆ど均衡の取れない翡翠を返さう心構へが此人のは、峰の如く心腔豁然として風清く月明かなるものではなく、星に託せ篁竹に

問うても、仔細ありげな夜鷹の出處來歷を訊いて見たい好奇も、半ば下心にあつたのが。……

平時より暮早き四邊の光景に、爰で偶と氣が變つた。……言はば價貴き玉の預りものをして居るのである。醉つた怪我で、また醉ふと、得て事を仕出來すのであるから、萬一遺失でもしたとすると、辻占か、謎々か、試みの果物か知らず、其切り返さないでは腹を見らるゝやうで潔よくない。第一、時間も遲れよう。で、橋の袂で、俥を乘棄てて、爪皮を新しく下立つた。

渡つて、中央へ掛ると、世は須臾の間に恁うまで替るものかと思ふ、嚴しき鐵の欄干は、船を縫ひ、帆を、帆柱を編み、煙を揚げ、川蒸汽の音が響いて、先の夜の、蔦に柳の面影は、胡蝶ばかりの餘波もない、と思はず立留まりかける横顏へ浴びせて、雲を破つた西日が射すと、川波の一幅が炎のやうに赫と染まる、ト行過ぎる電車の屋根も鐵の壁を燒いて、行く人の足を焙るやうな、が、其の中にも、射る陽が何處ともなく柳の影を誘つて、燕がひら〳〵と往還りさうな氣勢は、戀を知り、情を忘れぬ、さすが名所の長橋である。

柳吉は眩さに、半ば横に蛇目傘を翳した。

「お衣さん。」

袴の紐に俯向いて、

「見ておくれ、太夫身支度さ。……まるで兩國橋を綱渡りのやうだらう。」

心覺えの、辻の藏の前へ行つて見ると、何も居ない。夕暮の人混雜に、此の又居ない事は、橋の欄干の面影が消えたやうに、心の底、流れの奥に幽にも幻影の有つて殘るやうなものでは無い。溝を洗ひ、溝石を拭つたやうに、觀星堂の看板は、土藏の壁に樂書も無いのであつた。

「狸かい、あの道人。」

つい逸んで出た獨言で、翡翠は、何、確に帶に。

「何の上刻だらう。」と柳吉は空を視て微笑んだ、が、午だか、巳だか、少しも解らぬ。とに角時間が早くて、まだ店を出さないのであらうと思つて、傘の、傘の柄を持替へたり、蜻蛉を握つたり、羽織袴で、其の邊をぶらついて待つのは、我ながら、狐の嫁入りにとつぱぐれた先供と云ふ形に見える、……は可いとして、さつと又雨に成つて、足袋屋の軒下で暮模樣を見て居ても、今度は脚が着いて急に降歇みさうにも無いから、雨ばかり、其の樂書もない藏の壁の暗く成つたのを見ながら、四角で辻俥を雇つて、兩國橋を母衣の中。

渡ると直に、左へ取つて越前樓。

「入らつしやい。」……

宴席は最う上座から亂れ掛けた時分と思ふ、一時間餘り到着が遲れたので、何より遲刻の詫を、と言ふつもりだつた處、人數は集つたが、第一まだ席さへも定まらないで、一同が控室に各自和洋の禮服で、夕河岸の着いた形。尤も暑さの砌とて、早や露店並に蠅が寄りさうに頽然と成つたのも少くない。ト此の場面は大抵想像で分る。髭を捻るもの、扇子を使ふもの、半開きにして、ぱち〳〵と鳴すもの、呟くもの、饒舌るもの、時々忘れたやうに、川風が颯と通すと、爾時ばかり笑聲が聞えて、あとは喘ぐほど蒸暑い。蒼蠅が二ツばかりブン〳〵と飛んで、まだ御馳走にありつかぬ、腹の空いた人間の初物を舐める時、座に散つたものは茶碗と干菓子で、塊つたものは、二三ヶ處、碁盤と將棋盤。

やがて八時半。——定刻を過ぐる事約三時である。恁うまで後れては、初日半値段の芝居でも、見物は納まらない、將棋の駒で盤の横面を敲く音と、ザクと摑む碁笥の石の音に殺氣が籠ると、最早や其の盤の上へ突立つて、燒討の大道演說がはじまりさうな處へ、パタ〳〵の白足袋、袴の裾を蹴開いて、階子段から駈込んだ、額の四角な、金壺眼で、横肥りの小男は、當夜の主人、小宇田骨董。

「御光來に成りました、御光來に成りました、御光來に成りました。」

と四角な額の點滴る汗を、ぐる〳〵手巾で撫廻して觸込んだ。——一體、小宇田は先刻から此

座に居ないで行方を晦ましたとは言へ、柳吉は入りがけに式臺で逢つた、其切姿を見せないのであつたから、今までも其の式臺で、這個上客の御光來を待構へて居たのであらう。

氣立たましい先觸に一足おくれて、女中が二人まで後について、若づくりだが四十餘、肩幅の廣い、頰の肥滿した、唇の薄い、色あだ白く、鼻は隆いが眦の下つたのに、鼻目金を仰向けに掛けて、眉の有るか無しかに薄い、紗の五ツ紋、白襟の、其が卽ち、(御光來。)なのである。

控の一座が、觸込みと、容體に、ぱつと總立に成つたのを、金壺眼で、小宇田が雙方に釣合を取つて、

「はッ、御前いづれも前刻からお待兼ねでございまして。」

「や、强う晩う成りました。出掛けに些とな、公用で……」と頤で言ふのは横柄だが、女のやうな聲である。

さもしい事には、此が來て、最う宴を開くのだらう。煽つて歸れ、と急心で、柳吉が、齊しく衝と座を立つたのが、幸か不幸か、不幸な事は決してない、思ひ掛けなく、紹介されて、拜謁を得たのだけれども……丁ど入口だつたので、ト顏を突合せる、中へ小宇田が又一拜を恭しくして、

「大間男爵で在らつしやいまする。御前、……えゝ、此は三浦柳吉さんで。」

「はい。」

「初めまして。」

「はアい。」と鼻目金を一寸搖つて、肩で風を切つて一先づ控室の眞中へ通るのを、「彼だ。……大間、名を久一と言ふ、某展覽會審査員の一員で、死んだ女房を口說いた奴だ。」と見たばかりで、柳吉はツイと廊下へ出て風を入れたが。

やがて、室內がザワついて、間もなく又大間男爵を眞前に、三十人ばかり、ぞろ〳〵と、黑白碁石を入まぜる、飛車、角、香車の勢で、宴席へ衝いて出た時である。——

四十一

某地出身の多額納稅者、某私設展覽會の名譽審査員、其の大間男爵に、雁々棹に成れ、と引添ふ一人、異裝にして、鼻下の髭の赤く反つた、頤骨恰も山椒魚の如く隆く、唇のどろりと厚く重い、眼窪んで狡しげに底光る、人相の野卑なるに似ず、怪しき烏帽子を頂き、萌葱生絹の狩衣めくのに、鈍色なせる指貫を着けた、と視ると神官、沐猴にして冠したのは、所謂何とか故實の裝束(註、此を地下讀に裝束と言つては不可い、さうぞきださうである。)但其の胡坐搔いた鼻の兩穴の、毛蟲を埋めて嘘をしたやうな鼻毛が、如何にも、のんびりとして、——今日も暮しつ——の趣がある。此なむ、靑野と言ふ、天下に眞の大畫伯、丹靑學校の敎授で、勿論の事、審査員。

大畫伯の裝束が此であるから、嘗て高臺の其邸に伺候した、世馴れぬ日本畫の學生が面喰つて、青野畫伯の小間使は皆緋の袴を穿いて居る、と言つて仰天した。嘘だ！慌てナサンナ。畫伯は大美術家である上に、大義人道を體して、豫て絶代の義士、浪花節の大石内藏に私淑して、天井樂書の風流、祇園にあやかる處から、小間使の腰から下は、一力を寫した赤前垂なるものである。

で、本名は別にあるが、通り名が（ナスマロ。）である。那須野あたり出身の譯ではない。眞僞のほどは定かならぬが、一時、某富豪の誂で、茄子を三個、尺五の絹に描いて六百圓、と自身の吹聽。世間俗物の言傳へは、一富士、二鷹、三茄子で、三個と云ふ數ではないから、又以て畫伯の見識惟ふべし。で、此の逸話から起つて茄子丸。常服なれば茄子六さ。

其の茄子丸が、いま大間男爵に引添うて先を切つて出て來たのが、廊下にイんだ柳吉と通りがかりに擦違ふと、

「閣下。」と、中啓らしい扇子を笏に取つて、

「此が三浦柳吉君でえす。」と皺嗄れ聲で訛つて言つた。

恁うして紹介をしても差支へは決してない。茄子丸は先輩で、男爵もろとも審査員で、柳吉の繪なんぞには、勝手に、白だの、紅だの、青だの、陽氣の佳い年の大掃除見るやうに、紙をベタベタと貼るのであるから。

「一寸逢うたね。」と男爵は片頬笑みして、鼻目金を指で壓へて、

「細君が亡うなつたさうで、お困りぢやろ。が、君、苦勞をさせたね。」

當の柳吉より、茄子丸の方が、恁る御懇の御意を忝さうに、ト肩で會釋しながら、

「何の病氣でえした。」

柳吉は眞直に立つた。

「營養不良です。」

唯、茄子丸の目が嶮しかつたに似ず、男爵は頤骨の上へ、目金を躍らせて笑うて、

「ふん、ふん、うふん、あの美人も私が方へ嫁とれば、同じ殺すにも干殺しにはせんであつた。」

大間男爵は、夫人に先立たるゝこと三人にして、四人目の候補者が、柳吉と競爭つた、……亡き其の細君で、男爵は現下獨身で居るのである。

「獨身もの同士大に飲まう。腹の滿くなるやうにな、ふん、ふん、うふん。」と紹袴の襞積を颯と捌いて、紺足袋を踏開いて、ツイと行く。其あとを、狩衣の裾、指貫で、ひら〳〵、ひよこ〳〵と追懸けながら、

「閣下、此度の御緣談は、閣下、づいと趣の變りました下町の美人ださうで。」

「ふん、ふん、うふん。」

「怪しかりません、若いのださうで、大に頂くでえすよ、閣下、此度の御緣談は？……」

四十二

「貴方……」

と柳吉を呼んで、中年增の婀娜なのが銚子を向けたので、膳に伏さつた盃を取ると、肩でスツと酌をしながら、巫山戲た婦で、小さな聲で、

「あの、坐り方は圓座と云ふのでせう。」

餘り唐突だつたので、柳吉は何とも其の意を得ないで、

「え。」と訊くと、

「いゝえ。」と掌を胸へ當てて、印を結ぶやうな形をして指しながら、

「ね、茄子さ。……圓座より藁苞が好いわね。」

唯其の指の先に當る大廣間の向う側、第一席に、茄子丸正面を切り、首を据ゑ、指貫の膝を左右に割り、白足袋の踵を合せた胡坐で、中啓を臍から頤へ取つて構へて居る。色の黑さよ、烏帽子の紐の濃い紫なのも、成程、尻に敷いたのが苞なら可かろ、と思はるゝ。

此の廣間五十疊にして、次の二十疊敷ばかりな、廊下の通口を劃つた二枚折の金屏風には、其

の畫伯の淋漓たる醇墨で、見事な腕前、松の老木に得意の茄子が描いてある。遠見で朧氣ながら、富士山も見えぬに、松の枝に留つた茄子は變だ。……待てよ、帶ではない、アリヤ嘴だ、鷺か、烏か、正體は、黑いから五位鷺だらう、と思ふのが立ててあるくらゐだから、婦人たちも、渾名を心得て居るのであらう。

が、無禮千萬、返答の限でない。柳吉が苦り切つて、唇を盃にあてて、未だ其の半分を傾けない內であつた。

此の人なども、兩側にづらりと隅田川並に居流れたる連中の、眞正面の床の間に、瀧と、山と、樹の茂りの三幅對、大花瓶に早唉の芙蓉を背にして、左右に二人の、――眞中に傲然として、藝妓と雛妓を五人侍らした大間男爵が、鼻目金を仰向けに晃々と光らせると、

「靑野さん。」と聲を掛けた。

掛けた、と思ふと、スウ、トン、ハツと早調子。……いや、此は茄子丸か、召に應じた足拍子で、卽ち、スウと膝を寄せると、眞直に立つと齊しく、トンで發奮んで、ハツと諸足で前の膳をポンと跳越えたので。……其のまゝ靑疊を辷り腰、摺足でツ、と出て、

「はツ、」と云つて、八尺退つて膝を支くのを、男爵が「近う。」と云ふ身で、袖を開いて、肩で抱込むやうな形をすると、烏帽子をぶる〳〵と振りながら、膝行つて、進んで「はツ。」と言ふ。

――爵位は貴いものである――

時に男爵が、低聲で三言ばかり御意あるを、烏帽子の頂邊で承はつた。が、又一拜を爲すとともにずつと退つて、それから狩衣の裾を搖らめかいて、悠然と次室まで出ると、其處に居合せた圓髷の女中を中啓で招く。と、來て、浮腰に膝を支くのに、立ちながら腰を屈めて、何か言ふ。

「は、」と合點んで頷く處へ、「な、」と被せて、中啓で、ポンと肩を敲けば「可厭ですよ。」と笑つて出て行く。……此を見て、茄子丸は狩衣の胸で反を打つて、「あはゝ」と笑つた、處などは、人を食つた、金を使つたもので。案ずるに、用を言ひつけた次手に、其の女中の岡惚か、落こち筋を素破抜いたものであらう。

忽ち、けろりと成る。居なりに、中啓を構へて圓座なしの、ちよこなんと胡坐の茄子丸。

いまの女中が、其の前へ緋の毛氈を擴げるのを、藝妓が一人手傳つて敷展べた。分つた、席畫がはじまるのだ、と思ふと……然うでない。……

四十三

雛妓が二人で、燭臺が二挺、毛氈の端へ點く。

爾時、茄子丸、狩衣の袖をシヤと右左に捌くと見れば、烏帽子を眞直に立直いて、

「えゝ、御一統に申します。唯今宴を開くに當りまじで、主人の挨拶、客側の應答も之あるべきですけれども、暑さの折から、其の儀は略を致じまじでがらに、(拍手)えゝ、主人が創業十五周年祝賀の擧を御贊同なされまじで、えゝ、大間男爵閣下に於いて、當夜の餘興を御寄附なされまずです。が、豫て新聞紙上に於ても、諸君が御承知の如くです、で、閣下御自身で其の、隱藝たる處の義太夫一段を其の、宴を開くに、宴を開くに(念入りに。)先立ぢまして、お聞がせ申されるのでありますからじて、少時、御傾聽あらむ事を希望しますです。」

禮儀と言ふものは……此に又拍手したものがある。否、もの處か、皆が爲た。羨むべきは世の所謂賤業婦で、却つて失禮に當るが故に渠等は一人として拍手したものがない。其のかはり、いづれもギヨツとした樣子である。

口上の果てるのを機掛に、末席から小宇田骨董が、ひよこ〳〵と出て平伏して、

「皆樣にかはりまして、厚く御禮を申上げます。」……だと、座客一同平伏したと同一に成る。

處へ、朱の總のだらりと下つた見臺が顯れた。土壇場だ。斷念だ。最早や覺悟をしたからには、最う何う成らうと、何が出ようと構はないが、太棹を提げて顯れたのは、釘貫の五ツ紋に、淺葱の帷子を着流しの、脊丈拔群、油染みた大坊主。可恐い汗かきらしい、毛氈に坐ると齊しく、毛だらけ酒燒した胸へ、薄汚れた手拭を突込んだ、腋の下の汗を拭いて、膝を溢まし、ヅンと構ゆ。

同じ紋ついたる紗お召の羽織をひらりと脱ぎ、上席から大間男爵、づいと膳を跨いで、眞中へ大幅をなして顯れて、

「御迷惑を掛けるかな。ふん、ふん、うふん。」と頤で左右を睜いて、笑ひのあとが咳一咳。

見臺へ推直つて、チンと逆上せた顏で鼻をかむ。

茄子丸は、眞俯向けに烏帽子を伏せ、

「えゝ、お語りに成りますのは、えゝ、假名手本忠臣藏四段目、判官切腹の段、東西です。えゝ、東西です。」と言ふより早く、聲前を切るのを憚つて、摺足で、廊下へこそは辷りけり。

一座水を打つたる如く慄然とした。

天保頃の江戸土産に、いやなものの番附と言ふのがある。東西の大關を御覽に入れる。

古今いやなものの番附。

東の方大關、

へたな義太夫を聞くの。

西の方大關、

茶屋歸りに親父が戸を開けるの。

此は一寸面白い。いや面白いどころの沙汰ではない、生命に別條の無いばかり。

悟つたものは又藝妓である。背中合せの松飾と云ふ形に、羅で、廣間の兩側に配られて、前に初傳の札の無い、皆投入れの花の態。向う側のは肩がくれに夕顏の眉を見せ、此方側のは衣紋附に朝顏の頸を見せて、引捻られたやうに、御前と大坊主の七顚八倒するのを視つつ、米の高いのに我ひとり、好い衣服きて、美食して、俳優と情事で洒落て居る、不斷惡業の罪滅ぼし、と惡怯れもせぬ覺悟の殊勝さ。さあ、首打て、と時々おくれ毛なんぞ搔く。葉の濡色や、花の露、疊の影は涼しいが、皆、晝顏の萎れやう。

「まだ腹は切りませぬか。」と耳の疎さうな、老人が、きよとんとして、浮り言つた。柳吉とは一人を隔てた隣席に居たが、それも此も知らぬ顏。

お察し申す、が、小父さん、まだ御上使も見えませぬ。

四十四

座客いづれも膳を前に猪口を睨んだ形は、判で捺したやうに見えるけれども、顏色の異類異形さは、お次に控へた赤穗の諸士が扶持離れの苦しさに較へつべしで、肝魂も身に添はねど、仁義禮智の世間體、膝も崩さず、羽織も脫がずに泰然たり。

太夫は叫喚大叫喚、唸きつ、吠えつ、泣いつ、悶えつ、仰つ、反つ、阿鼻焦熱の形相も斯くや、

とばかり物凄い。

無慙やな、柳吉が、氣が上ずつたか、目が眩んだか、些と腕まくりの思ひ切つて、袖の陰に德利を控へて前に居る、件の中年增に向けて、目まぜで密と猪口を出すと、横目にじろりと見て、惡く最う一息取澄した顏をして、手先で膝を壓へて示せたは、「たしなましやんせ。」と言ふのである。

成程、無理はない。閣下が餘興の義太夫は、宴を開くに先立ちまして、と豫め茄子丸が宣言をしたのであるから——勿論、座に酒氣が滿ちてから、此の體だと、血を流さずには納まるまい。

柳吉は一計を案じ得た。

フト明放しの背後の廊下を、女中が一人通りかゝつたのを、手招ぎで呼んで、「は。」と手を支くのに冷水を一杯、コップで、と賴んで、威儀正しく耳を傾けて義太夫を視つつ待つと、やがて塗盆で運んで來た。其のコップを取つて、ト頂く眞似をして、杯洗にどぶり倒にして空けるのを、薄目に掛けた、拔らぬ中年增が、知らぬ振で、德利で注ぐと、忽ち一本空に成る。滿々と湛へた處を、呼吸をも吐かず呷々々と煽つて、今幾は故と一膝乘出し、恁う感に堪へたが如く耳を五十度に傾けると、盆を手にして背後に居掛つた女中が、何處の隙のか德利を一本算段して、どツどツとコップへ注ぐのを、見向きもしない振で、柳吉が逆手で引攫つて、又一息に呷々と煽つて、

思はず、口の裡で、

「旨い。」と言つて、トンと其のコップを疊へ。

置く間あらせず、柳橋のだと言ふ、洒落れた雛妓が、四五膳ッゝと德利を持つて伸して來て、默つて注いで莞爾とする。

忽ち空しく成るのを見て、右の雛妓が、遠くに離れた朋輩の仲よしらしいのに、ト德利を見せて差招いだ時である。

唐突に拍手して、

「偉い！」と叫んだものがある。

「淨瑠璃ですか。」と小さな聲。

「コップが偉い！」

「姐さん、冷水をおくんなさいませんか。」と切口上で言ふのがある。

「えゝ、まだ腹を切りませんかい。」と、法然頭を兩手で壓へて再び訊いたは、一軒隣りの小父さんで。

「漸と今顏世御前かな。」と眞顏で髭を捻るのは、其の隣の紳士である。

「厭にくな〳〵した嬶々だね、姦通をしかねますまい。判官も馬鹿な奴でげす。早々と腹を切れ

ば可いんだ。」

「飛んでもない、力彌々々さへはじまりません。」と紳士は殊勝に扇子で煽ぐ。

「でかすからね、何しろ思ひ切りの悪い野郎だ。」

「偉い！」

「旨いぞ。」

「コツプだ。」

「其處だ。」

最う六杯と煽りつけた、柳吉は思はず、腰を落して、ふつと息を吐いて、

「亡くなつた女房も、おいらんも羨ましい、こんな義太夫は聞きやしまい。」と頽然と成つた。

さまよひ

四十五

雨の歇間も、雲は低く、灰汁に墨の浸んだやうな、空には星の影もない、深川六軒堀の、更けた暗がりの川岸の一處、水に近く水色の蹴出を蓮葉に、然も跫音を潜めながら、晴れも遣らず、降りもはじめず、行方なく流るゝ雲に、袖も褄も遣放しに、ふら〳〵と出た姿が、軒並擂はず凸凹した此處彼處の灯も仇白い軒燈の、宛然大な獸の暗夜に牙を剝出したやうな、其の一燈に立留つて、木賃御泊宿とした、廂の低い堀縁の煤け行燈に近々と横顔を露したのは、木場横行の、紫陽花の怪しい婦で。——

相馬の古御所の出居に似た、惠比壽の宮の神樂堂に頰杖支いて、蒼鷺の雲を睨めば、顔の長さ、六尺にして、人間の肝を鼻の先で捲くのであるが、恁う明白だと、額も廣からず、頤とて長いのでなく、如法瓜核形の中年增。然して瞼があるでもない、が、唯瞼が高く膨りとして、一寸流眄で行燈を視るのにさへ、黒目勝の目立つ瞳が、大きいとよりは、鋭いとよりは、艶々と濃く、潤んで、沁んで、肉を通して、薄墨で其の瞼の上下を颯と暈すかと思はるゝ。ト此の暈が映すと、皓齒も鐵漿を含んだやうに媚かしく且つ凄い。

「ほゝゝ、」と獨笑する、ソレ其の口許が黒いやうで。

「白川だね、此の行燈は。」と、ふツと一つ紙の上から徒らに吹いた顔へ、斑が湧いて、隈が添つて、痣の出來たは、おのづから、夜稼ぎの身の膚の汚點と……何、煩かしく言ふほどのことはない。安宿の記號だの、煤の形が疎らに面に映つたので、また、埃一つも映るほど、色は拔けるほど白い。

夜鷹のお舟は、寂鎭まつた水の町の片隅に唯一人。

此とても、不意に出會ふものは仰反るだらう。鳴馴れない蟲の聲が時々何處ともなく聞えては止むばかり。遠くにも近くにも跫音が聞えないから、威すための所作ではあるまいけれど、居場所が高いのに、立つた軒が水寄で低いから、安宿の煤行燈は頤の下。で、遠くからだと、淺葱の切を掛けた潰島田の白い咽喉が、廂の上から、舌で燈を舐める體がある。

仰ぐと、眞黑な雲低し。

「可厭に蒸すね。」と、片手にぶら下げてた瓶覗きの手拭で、白い耳朶を壓へながら、膚の羅の紺の色が、すらりと横に、一度行燈の影を攫つて、顏も薄りと燈に離れて通る。

最う、片側は水である。……五艘七艘、二三艘、纜つた船の、船脚の輕いのは、潮を誘つて道より高く、ひた〳〵と岸に着いて、船首は、此の狹い町の片側の家の屋根をば覗く。二階家交りに小家並びの、寢ながら明けた暑い戸障子、軒簾は、苦なき船の風情がある。

一艘、船脚を暗く沈めて、四五十俵、米の光がほの〴〵と俵の杉形を白く見せた達磨船。

褄を挾んで、其の横づけの舷へ、輕く腰を落すと、婦、俵の中へ手をさして、するりと拔出したは長煙管で。

「どれ、一服。」

と帶の間から煙草入。長々と銜へてパッと燐寸を摺る、赤い火に、きらりと掛つて、一雨ぱらぱら〳〵と落ちて來る。

「消さうたつて、然うは行かない。」

と手で拂つて、莞爾とした、唇暗く吸着けながら、澄して仰向けに煙を吹いた、が、凝と空を視た瞳の黑さ。

「降るのかねえ。」

煙管を膝に、スッと立つて、

「夜店に雨は禁物さ。」

四十六

ふッ、其の長煙管の吸殼を、舷を目蒐けて、立身で吹くと、風が無いので飛散りもしないで、赤い緒を引いて眞直ぐに落ちたが、雨と夜露と潮じとりに、一堪りもなく、ジウと消える。

「おや、憚り樣、火の用心は此に限るよ。」と天道を恐れぬ舌の根。

「恐れ入ります、お手數で。……いえ、何ういたしまして御丁寧な。」と、頭を振るやうに、頷くやうに、潰島田の髱をふら〳〵と、次手に用も無い肩を拗身に搖つた、襟脚へ五粒六粒ヒヤ〳〵

と亂れ打つ雨。

「おゝ、冷い。」と襟を引き、黑い瞳で、じろりと又空を視て、

「張子でござんす、衣裳とても御覽の通。……お手柔かに願ひませうかね。」

言種は不敵ながら、白い手で頸を撫でつつ、ト挿櫛に觸つて視て、煙管を口に銜へたなりで、帶に預けた手拭を取つて、姉さん被に鬢の毛を流した風俗。世は浮沈みさま〳〵の、米積む船の添ふにつけ、此が大家の御新造なら、と可惜しきまで婀娜である。

「庇へ、庇へ。」と手拭越しに鬢を撫でて、

「串戲ぢやない、商賣はまだ口明前だよ。」

で向うの軒下を雨宿り、と透しながら、低い二階に戸を鎖さない、寢込みの破蚊帳を視るにつけても、ブンと聞ゆる蚊の唸聲に、チョッ舌打で、眉を顰めた時は、最うポツリとも來なく成る、雨は扨て欠伸の機の涙のやうで、けろりと最う止んだのである。

時しも、件の安宿の向う横町を、遠くから、がたりぴしりと、露地板か何ぞ踏轟かす、雨上りに調子の外れた足駄の音、道は縱に通つたのを、千鳥掛けにすたんばたん。

發機んで來るのは早いもので、婦が聞澄さうとするまでもない、忽ち痩せぎすな脊のすらり、いや、松の振の曲つた如く、醉つてふらめいた姿が、背後から突飛ばされたやうに顯れて、いき

なり眞直に、丁ど安宿の横にある、其處の木の橋を、向岸へ渡らうとして、ぐい、と肩を捻ぢて、蹌踉いて引返すと、ガタリと踏止まつて、蒼いほど醉つた顏を、行燈へツイと着けて、

「何だ、木賃宿……」

と目を擦つて見直して、

「六間堀。――島かい、此奴は。不可んぞ、方角が分らない。」

と又がた〳〵と歩行き出すのが、正しく此方へ、……と見て取ると、ひらりと褄捌きに音を潛めて、舷をすら〳〵と渡るやうに岸を傳ふと、折曲る辻の一方、さして行く其婦の眉を掠めて、行くものの肩の上と思ふ、夜目には空に、欄干づきの四角な高い橋があつて、婦の乳のあたりに、橋の袂の踏段が五六段。

其處で、ふと立つた、と見れば、長煙管を取直して、トンと欄干の柱を雁首で打つのを合圖に、鈎以て引掛けた如く、裳を卷いて、身輕にひよいと飛上つた。姿を返して、床几！と言ふ澄し加減で、腰を掛けて、雲から覗くかと構へたは可いが、衣紋づくろひも調はず、氣組も滿たない前に、つか〳〵と寄つたは横のめりの夏帽子。羽織の紐は結んだなりにぶらりと下つて、袖口が綻びた、ぺら〳〵坊主の忍ぶやう。が、紋着で御袴。

お誂への鴨が熨斗で來た。

擽らうか、威さうか、轉跪らさうか、但し頤を一つ掬はうか、矢頃が餘り近過ぎる。引絞つたら弓弦の腕が支へさう。で、婦が腰で渡つて、欄干を向うへ横に引く處を、

「もし〳〵（高調子で、）一寸伺ひたい。」

「……」

「一體此處は何處なんです。東京の中には相違ないが……」と、自ら嘲つて、ハ、と笑つて、

「此の橋は何と言ひます。」と柱の下からドンと壓すのが突支棒、縋るがやうに吻と息。

お舟は繕つた細い聲で、

「幽靈橋……」

霧、霞、靄の夜の、如何に中有に迷へばとて、裾が地につかず高いと言ふのを、名づけやうもあらうのに、此は嗟速で怯したのではない。……眞である。

「幽靈橋……」

四十七

「何、幽靈橋。」

と其の男は、お舟の聲を推戻すやうに言返したが、有りや無しやに、雨空の幻影めくのを透し

ながら、

「出たのか、おいらん。」と突拍子に聲を掛けた。言ふことの不意打に、些と驚いた風で、橋にすつくり立つと、其の男は凝と視て、

「や、御婦人ですな、失禮々々。」と笑つて言つた。申すに及ばず、此は三浦柳吉であつた。

越前樓で、コップの煽切の數を重ねて、火のやうな息を吹いたまでは覺えて居る。が、腹を切つたやら、切らぬやら、大石が驅着けたやら、轉んだやら、義太夫の毒に中つて、何人死んだか、全然夢中で。

唯歸りがけに、酒の氣で赫と赤い、ちらつく目には兩側へ紅提灯が點れ連なつたやうな廊下を通り掛る、と目前に異形なものを視て、吃驚して、半ば人心地に成つたのを知つて居る。思ふに、出足を玄關へ向ける前に、奥めいた方へ、とちはぐれたか、それとも、厠へ行つての歸りであらう。でなくて、全裸體の油坊主が湯殿から顯れよう譯はない、と氣が着いたも、後の事。——唐突に見た夢の覺際は小山の如き素裸の大入道。思はず、「化もの！」と叫ぶと、化ものの方も、ぎよつと退つて、胡散臭さうに、べろんとした赤目で此方を睨んで、「化ものやて、あんたは何だんね。」と言ふ、毛深い腋の下に、浴衣を抱込んだのが漸と醉顏に映る時、附いてくれた雛妓が一人、甲高な調子で、「御前樣よ、御華族の。」とはぐらかすと、「はツ、」と言つて汚い尻を畚で伏せて、

灸のあとを二側にべた〳〵と廊下に平伏す油坊主。「えらい失禮を。」「あゝ、太棹か。」と呵々と笑ふ時、得ならぬ留南奇が、潑と薫つて、洗髪の島田が頬にヒヤリと衝と接吻をしたものがある、と思つたばかりで式臺へ、急いで出て、待合す數の俥を拔け、自動車の並んだのを潛つて、大川端へ出たのは確で。

摑手に取つた蛇目傘を疊んだなりで振廻しても、サアとも、スツとも雨に當らないから、晴つたには相違ない、と空模樣も分らないくらゐなれば、足許なんぞ、西も東も差別は無い。

が、上野の山と、洲崎の海とを間違へて、根岸へ歸るのに、大橋を渡つて來たほど正體が無いのではない。柳吉は生醉の本性違はず、一度渡つて翡翠を觀星堂に返すとしよう……ばかりならいいのであつたが、恁うした人間の習慣として、素面で出來ない相談を、酒の勢で遣つて退けよう、横紙所か、大門を破る意氣込。振舞酒で卑劣千萬、醉の餘りの不了簡。成らぬと言つても、鶴兼の老主婦の、這奴、胸倉取つて、刺違へる覺悟で談じたら、幾世を茶屋へ呼べぬことは豈もあらじ。萬一それが叶はずば、屠犬兒が居ようが、猫萬のござらうが、泥が、油が、地獄でも、新道の菊川へ逆に飛込む決心で。

兩國を渡る方角を、千鳥足に取違へて、同じやうな電車線路に迷ひ、些と寂し過ぎると思ひながら、夜が晩い所爲だ、と其れにして、唯一人、新大橋を渡つたのである。

尤も茫とした仄白い大橋には、線路のみ、電車の通るやうな時間ではない。回向院あたりには辻待の俥が、と心つもりに突切ると、縱横の町々は、もう寢たのか、騷々しい足駄だと目を覺して、次手に欠伸をして靄を吐き〳〵、醉つた畫工などは一呑みしさうな寂しさ。「間違つたか、不可んぞ、此は……」と心急くほど、道にはぐれ、辻に迷つて、六間堀へまぎれ込んで來たのであつた。

辰巳の空を心當てに、間違つた近路を、焦燥つて、のめり込んだ細露路の、夜ふけに、ぼやけて白張のやうな軒燈に、打着らうとして驚いた形なぞは、――あらはに燃ゆと見えぬばかりぞ――當人は蛾ぐらるな意氣組だが、大都の一ケ所に取つては、よろける高足駄の柳吉は、傘持つた蚊が一つ跳つて通る。……

四十八

と言ふので、柳吉は道に迷つて、此の島へ高足駄を踏込むまで、大橋から此方殆ど人一人に逢はなかつた。が、道端の靄、低い雲、露路では戸袋、羽目板などに、ぼやけた軒燈、街の燈さへあれば、前後、左右に、ふら〳〵と黑い影、人の影法師と思ふものが、ちらついてはフツと消え、ちらついてはフツと消えた。醉つた目には我が影の、横に、縱に、仰向けに、俯伏に、燈に映る

のを、おいらんの幻と見れば、亡き妻の影とも見る。……懐中に例の翡翠がある所爲であらう、あの紙人形が連立つて歩行くやうにも思ひ、蹴躓いて赫と逆上せる時には、新道の幾世の姿を夢に見るやうに思つたり。で、性根の亂れた氣も漫ろ、名を聞いた幽靈橋も、此の時ばかりは、親類の家の縁側ぐらゐに思つた。……つい、其の親類氣の心安だてに、「出たかい、おいらん、」と浮り喋舌つた。が、咄嗟ながらも心着けば、恰も狂人の沙汰。で、教へた對手が婦だ、と聲を聞いて悟つただけ、顔も容も分らぬけれども、近所から寢苦しさの橋涼み、と夜中に媚いたのを怪しまないだけ、一寸照れ加減を笑ひがくしに、「失禮々々。」禮と詫を一所に、高い橋の上へ祭り上げて置いて、窄めた傘の柄で楫を取り、だらしの無い事、紋着で泳ぐやうに、岸について、辻の角をぐるりと廻る、と思ふと、あ、と言つて立留つた。

洋々として天流れ、渾沌として陸淀む、前途に湖の如き大川あり。雲を呑む水の勢は、影を中空に投げて、流は音なきが尙凄く、行くものの脚を浸し、水明は頭に迫る。其の足許を流るゝは大利根に通ふ小名木川。怪しき魚の背の如く、中洲の暗夜を浮べたのは、言ふまでもない隅田川である。

思ひ懸けない夜の水は、天狗の火よりも人を威して、柳吉の胸を壓したのである。

押戻さるゝやうに取つて返すと、幽靈橋にずつと寄つた。

お舟は、行きかゝる柳吉の後姿に引着けらるゝ樣に、欄干を傳ひ返し、片褄、橋の段にかゝつた處、不意に其男に引返されて、衝と退つて、立つたれば、宛如二階を仰ぐやうに、柳吉が下へ來て、

「最う一度、あの鐵橋は何と言ひます。」

小名木へ大川の注ぐ處に渡したのは、此の渺々たる、銀河に沈んだ黑船に髣髴として見える。

「はい、萬年橋……」と優らしい。

「難有う。」

直ぐに足駄をガタスタで、

「分つた、が、八丈島、三宅島へ流刑ものの出船の處だ。大變だ。」と呟き〳〵、然し猶豫はずにさつさと行く。……

唯、見て、お舟は姉さん被りを、するりと取つて、手を欄干に、伸上るやうにして、屋根から覗く如く見送りつつ、柳吉の姿が、いま鐵橋に渡りかゝつて、中央で、大川に向いて凭れた體して又立停つた、と靄越しに認めると、横顔で、振向いて、

「彦ちやん、〳〵。」と二聲ばかり。

呼ぶと、其の橋向う、水とも土とも差別の着かぬ、一際暗闇の幽靈の裾から、のそりと橋の上

へ乘つて出たのは、半纏の尻を露出に印を隱して、お獅子と云ふ身で、頭へすつぽり裏返しに被つた野郎で。……煙管で打てば響くやうに、夜鷹につきものの野良犬の用心棒。

「一寸、彦の字。」

「あ、あ。」と、答へる。

「萬年橋の孰方かに、交番があつたつけか。」

「渡るとあるぜ。」

「ちよツ、氣の利かない紅星だねえ。」と仇に曲めた唇暗く、手拭の端を皓齒で嚙む。

四十九

彦と呼ばれた半纏着が、

「何かね、姉さん、後を追はうと言ふのかね。」

「人聞きが惡いよ。遁すまいと思つてさ。」

「手數が掛るね。」

「否、足數。蚊には何本？」と片足を白く揚げて、次手に手拭で、はた〳〵と蚊を拂く。

ひよこりと退つて、鼻を彦ちやん。

「罪だ、姉さん、堪らねえ、好い香だ、何て香水を使ふんですえ。」

「お巫山戯でない。夜鷹に香水があるものかね。驕れば蘭奢待と言ふ處を、……あ、浮世ぢやな。濕氣除けに、樟腦を溶かしてさ、霧を吹いて置くんだよ。此でも吉野紙で包んで御覽、姉さん本所ぢやないけれど、雛壇の三ツ目あたりで、霞を分けて、櫻と割床で出ようと言ふ、大した遊女だけれどもね、柳もなしに幽靈橋へ、煙管を杖に立つたんぢやあ、根ツから榮えはしないのさ。」

「うむ、」と半纏を拂つて、首を掉る、風體の希有なに似ず、頭毛の角刈に似ず、頬の圓い、ちよんぼり眉毛の、とぼけた奴で。

「榮えますよ、榮えますとも。」

「さ、其のはえるのが、女郎花や、萩、尾花なら本筋だがねえ、私が死んだら此の橋へ蕺草でも生えるだらうよ。」と、思ひ懸けず、下ゆく水に、濕かに、低い聲が響いたが。

「降りみ、降らずみ、こんな晩、しよぼ〳〵雨に來て見たが可い。幽靈橋の草の中から、青い蹴出しの火が燃えて、……怨めしや！……」

と爪立ちつつ、すつくりと肩を立て腰を伸す。朦朧たる萬年橋、澪木へ鵜が下りたやうな、柳吉の其處に彳む姿。

「うらめしや。」と、流も黑く成るばかり、濃く艶かなる瞳を凝して、瞬きもしないで瞻るのを、

何の洒落とも、深い意味とも、前世の因縁とも解らない呆れた顔で、踞つて視る彦の方へ、忽ちスツと風を切つて、向直つて、ギリ〳〵と齒を嚙み、眦を屹と釣り、ふら〳〵と手を掉つて、

「怨めしや……彦造さん。」

「ぎやツ。」

「あゝ、吃驚した。五位鷺が耳朶を突ついたかと思つたぢやないの。花骨牌が散らあね、蟲の毒さ。」

彦造は腰を支いた、足をさすつて、溜息を吻と吐き、

「串戲ぢやないや、お舟さん。洒落にや凄過ぎら。樂屋内だつて此だもの、先刻橋の名を聞いた時、其の術を一番用ゐれば可いぢやねえかね。今頃は紙入にありついたんだ。紋着、羽織のやうだつけ、些とは重量があつたらうと思ふがね。」

「何、悪くするとね、あんなのは、羽織の皺は尙だしもで、腰板の傍の處に質札が附いてるものさ。——然うでも無かつたやうだけれど、駄目だよ、醉拂ひに掛つちや。——そら、かな聾の隱居を威して、目金が光つたので目を廻した狸の話があるぢやないか。……借金取も鶯の聲だもの、お化なんぞに驚くものかね。……幽靈橋と氣取つて言つて聞かせりや、「出たかい、おいらん。」は御挨拶だつたわね。……怨めしいにも、口惜しいにも、可懷しいにも、戀しいにも、念が殘つて

化けて出る心當りがあるやうに、……誰かに思はれる人なのかね。」

と、妙に又水を視て、聞かすともなく、お舟は何か沈んで言つた。が一寸氣を替へ、

「彦の字、まだ彼處に立つてるね。」

「うむ、居る、杭ぢやあねえや。」

「戀だよ。」

「えゝ。」

五十

「戀だよ。——何うも樣子がね。洲崎へ行かうか、大橋へ戻らうか、と彼處で迷つて居るらしい。」

微風添へば且つ靡く、柳やさしく尙視遣つて、

「此處が思案の、と唄に言ふのは、もつと小橋か、狹い町さ。萬年橋で、思案をするツて、舞臺手聞の掛つた先生だねえ。」

——妙な言を又言つた——

「何方か極めてくれないかね……焦つたいよ。」と拗身に一つ肩を掉つて、自棄な、長煙管の吸口で、ぐい、と耳許を搔きながら、帶に手を入れ、

「あ、燐寸を遺失した。まだ一錢にも成らない前に……身上だ。彦ちゃん、見ておくれ、其處等に……」

「おつと、轉んでも唯は起きない。其處は桶屋の彦造だ。今の怨めしやひゆうどろ〳〵で、幽靈の手から授かつた。」

「點けておくれ。」

「へい、素人が點けますか。」

「燐寸を摺るのに、桶屋も提灯屋もあるものかね。」

「だつて、燒酎火を燃すのはお化の方だぜ。」

「では、後見々々。」

「や、後見と來りや器量が上つた、ほらよ。」

「あいよ。」と納涼臺と云ふ見得で、腰を長々と、悠然と吸ひつけながら、

「さあ、もつと川の上へお出しよ、些とでも、水の影の映るやうにさ。」

「消え了ふよ。」

「すぐ後を最う一本。……點けちや消し、點けちや消すのを、吸つては拂き、吸つては拂きさ。兼て狐火の仕掛でね、うまく行きや萬年橋の人が、此の火に連れられて戻つて來ようも知れない

からね、――生憎むかう向きで立つて居る、……困るわね。……」

トンと欄干に拂いて、

「憚樣、また一本、すぐ一服。」

と欄干に又トンと拂く。

「串戲ぢやあない。」

「泣かずにお遊び、もう一本。」

「ナ、泣きはしません。」

「笑ふと消えるよ。」

「あはッ、はッ。」

「それ、消えた、すぐ一本。あい、頂戴。」

トンと拂いて、

「月だと砧に聞えるがねえ。」

すらりと立直つて、悵然として雲を視た。

「あゝ渡る、渡つたよ。」

「何が、何が、お舟さん。」

「渡橋の空を雁ぢやない。萬年橋を、あの鴨が向うへ渡つた、――彼處に交番の紅燈があるんだらう。裏路を行かうよ。遁がしはしないから。」

「廻るたつて、行先が分つてるかね。」

「セメント工場の廣場から、下の橋へかゝるに違ひない。交番さへ二三町離れれば可いんだけれど、大廻りだから、急がないぢや行過ぎて了ふだらう。駈けなくつちや追つくまい。姉さん轉ぶのが家業だから、駈出すのは煩かしい。――彦ちやん、お前は草履かい。」

「あ、あ、差當り草履だけれど、心ぢや足駄を穿いて居る。」

「丁度可い、負ぶをして、飛んでおくれ。」

「えゝ。」

「嚙りついて上げよう……其の首へ。」

兩袖で、はツと捲く。彦の頰邊へ、はら〳〵、と氷のやうな潰島田の鬢、背筋へ乳がふはり、と乘る。

「ふあゝ、人殺――」と聲を殺して、桶彦が、

「堪らねえ、眞綿とも、羽、羽二重とも。」

「腰をさ、可厭、腋の下へ手を入れちや。……」

釣船

五十一

「こりや渡船ぢやありませんや、旦那。」

眉毛が狸の毛のやうに、もじや〳〵と濃く額に伸びた、目の細い、鼻の下の長い、五十あまりの親仁は、高橋界隈一番の怠惰もの、吉兵衞と云ふ名代の大工。船首に唯一つかんてらの、瓦を燻したやうな灯に、煤けた顏を舷に慣乎と出す。……玄海灘とも琵琶湖とも、夜中は氣の知れない、大川に此の面、龍宮の夜番が、末世の浦島に逢つたやうに、希有な眼色で、羽織袴の柳吉を、きよろんと視て……然う言つた。

柳吉は低い岸から、頽るやうに、水の上へ肩を出して、

「……漁父なのかい、小父さん、ころりと肱枕で居なさるから、私は船頭だと思つた。失禮したなあ。」

「はあ、」と口よりは眉を開いて、

「失禮も何もありやしねえ。舟にだつて恁うやつて居りや私の住居だ。其處へお尋ね下すつたも

のを、寢轉んで居たのは此方が却つて不調法だ。いや、御免なせえ、はッはッはッ。」と氣の好い笑ひ。が、大江の威力に壓されて、ぱく〳〵舌が赤く、かんてらを吸つて唯動く、と見ると、其の口へ釣針形に指を曲げて、當がつて、

「口惜いが、お前さん、水中は米が廉いと見えてね、豆粕なんざ一向に食ひません。餘り癪だもんだから、足の指で釣りながら、少々ばかり(德利と猪口の手。)試みますうちに、可い心持で、うと〳〵……はゝゝ。」と笑ふ。氣の所爲か、矢張り陰氣で、夜の深いのが思はるゝ。

「何とも、それは、お樂みの處を濟まなかつた、が、ねえ、太公望さん。」と膝に支く手が、ぐたぐたと成る。

「太公望は難有い。此奴は山の神に聞かせたい。が、(さん)が困つた。……語呂が伸びると、坊さんだ。」と俯向けに頭を敲いて、

「評判ほどにや、禿げませんや。」と成程評判らしいのを、つるりと背後へ撫でた樣子が、何うやら船の相談が出來さうで。

柳吉は乘出すと、いきなり舷を摑へさうな、手を伸すのが危つかしく、

「ぢや太公望大人だ。……大明神と拜むから、船に乘せてくれないかね。」

「へゝい、……船に、旦那も釣られようと云ふ洒落なのかね。」

「飛でもない。」と、手長蝦一尾飛ばぬ事を、柳吉は醉心地に吃驚して、

「大川で鯉を釣るくらゐなら、飛鳥山へ上つて金を掘ります……釣と來ちや、からつきし素人なんだ。」

「いや、素人結構、釣で鼠色に成つた日にや、溝が支へたより始末が惡い。棟割長屋滅亡の基でがさ。」と何に懲りたか、喟然として、眞面目に成り、

「洒落ぢやあねえ、眞個のお賴みらしいが、お前さん、船に乘つて、何うなさるんだ。」

「お禮はするから、」と、眞以て叩頭をして、

「漕出して貰ひたい。」

「何處へね、旦那。」

「其處だよ。」

「あゝ、向う河岸、中洲かい。」と早合點。

「否、其の向う河岸から來たんだよ。」

「おや〳〵。」

「其處で、何處へと言はれると、其の何處へが、一寸……其處なんだ。」と、舌も縺れてこんがらかる。

「へい、はてね。」
「えゝ、言つ了へ、八幡様方角だ。」
「其の勢に釣込まれて、
「ほい、中引の鐘ゴーンと鳴る。」と大きな手をハタと打つ。

五十二

「萬年橋かね……彼處を渡つて交番の燈を見た時は、漸と婆婆だと思つたが、眞面目に立つて居る巡査に道を聞くのに恐縮してね、其の八幡様までの智慧も出ない。（永代にさへ參りますれば、あとは存じて居ります。）ツさ。――（何處までも眞直においでなさい、橋三ツ渡ると永代ぢや。）と言はれた時は、最う其が自働電話なら倒込んで寢たく成つた、……此の上に橋を三つ。まだ其の一つも渡らない前に、すつかりまるつた。迚も一寸も歩行けませんよ。……小父さん、夜明けまで釣つてるなら、斷つて漕ぎ出して貰はないでも往生するから、とに角便船をお願ひ申す。但し……便船と言ふ柄ぢやないね。積込んで貰ひたい、石炭屑でも、泥の塊でも何でも可いんだ。」と自棄で言ふ。

「……然う醉つた處は些と泥だね。はゝゝはゝゝ、いや、泥と言へば、とてつもねえ、此様な舟に

乘せろなんて、蝦蟆から落ちた自來也ぢやねえかと、變に思はねえでもなかつたが、何、お前さん、それだつて賴まれりや江戸兒だ。品川までなら漕いで遣るのさ。……洲崎と分つて安心……も可訝なものだが、今更意見でもあるめえよ。役がね、一門、親類の意見なら、此方が聞かうと言ふ人體だ。……今時、釣られて居るんぢやあ、お前さんのおいらん同然、所帶持は惡からうが、まあさ、添つて見ろ、乘つて見ろ、とお遣んなせえ。」
「難有い。」
「危え！」
はツと手を開いて、
「釣つた――釣つた――偉いものを釣つた。」と、響きで、尻持を支いて呆れた顏色。
「今晩は。」と早や胴の間で、舷へ頽然と手を支く。
「其處の段々へ着けるものを、串戲ぢやない、深いよ、なか〳〵。」と、横搖れに、炎尖の鬚と赤く成つた、船首のかんてらに、正體を篤と視つつ、
「足袋跣足だね、お前さん。」
「脫い了つたよ、其の岸へ、……」。
「おゝ、彼處に居ら、爪皮が。鳥に化けたさうな顏色で。」

「打棄つとくが可い、要りやしない。」
「勿體ねえ。まだ新しいんだ。旦那が要らなけりや穂まちにするぜ、待ちなせえ。」と一跨ぎ、艫へ出ると、入子の艪杭に妙な船印……釣棹と覺しきを八尺ばかり眞直に押立てて、空へ竹の子笠を結へた形、流灌頂に似て、非ず、蓑を剝かれた轆轤頸の案山子と云ふ身で、輕い南風にひよろ〳〵ひよろ。
「何の禁厭だい、小父さん。」
「先刻のやうに、お前さん、一杯機嫌で、うと〳〵して御覽じろ。こんな暗い晩だ。三百傳馬や五大力が、ギイと押して來る、と船頭が寢惚け眼さ、かんてらの、ちよろ〳〵なんざ、吸殼ほどにも思はねえ。鰯の頭へ、鯨の腹で、一呑みにずぶりと乘りまさ。海坊主より可恐しい。……賴むよう。——ギイと、大い楫が、屋根ごと引越しをする城の容體で向替るまでは、小舟の臍は上つたり、下つたり、夜釣にや一番の禁物だからね。」
と、竹棹の結びめを解いて、
「魔除けの目印、何うでがすえ。(と取直して、)將軍家のお船手にも、こんな大した旗印はありやしねえ。」
と笠を手許へ、ツイと其の、棹の尖で、離れた船の岸を狙つて、

「刺いてくりよ、トいや、どッこいしよ。」
で、足駄を……
「しめ〳〵、はッはッはッ。」
少時すると、唇を引結んで、大河の波に艪一挺。

五十三

竹の子笠を着た形、——船頭の裸に笠や雲の峰——
柳吉は、うろ覺えの句を思つた。
「小父さん、向うに、むく〳〵と眞黑な入道雲が出たやうに見える、あの煙突は何處のだい。」
「あゝ、あれか。」
「彼だがね……空も水も薄朦朧と灰汁のやうな目の前へ、すく〳〵と、あのさ、五抱もある火柱の冷めたのが五本突立つたのには、全く脚がすくんだんだよ。……寂しい處だね。」
「寂しいたツて、お前さん、宵が過ぎりや、人通りなんぞ全でねえと言つて可いんだ。ありやセメント工場だよ。」
「然うかい、意地惡く、また煙突の肩の處が、揃つて縊れて、德利を突立てて並べたやうに見え

るぢやないか。足許から眞空へ湧かれた時は、實際驚いた。……酒の罰で、德利地獄へ落ちたかと思つたよ、驚かしやがつて、」と言ひながら、舟の仕劃の河童に乘せた、貧乏德利に、ト目を着ける。

些少ながら、吉兵衞は海から吹く向風に笠を据ゑて、腕を堅く、早緒を張りつつ、

「お夥間だね。石炭の山が糟地獄よ。」と渺々たる此の水の上を、鷗が浮寢の風情かな。

「處へ、地藏樣だ。」と恭しく德利を擡げて、

「あるかい。」

「有る。」と吉兵衞は、ぶツきらぼう。

「や、竹の皮に——鮹の脚あり。……鮹の脚……」

「はゝゝ、」何故か底力の無い笑ひ聲で、

「其の入道の引導で、地藏樣を拜みなせえ。柔か味は菩薩だけれど、利きの可いことは、不動樣だ。キリヽと劍先で貫くよ。」

轉げた茶碗をざぶりと灌げば、唯一口も大川の水を、宛然倒にして浴びるが如し。

「堪らない。——一杯何うだね。」

「何うして〳〵、漕いだり飲んだり出來るものかね。」

「濟まないなあ。」

「何かの因緣と斷念めてるよ。」

「心細いことを言ひつこなし、小父さん、舟は大丈夫だらうね。」

「さあ、其處だよ。」

「えゝ。」

「大概大丈夫と思ふがね、人を乘せて漕ぐのは初めてなんだ。」

「へい、小父さん、商賣は？」

「水鷄だ、私あ、大工、たゝきだよ。」

「や、棟梁。しかし恁うやつて浮いてれば、人一人乘つたつて別に違ひも無いだらう。」

「然れば、然う思つて、承合つたが、生命を一人前預かつて居ると思ふと、筋が詰つて、何となく腕腰が堅く成るんだよ。」

「そりや、不可い、堅く成つちやあ……何、乘つてる奴の生命なんぞ。」

「構はねえかね。」

「其奴は困る、困る……弱つたな、棟梁々々。」

「此處で棟梁は擽つてえ。艪に摑まつてる時だけは、爺や、とでも、番太郎とでも言つておくん

ねえ、からきし働きは無えのだから。」
「しかし棟梁……弱つたな、小父さん〳〵。」
「第一、然う刻んで口を利かせなさんな、氣が散つて艪が外れりや、其までだ。」
道理こそ先刻から、笑ふ聲にも力が入らぬ。
「しかし、棟梁……弱つたな、最う少し岸を漕いぢや貰へまいか。え、小父さん。」
「あんなに船が寢て居るよ。大い奴を見なせえ。傍を漕いでも、勢ひで、こんな小いのは向うの底へつる〳〵と吸ひ込まれるんだ。」
「弱つたな、大分搖れる。……あゝ、かんてらが變に水に吸はれて暗く成つた。」
「あゝ、何となく影が薄いよ。」
「情ないなあ。其の三百傳馬とか云ふのが、ギイと漕いで來はしないだらうか。」
「勝手に横縱が見えるほどなら、心配はしねえんだ、當分首は据着けだよ。」
「飲め。」と、茶碗にどぶ〳〵と手酌で注いで、
「我身で人間だと思ふない。……恁うなりや泥だ、石炭殼だ、藁屑だ。」と氣競つて言つた。

「人間は氣の持方だね、お前さんが然うやつて度胸を極めたんで、大きに船が漕ぎよく成つたよ、灘も越えた。」
と吉兵衛が笑つて云ふ。……大川に船の町が有るやうに、纜つて、船首を揃へ、舷を連ねた、河岸一つ漕拔けると、水心を輪形に乘つて、岸へ稍船脚を近くする。
「お望み通り。安心だ。」
が、船の町に離れたので、漫々たる水ばかり、近づいた岸は却つて遠く物寂しい。
「あゝ、横川があるね。」と、茶碗を手に、漸と人心地に成つて、柳吉は名所めいた事を言つた。
「十間川だよ。」
「橋は。」
「上の橋よ。」
其の薄黑い橋の上を、恁る夜陰に、通魔か、と、すツと渡る、黑い形がある。……一寸間のある船から見て、其の川口を前途へ拔けると、突出た石垣の突端に、其の形、髪を亂したら宛然の細い柳で、風よりは潮に搖れ〳〵、悄然と立つたのを、婦と認めて、醉つた目にも慄然とした。
「棟梁々々。」
「さあ、幾らでも呼んだり、對手に成る。」

「否、喧嘩をするんぢやない。何か此處の川口に、幽靈が出るなんて噂は無いのかね。」
「大鰻が化けるッて話はあるがね。……何、それも、二十間川、十間川と言ふから起つて、鰻の大えのに附會けたものだらうさ。幽靈なんて、お前さん。」
「無けりや可いが、彼處に何か立つてるんだ。」
「や、旦那。」
聲を合せて、
「あ、俯向いて拜んで居る。」
「むゝ、」と笠の頤を引込めて、一つ掬つて胸で反つて、
「口から額へ、眞直に指を合せて、大川を覗いて居る……」
「身投か！」
「身投だ。靜になせえよ。」と、さすがに吉兵衞も息をはずませて、
「此處で、お前さん、聲を揚げたり、騷いだりして、其の煽りで飛込ましちや氣の毒だ。それとも驚いて死場所を變へるかね。船から上つて追掛もされめえから。……灯を暗くして、密と漕寄せて樣子を見て助けませうぜ。婦だ、年も少さうだ、好い寸法だ、へゝゝ。」
「串戯言つてら。」

「いや、靜に、靜に、——」と、船首を低く、氣を撓めて、早間に掠めて艪を刻んで、さ、さと寄る。
柳吉も背を伏せて、舷に目ばかり。聲を潛め、
「一心不亂だ、空虛に成つてる、些とも此方に氣が着かない。」
「死神に、髻を摑まれ、中有に釣された形だよ。足も、そら、地に着いて居ませんや。や、凄いやうな別嬪だ。旦那……密と横づけに當てるから、裙でも、袖でも、突如引摑めえてお了ひなせえ。——確りよ。」
一息、船脚が捌く波、チヤ〳〵と岸へ搖れかゝる、其の波が、足を浚つて引込むか、とハツと思ふトタンに、大鼓を一つトンと打つて着いた、と見たが、隙も無かつた。
淺い靄に、颯と水の色を淺葱に染めた裳を飜すや、黑い姿が、島田を搖つて、胴の間へ、ひらりと飛んで、ハタと其處へ膝を支いた。
「占た。」とばかり吉兵衞は、思はず聲さへ立てたのに、何と、婦人の擧動を見よ、目敏く、釣棹を拾ふと齊しく、三味線構への肱白く、返して取つて、ぐいと、石垣を突いたので、舟は横波にツイと乘る。吉兵衞は漂ふ案山子で、ひよろ〳〵と蹌踉いて、
「わッ、危え、何うするんだ。」

「御苦勞樣、小父さん。」と言ひながら、かんてらの火を黑水晶で伏せたる如く、柳吉に流眄で、ニヤリとしたのはお舟である。

二階の姿

五十五

舟が波に浮いて居るのである。漕がなきや流れる。吉兵衞は呪詛はれた水器機の船頭のやうに成つて、其のまゝ艪を操りながら、

「何だ、何だい、何の事だい、一體全體。」……流れは廣し、波は滑かなるに、小父さんの口はぶつぶつと、海月が集りさうに泡沫立つて、

「やい、何者だ、と言ひてえや。些と大袈裟のやうだけれどよ。」と對手が、其の容色だけに、半ば苦笑ひ。

「鳥だよう。」と澄まして言つた。

「畜生め。」

「羽の生えた、ね。」と言ひながら、呆れ顏して、舷に揉まれたやうに凭り懸つた柳吉の胸のあた

りを、袂で一寸煽いで遣る。

「羽があつたら飛びねえな。」

「だつて、草臥れッ了つたんだもの、羽を休めようと思つてさ。……上手いでせう。岸に立つて、古風に、おゝい〳〵なんて呼んだつて、故々漕ぎ戻して、乘せてくれないのは知れ切つて居るんだから、聊か(フ、ン)魔法を使つたのさ、合掌の印を結んで、ほゝゝゝ、御免なさい。」と、半は柳吉に言ふのであつた。

「何、あやまらせなけりや承知が出來ねえッて、俺ら大屋樣でもなしよ。はぐらかされたつて癪に障らせる程の二才でもねえけれど、お前、此の舟に飛込んで、何處へ何うするつもりなんだ。」

「行先は、八丈島でも、三宅島でも、……洲崎でも。」

「何だと?」

「何處だつて構はないの。羽休めに留つたんだから。……勝手な處で又飛びます。雜と、まあ、あやかしが憑いたんだと斷念めておくんなさい。」

「違えねえ、あやかしだ。沈まないだけにお賴み申すぜ。」

「沈む處か、小父さん、出世しますよ。戰の時を御覽なさい。勝つ方の帆柱へは鳩が來て留まるッて言ふぢやありませんか。夜釣の舟の釣棹へ、一寸、」と其處にあるのを持直すに、鼻の先なる

柳吉を庇つたので、竹の末を斜違に衝と水へ投げると、元を乳の邊りへトンと當てた。お舟は船首を背後にして、胴の間に柳吉と向合つて坐つて居るが、かんてらの灯は紺の羅を背筋から透して、水にちら〳〵と見え隠れに、燃ゆる螢、消えなんとする不知火の刹青をしたやうに、裏すく膚の腕の雪、手先に棹が青かつた。

醉眼にも凝と視据ゑた柳吉が、思はず舷を輕く打つて、

「出世、出世、お願ひだ。君、其の棹で二つ三つ水を切つて貰ひたい。――淺妻船の殿様に成るんだから。」

「嬉しいよ。」

「あゝ、巫山戯ちや不可え。」と、吉兵衞は肩を振つた。

「引搔き廻されて堪るものかい。釣棹だつて船首が搖れらあ。」

「死なば、もろとも、可いぢやないの、沈んだつて。」

「勝手にしやがれ、俺あ最う……山の神の祟だと斷念めた。」

「もし、御前。」と莞爾して、顏を見て、

「潰島田の上蔦が水馴棹を持つと云ふのに、麥藁帽子を阿彌陀ぢやあ、些と納りが悪いわね。淺妻船は可いけれど、お待ちなさいよ。」と帶に挾んだ手拭の、兩端をはらりと解くと、胸の嬌態で、

はツと拂いて、折り疊みつつ、ト支膝、弱腰、靡きかゝるやうな姿で、夏帽を攫つて、瓶覗きを柳吉の額に載せるのを、醉拂ひの心地では、流連の湯上りに、おいらんの手の水櫛、と胸へ沁むだらうし、吉兵衞の目には引掛け帶が茶の尻尾で、弄戯すのだと思はれよう。

「ほゝゝ、出來たわ、稗蒔の仙臺様。」

「偉い！」と感に堪へたる如く、柳吉は肩をのめらしながら、

「見立ては偉い、が、何だ、稗蒔の殿様とは、何でえ。」と柄にも無く卷舌で。

「一寸、强勢意氣だわね。」

「いや、意氣ぢやない、雲上だ。柄は悪くても、恁う見えても、寶物を所持いたす。天下の名玉だ。」

と懷中を兩手で探る。

五十六

「褌の結たまを解いてるんぢやない、此でも紙入だ、紙入だ。」と肩を搖りつつ、柳吉は、やがて衝と出した掌に例の翡翠を据ゑて居た。

「眞珠を銜へた蜥蜴が潛めば、其の淵は明月の如く明いと言ふんだ。此の玉を含んで居りや、釣

船も龍頭鷁首よ、……稗蒔の屋形船には過ぎてるだらう、何うだい。」と氣競つた眉して、玉を轉轉、お舟の媚めいた膝の前。

「まあ、一寸。……」と拾つて、撮んだ指が、白い蛇の、露の木の實を嚙んだ形で、船首の燈に、ト空へ翳すと、船は繪のやうな佐賀町裏を左に行く、遙に右の川岸の、もとの土州屋敷、城の塀を繞らす如き、郵船會社の屋の棟の黑雲に、燦として星の輝く風情がある。

吉兵衞も笠の下で、瞳を寄せた、が、忽ち慌たゞしい聲を沈めて、

「叱、叱、叱！」と制しを掛けた。

雨がぽつり、と、續いてぱら〳〵と翡翠に散つた。が、笠を着た船頭が降るのに驚く理由は無い。唯見ると、富家、豪商、大問屋が甍を揃へた、町の、裏續きの中に、一軒鎖したる戸の面影、欄干の眉、棟の黑髪靜に、露したゝる薄靄を練絹の如く袖垣に、白壁の膚露呈に、寢亂れたる美女の繪を展べたやうなが一處。其家の中二階らしい窓が靑簾を捲いて、障子が閉つて、燈の映る處がある。ト其の灯が仄に映し出す……水のひたひたとある石垣から、竹の籬に、見るも涼しい、綠なす羅を、葉形の波に搦めて掛けて、雪の腕、雪の胸、雪の頸、雪の面を、宛然半ば裸體の如く仲上りつつ、大川に裾を浸して、姿を抽いて、其の中二階を兩の手に、空に捧げたる狀見ゆるは、夜目にも顯く咲重なつた夕顏の白い花。雙の乳房は就中大輪の花二つ、燈をうけて靑く咲く。

上の障子に、朦朧と映る影を見よ。

柳吉は雨の雫の目を拭つて、且つ欷てつつ夢かと思つた。島田の形も肩型も、嘗つては菊川の店に視め、やがて、本所の露臺で得た、人形の夜鷹の形を、颯とぼかして、其のまゝに、影繪かと見えて映つたのである。

「叱！」と又吉兵衞の、もの〳〵しさ。

眼前、思ひも掛けぬ不思議は見つ、ために、魔の構へた大川の關所かとて、呼吸を詰めると、齊しく、お舟も、居直つて屹と視た。

「棟梁。」

「叱！」と壓へた時、船は最も其の中二階に近かつた。

唯、夕顏の花の上へ、薄墨の袖形が、裡から飜然と長く溢れて、人形の影を胸に抱込めた風情に蔽うて、すらりと立つた、姿で知れる若い娘の、黑髪の影法師。

するりと動いて、障子が一枚、さと開くと、吉兵衞はハツと笠ながら面を伏せた。處を差覗いた細そりした寢衣浴衣。太輪の銀杏返艶々しく、涼しい瞳冴々と、眉で拂つた、捲ける簾の薄萌葱は、雲の一叢晴るゝに似て、影白き月の細面に、夕顏の花は圓なる姿見であつた。

其の娘は、馴れた大川の夜の裝に、さして船にも目を止めず、片手に持つた、何やら一束にし

たものを、袖を拂つて、風を切つて、中空へ潑と投げると、低い雲が吸ふやうに見えて、忽ちばらばらと渡鳥の崩れて飛ぶは、風采を見て惟ふ折鶴の群にあらずして、懷紙の亂るゝやうに、一時雨を誘つて、風に乘つて、飜々と波に散つた。

五十七

時に、其の障子から欄干の上へ顏を出した婦が又一人ある。圓顏の此は年增で、品容の娘に較べて大分に直な處が、何うやら附添の女中らしい。婦が水指か何ぞ靑磁色した口の長いのを、傾けると、娘が、浴衣の袂を、飜然と肩に、――品が佳いので、お轉婆するとよりは、氣取氣のない仇なさが見えて、――ト引掛けて、腋明から誰憚からず、合せて衝と露呈に出した兩の腕が、夕顏の花よりも白く滑かに見える。其の手へ、女中が水指から羅のやうに涼しく水を注ぐ、と葉に、はら〳〵と音立てて、白粉の露と成つて散る。……

唯、此の風情を、お舟が船の正面で視い〳〵、珊瑚の薰を吸ふやうに前齒でカチ〳〵と二ツ三ツ翡翠を當てて鳴らしながら、スツと取つて帶の中へ辷らしたのも知らずに、柳吉は、やがて、其の娘が、然うして小緣に立ちつつ、肩にした片袖を颯と房りした銀杏返に輕く捲いて、

「まあ、涼しい。」

と空を視て、ひと聲、嚶迦の唄ふやうな、細く透る聲して言つたのまで、且つ見、且つ聞いて、下流に開いた。

美女の袖笠したのは、折から簾を亂して、雨が玉の如く降出したからであつた。が、尙ほ面白さうに顏を出すのを、女中が肩で遮つて、下に居て、すらりと障子を閉てると、其の髮だらう一面の大圓髷に成つた時、――船では敏捷い姉さんが、柳吉の投倒して置いた蛇目傘を開いて、半ば男に翳掛けて、相合傘で澄ましたもの。

「一寸、小父さん。」

「……」

「棟梁々々。」

「また始めたぜ。」

「ねえ、棟梁。」

「さあ呼べ。棟梁でも、親仁でも與一兵衞でも構はねえ。」と、笠を擧げると、凹たれた腰を早緒ぐるみ、しやんと張り、やゝ遠かつて水晶の宮の曇れる如き、夕顏の面影を彼方に見返りながら、

「あゝ、驚いた。」と、吻とする。

「何だい、今のは？……」

「お化かい、小父さん。」とお舟も聞いた。
「馬鹿な事を言ふもんぢやねえ。……お前さん達あ、然うやつて、傘の眞中から雌雄の聲をちやんぽんに、小父さん〳〵、棟梁々々。」――紐を搖つて口眞似して、
「と、替りばんこに發する工合は、年代記にもねえ、それこそ化ものだ。」
「御免よ、小父さん、些とお目觸りかも知れませんが、雨が惡いのさ。おや、ざあ〳〵降つて來た。」
「畜生、惡い雨なら下から降れさ。」
「濡れるよ、隨分、川からも雨の飛沫が。」とばさりと傾ける傘を流れて、さら〳〵と舷を傳ふ雫は、水面から逆に、水の小蟹、蜘蛛手にぞ走るなる。
冷いので、柳吉も、近々と一所に頭を突込んで、
「我慢してくれ、殺生の應報だよ。あやまるから……」
「うんや、あやまらせる大屋でねえ、はッはッはッ。あゝ、漸と我ながら聲が出た。全くいまのにや驚いた。」
「棟梁々々。」
「解つたよ、解つたよ。あの、二階のは何だつて聞くんだらう。……御覽の通りの辨天樣だが、

俺にや、時々酒を斷つとつておだまし申す、摩利支尊天より恐怖え。深川中のお關所でね、――稻村と言ふ大問屋の、あれは祕藏娘の、末娘の、お京さんと言ふ難ぶつだよ。」

五十八

「身體は眞珠、白玉だ。お前さん、卯の毛で突いたほども申分のある娘的ぢやあ無えけれど、難物だらうぢやねえか、俺の親父の代からのお出入先で、お剩に山の神が奉公した御店と來て居る。問屋がね、可しかね。
生憎と、山の神が何う胡麻を摺込みやあがるか。大方――お髮の艶が好くつて、房りして、長くつて、銀杏返にや勿體ない、惜いぢやございませんか、お京さん。――だつて、島田は重いもの、頭痛がする、――眞個に御持病で、口惜い、其の頭痛どのに、私に懸合はせて下さいまし、――なんてね、また嘘ぢやねえんだから、胡麻が胡麻にや成らねえがさ。可恐しく娘的のお氣に入りよ。尤も、茶室の手入から、物置の建增、裏木戸の拵へ直し、持長屋の修繕が、いづれも半年前に承はつて、お手當頂戴の、御不沙汰で。八方塞り蜘蛛の巢の掛つた米櫃へ、隅からちよろちよろと雀の扶持ほども流れ込まうと云ふのは、右の山の神の働きで、お京さんのお手箱から出る奴だ。

爲に成らない何かで、わけ知りの御新造や、御養子の若旦那ぢや拜みが利かねえ。ふッ、」
と呼吸を噴いて、吉兵衛は飛沫のかゝる雨を拂つた。
「何だ、養子が有るのかい。」
と柳吉が投げて言ふ。
「慌てちや不可え、養子のあるのは跡取りの大きい姉様。姉妹皆婦人でね。いづれも分家でそれぞれめでたく極りが着いて、いまのお京さんばかりが點の打手のねえ新娘なんだ……あの中二階は、母屋から庭を離れた、寮づくりになつてるがね、表店は總家内、人數の小百人も居ようと云ふ、拍子木飯の大店よ。……大旦那は、最う世を渡して湯治場めぐり。丁ど若旦那御夫婦も、修善寺かへ出掛けて留守だ。お京さんは出嫌ひの、毛蟲嫌ひの、田舍嫌ひで、あゝ遣つて離家の二階に閉籠つて、草双紙を讀んだり、手遊の人形を拵えたり……。」
――と言ひかゝると、偶と遮るやうに、
「棟梁。」
「小父さん。」とお舟も呼んだ。
「又呼ぶかい、はッはッはッ。そんな傘の化ものなんぞ、誰が養子の世話をするものか。狐の嫁入ぢやあ、あるめえし、夜鷹の待女郎が呆れるぜ。」

「おや、一寸。」
「まあ、默つて聞きねえ。婿に成る果報さは、あの美色でよ、深切で、行屆いて、鷹揚で、氣が着いて、意氣で、人柄で、おつとりして、一寸お俠で。――諸藝萬端、其の上に衣類調度は手を拊けば降つて來るのが、廻せば金銀と米の湧く石臼のお臺所持と云ふのを、雲霞に乘つたやうな錦の中で抱けるんだ。然も大旦那はじめ親類中が、譯が解つて居て、相應の緣談なら、養子には及ばない、勝手に嫁に出さうと言ふのだ。俺こそ酒の上の借たまるだがね、婿、養子の口は千の矢尖と降りかゝるんだぜ。」
「何うだらう、相談には成るまいか。」
と柳吉が言ひかゝる舌も引かず、
「痛い！」と驚く。お舟が、ぐいと抓つたので。
「いや、其の魂を入替えねえぢや駄目だ、……と云ふのが入かはらねえものさね。俺なんぞも魂を入かへりや、今夜は件の年增のお酌で、お杯頂戴の、あの寮の下座敷で寢られる處、辨天樣と階子の上下と云ふ果報を、心柄で板子の下は地獄にした。……實はね、お京さんの、夜番かたがたお人ずくなだ、寮へ泊りがけの御機嫌伺ひと、山の神をごまかして出たんだからね、見つかつて御覽じろ。（棟梁、昨夜はお樂み、）なぞとね、横顏の片靨、評判の婀娜なので、莞爾されると、

確に半日が處、生命が縮まる。」

吉兵衛は饒舌り止まぬが、小降りに成つて顏を出すと、何と、饒舌る筈だ、艫に蹲んで、德利を搖つて居る。

「や、棟梁。」

「引潮だ、一寸お小休みよ。」

と言ふ、其の潮に、浮び漂ひ、あの夕顏の石垣の下から、ぞろ〳〵と尾を曳いて、海月の如く、四五十枚に餘つて流れに寄る、其の舷を掠めたのを、七八枚、柳吉は寫眞を視た。

「はゝあ、千の矢尖だ、遣つたナ娘的？……婿養子の願人坊主。狀あ、投げられたあとで、お京さんに手を洗はれりや世話あねえ。」

吉兵衛が茶碗酒の舌鼓を打つて言つた。

拾ふと、髯を反らしたの、眉をびりゝと氣取つたの、燕尾服やら、羽織袴、故と上下縞ぞろひに、揃つて眦を下げた奴。——

お舟が一枚、かんてらの心を上げて、思はせぶりに、ざぶりと流れに油の臭を灌いだ手に、柳吉も瞳を寄せる、と呀、此の寫眞は、大間久一、裏に男爵の署名があつた。

應接室

五十九

取次が捧げた名刺を見ると齊しく、「これは！」と聲を出して、大間男爵が麻布の其の邸の應接室から、自分で出迎に出たのは珍客に違ひない。

……應接室に其時まで伺候して、一本並びに拔け上つた頭を下げては、べた〳〵御意を得て居た、袴なし紹の五紋の羽織をべら、と着流した老漢が、男が上靴をパッと蹴開いて椅子を立つて出るに連れて、ひよこ〳〵と後に跟いて、出狀に何となく惡狡しげな、金壺眼を——晝間見ると、黑い疣だらけの顏に——ぎよろつかせたのは、新道の猫萬で。

此の老漢が伺候したのを以て、高利の金を內々で融通するなどと思はれては、(少くとも男を猜むものの口から)——男は病身だつた彼の弟の死後、其財產を橫領して、剩へ、心弱き弟嫁の若い未亡人の操に迫つて、發狂せしめたとさへ傳ふるまでなる——暴戾なる權威と、巨萬の財產に對して氣の毒であるから、前以て辯じて置く。が、猫萬の手へ金子を廻して、利を營めばと言つて、老漢の高利を借りるやうな身代では斷じてない。……念の爲に、應接振を一寸書拔く……

「そいで、稲村ぢやな、あの、娘なあ。」
「お京様でござあするので。えへへゝ。」と、猫萬が追從笑ひで合の手を入れると、男が例の仰様の、うふんと遣つて、
「老漢々々。」
「えゝ、えゝ。」
「同じ事をな、京子と言うて貰はうか。京子とな……何うも私が奥さんにするやて、お京様では品格が好うないが。」
「えへゝ、御前、お言葉ではござあすれど、手前の方ではお京の方と申したいくらゐな事でござあして、と申すのが、面をお慰みに、膚をお戯れ遊ばされる思召の處は、丁とお部屋様でござあせうで。名義は奥方様なれど、お心持がな。……へゝゝ、えゝ第一此の、お目に留りました處が歌舞伎座とござあするにつけても、其處のな、もし、お伽に召されまする段取が、お妾様で。いや、何に致せい、町人の娘と生れて、殿様のお肌に近づきまするとと言ふは、實に早や以て果報な儀で。」
「うふん、あの美人が手に入りさへすれば、私の方では、小間使でも妾でも構はんが、先方が深川の大町人や言ふで、然うもなるまい。又あの娘なら奥さんにして差支へない、うむ、差支へな

いやて。そいで結婚せうと相談に掛つたのぢやが、老漢、其許も其の道は能う心得とるよつてに打開けるぢやが、實は其の強う待兼ねるやて。床杯をな。ふん〳〵、うふん、ふん、(と鼻まで啜つて、)東の鶉の五つめで、恁う團扇を持つて立たれた時は、廣い東京にもあんなのが有るか思うて、魂が蕩けたて、ふん〳〵、アハン、……で、返事は何うなるんぢやな、稲村のな。」
「手前は固より、また其の向々から申込んでござあするで、直接にまだ返事と申してはござあせねど、いんえ、御前、先方の返事より、豫め御當方に於て黄道吉日をお選び遊ばされて然るべきやうな次第で、御華族様のたふとさを持ちまして、大問屋とは申す條、たかが賤しき町人に御縁組遊ばされまする、……何んと、勿體至極も無い儀で。——以前ならば、富岡八幡宮御參詣のお途次、路次に於て目に着いた。あの女、差出せい、目を掛けて遣はすぞ。御一言で以て、お京どのは、齋式、沐浴、上に白無垢、間衣は緋紗綾、膚には緋縮緬で罷出でまするくらゐなものでござあして。……いや又お無垢な、色合と申すものが、堪らぬ、と言つたわけ合のものでござあして。」
「うふん、ふん、(肥つた圓い膝を捩りながら、)今時然うも成るまいが、しかし老漢、私が方からは彼方へ寫眞が參つとるで、返事も返事ぢやが、娘の寫眞が今日にも直ぐに參らぬとな、纏まる縁談と極つてからが、強い私が方の估券にかゝるで。」
「いや、もう其の儀は……」

——處へ、小間使の、ぽつちやりとしたのが取次いだ今の名刺であつた。が、人前も構はず、男は小間使の其の柔かさうな手首を握ると、颯と赤く成る耳を撮んで、

「好いこと聞くかな。」

ふん〳〵、うふん、と御機嫌で出たのである。

六十

出ながらに、男は後に從いた猫萬を見返つて、

「ゆつくりしなさい、まだ話もあるやて、一所に食事もせう。」

「えゝ、恐れ多い儀で、」と膝の處まで手を下げて、小刻の摺足で、猫萬は玄關わきの小部屋へちよろり、其處は、家扶なんどの控室。

其の家扶であらう、糊强の單衣の肩を突張つて、ぐたりとした嘉平次で式臺を右手へ下つて手を支いて畏まつた、其の正面に眞直に立つて夏帽を手にしたのは、峰桐太郎である。

と爰に更めて名告るのに張合ひの無い程、質にくすんだ扮裝の、縞ものに紹の羽織、袴を着けて紺足袋迄は仔細ないが、歩行くのに人通りが少いと小石を蹴飛ばす癖がある上、一々下を向いて足許の障礙物なんぞ氣にする質でないから、俎造りの散歩下駄の前の角が、兩方とも、パクリ

と缺けて、キザ〳〵の入つたのを、讃めると惡鬼の面を蹈んで突立つた白面の多聞天の概がある。雖然、誰が目にもいけぞんざいな書生ッ坊とよりはふめない處へ、雨を飲み、埃を吸つた上に、したゝか炎天に曝された夏帽の色が、見ても咽喉が乾くほど赤黑い。で、訪問客は一々爪尖から頂邊まで見透すのが職分の家扶をして、平伏せしむべき風丰では決してない。——家扶がのつけに、「御前樣は御外出。」を啖はしたは言ふにも及ばぬ、が名刺を出されて、「こりや、御當人で、」と訊いて、其の然る由を答へられて、はッと言つて、慌てて引込んで——其が家風の——故々小間使の手に渡して取次がせて、ひよこ〳〵引返して來て、「唯今申上げましたで、少々お待ちを。」で、右の通り、しんねり强い袴腰を挫折つて畏まつたと言ふので、大概想像が着く——永年勤める家扶の目が其だから、峰は此の邸へは初見參。且つ客として重きをなして、少からず敬意を拂はるゝ事の。——

理由は、男に年紀の十六七も違ふ、と云つても、二十を超したが未だ少い妹姫が一人あつて、當大間家より高輪へ人橋を掛けて、去年の暮から今年の春、此の夏に渡つて、峰に緣談を申込んで、悶え焦るばかり、懇望篤請の眞最中。——望み、賴み、待ち、急ぎつつある緣談の當の婿君が、初對面の刺を通じて、ソレ其の式臺に、すつくと立つて居るのであるから。

館中の空氣は、急いで出迎ふ男の疊障りとともに響きを打つて、すた〳〵と顯れると、

「やあ、此は。」と腹を突出し兩手を擴げて反りながら、目金で見當を着けて、丸い顏を飯櫃形に相格を崩した所は、抱上げもしさうな劍幕で、

「さあ、貴下、さあ、まあ、何うぞ。」

「突然出まして。」峰はきちんと會釋した。

「一家も同樣、ふん、うふん、ふん、挨拶も何も無いやて、さあ〳〵、」

と何やら、とつぱくさして引返す。男爵の待遇振は、我が家の財産を歡迎するのである事を知つた峰は、其の意を體して、成りたけ身についた金銀の重量を見せるために、肥つても居ない、緊つた其身を、故と、づど〴〵と足を重たく運んで通る。……玄關を横に入りしなに、屹と小部屋を顧みて過ぎる時、大な光る目が、目金の鞘に潛めばとて、猫萬を見はぐすものか。

六十一

「御住居の方は嘸ぞ御閑靜で。何でやすか、今日はずうとお宅からお越し下さつたかな。」

けば〳〵しい裝飾に白晝の陽の光を青葉越に鏤めた應接室に、主客ともに殿堂裡の椅子に着き、峰は鑿にして白く刻める如くに、男は膠以て黃に描ける體に相對して、初對面の會釋二言三言交さるゝとともに、男は安樂椅子を搖寄せて、親げに恁う言つた。……住居と言へば、兩親のいつ

れ言傳があらう、に續いて、緣談に及ぶやう、早や其の答を促したのである。

滿面に黃なる笑を含んで、仰向いて美味を待つやうに、男が口を開けて待つにも係はらず、峰の言葉は微吹く風のやうなものであつた。

「勤めさきからお邪魔に出ました。」

「ほ、お勤務先、成程、日曜ではありませんなあ。いや、御精勤ぢやと承はりました。何、御身分上、お樂づとめでもお宜し處を、事務に責任をお持ちに成るやて、卽ち西洋流の規律正しい處で。ふん、うふん、御外遊の價値は然した事にも一々に顯れますやて。——何うもな、恁う言ふ時世に成りましては、一度西洋を見んことには、根から人間あきまへんで。(と時々變な口調が交る。)私も、しかし、これ、音樂は强い此で國粹保存論者でな、峰さん、」

と呼んで親げに、

「しかし、貴下は數年の御洋行やで、最早や西洋の音樂で無うては明きますまいかな。」

峰は高臺の風にたゞ涼しさうな顏をして、

「何ういたしまして、何も存じません、——知らないばかりぢやないのです、聞いても些とも分りません。」

「なんのとな、仰有る……ところが偉い！」